法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-02-05

注釈『ふらんす物語』 : 遊歩者荷風のリヨン

加太, 宏邦 / KABUTO, Hirokuni

(出版者 / Publisher)
法政大学多摩論集編集委員会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Hosei University Tama bulletin / 法政大学多摩論集
(巻 / Volume)
20
(開始ページ / Start Page)
199
(終了ページ / End Page)
271
(発行年 / Year)
2004-03
(URL)
https://doi.org/10.15002/00003148

注釈『ふらんす物語』
― 遊歩者荷風のリヨン ―

加　太　宏　邦

はじめに

本稿は、永井荷風作『ふらんす物語』（1908年）における、リヨンに関する記述部分をとりあげ、実見的・実証的に注釈をほどこすものである。すなわち、伝統的な意味での語義的、書誌的、校訂的な注釈を目的とするものではない。『濹東綺譚』の作者、あるいは『四畳半襖の下張り』の作者（おそらく）として知られている永井荷風（1879―1959）は青年時代に銀行員としてフランスのリヨンの町に8ヶ月あまり住んだ。明治40年夏から41年初春にかけてである。この間の体験を元にして『ふらんす物語』の中の多くの掌編は書かれた。

このリヨン時代については従来の荷風研究ではほとんど空白のままで、いったい彼はどこに住んだか、どんな職場で働いていたのか、どこをどう歩いて通勤したか、どこを散策したか、何を見たかなどについて、実証的に研究されたことはほとんどなかった。ここでいう実証的というのは、いわゆる文学散歩などとは異なり、資料的な探究と同時に、なにより徹底的に身体的追体験を通して『ふらんす物語』とおなじまなざしでリヨンの町を検証しなおすことである。

『ふらんす物語』に展開される記述は言うまでもなく作品であり、創作である。それは『西遊日誌抄』についてすらおなじことである。しかし、このことは、記述内容がすべて想像の産物であるという意味ではない。『ふらんす物語』における叙景や展開されることがらの多くは荷風の観察、経験に基づくものである。荷風を読み解くにはリヨンにおける荷風の現実に立ち入らなくてはならない。

ここでこのような形式の「注釈」を試みるのは、この作品が日本語で書かれたものでありながら、ほぼ100年昔の異郷を舞台としているという単純かつ特別な理由によるからである。言うまでもなく、空間的にも時間的にもはるかに遠いテクストからわれわれが理解できるのはじつは単なる一次的なレベルでの表象（ほとんど辞書的な意味）でしかない。この制約があるためコンテクスチュアルな分析が加えられても、それは低次のそれに留まらざるを得ない。ここで要請されるのは、テクストの表象がまとっているであろう荷風の体験、実見した出来事、人々、生活環境、背景になったリヨンの町、また主人公の感懐など“実際のリヨン”を極力リアルに提示して（写真を掲載するのもその意図に沿うためである）、あらたな荷風の読み取りの再構築を行うことなのである。この「注釈」は資料であると同時に再構築の実践である。

この注釈作業を「考古学的」手法と仮に名づけておく。『ふらんす物語』について言うなら、荷風にまつわる百年前のリヨンを徹底的に掘り起こそう。発掘されたモノを分類し、その意味を解釈しよう。考古学の発表の文法は物証と推定と周辺文献で成り立つ。そこで直に確定できる事柄もあるが、多くは（合理的）推理と推定で成り立つ。今ここにある石の破片が斧と推断され、そこから当時の木材加工品や家屋への推測が広がり、さらには生活の様態の想像へいたる。モノと実態との相関を筋道立てて構想する刺激的な作業と言えよう。

ここにおいても、この類縁的「考古学的」解析により、荷風の見たものや体験したことは、さまざまな資料的断片から再構築され、表象は豊かに意味作用のレベルをあげていく可能性をもつようになるだろう。そこからはじめて荷風の文学的世界の構築技法との投影関係も明らかになると期待される。

注　　釈

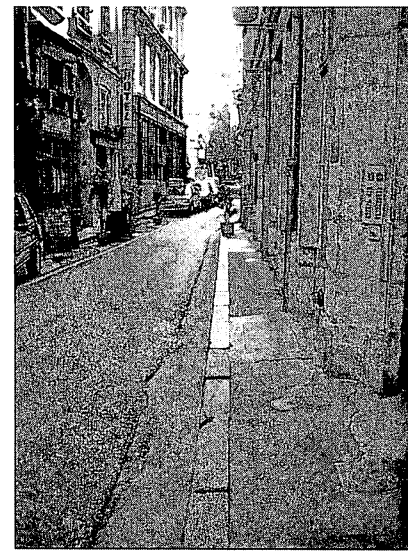
『ふらんす物語』には多くの版が存在する。本稿で注釈に使用するのは新潮社文庫版（改版）である。時に、同じ新潮文庫の旧版（原文通りの旧仮名遣い）、岩波書店の『全集』版（初版に準拠）や岩波文庫版（初版に準拠するが仮名遣いを改めた版）などを参照するが、異同が注釈に直接関係する場合以外は常に新潮文庫（改版）を用いた。対象になるのはつぎの作品・記述である。リヨンを舞台にしている部分のみを取り上げ、あえてパリやその他に関する記述は扱わなかった。『西遊日誌抄』については岩波書店『荷風全集』（第4巻）を用いた。

「序」
『船と車』（初版では『あめりか物語』付録の「フランスより」に収められている）
『ローン河のほとり』（同上）
『秋のちまた』（同上）
『蛇つかい』
『晩餐』
『祭の夜がたり』
『霧の夜』（初版では『除夜』）
『橡の落葉』に収められている「休茶屋」「ひるすぎ」(初版では「午すぎ」)「舞姫」
『西遊日誌抄』

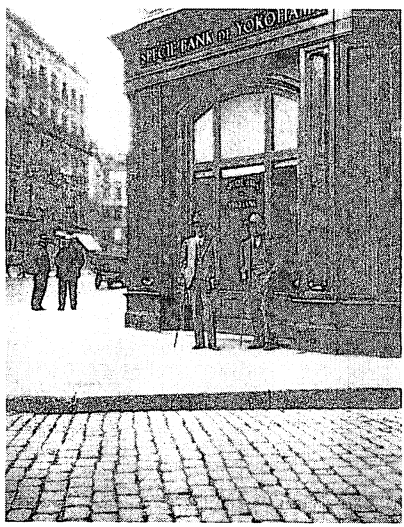
注釈項目の見出しの後ろに括弧付けで新潮文庫（改版）における該当部分のページを記す。「序」については、ノンブルがないので「序」とのみ記す。『西遊日誌抄』については日付けを用いる。また注釈文中の［写真○］は、対照する写真や図の番号を表す。注記文なしで写真のみを示す項もある。

1．横浜正金銀行（序）　1880（明治13）年に横浜に開設された国立銀行条例準拠の銀行。正金というのは、言うまでもなく現金の意味で、当時、日本では外国為替システムが確立していなく、また支払い・受け取りに際して、日本に不利にはたらくケースが多いため、現金での貿易決済を行うことを主たる業務とする特殊銀行として設立され，同時に為替決済の専門銀行となる。当時、外国貿易の取り扱いは、輸入については95パーセント、輸出についても94パーセントは、外国商館が独占していた。しかも日本の輸出品の中心は、生糸であり、かつ、明治10年ごろは、ヨーロッパでの絹糸の需要は急増、高値をつけはじめていた。このタイミングに、三井がいわゆる御用商人業務を、新設の横浜正金銀行にひきわたし、そこで同行が国家的な貿易決済銀行として誕生したのである。英語名はYokohama Specie Bank。当時、正金銀行は、フランスにおいては、パリ支店より49年も昔にリヨンに支店を開設したことはかなり大きな意味がある。この町が、絹製品取引の世界的な中心であり、日本にとっては、貿易上重要な町だったからだ。リヨンの絹織りは、『ふらんす物語』の内容にもふかく関係してくる。正金銀行の社史（「横浜正金銀行全史」）によれば、リヨン支店は、出張所設置が1882（明治15）年5月で、支店としての営業は1900（明治33）年1月1日に開始している。荷風赴任の7年前である。ついでに、同書によると、リヨン支店は、1931（昭和6）年7月5日に廃止され、と同時に、パリへ支店が移転開設されるようになる。このころのリヨンには、1863年創業のクレディ・リヨネ銀行本店（その資金量で、当時イギリスのロイド銀行をしのぎ、世界一であった）をはじめとして、45の銀行がひしめきあっていた大金融市場でもあった。当時のリヨンの銀行事情について、リヨンのある歴史書には「“極東の銀行”が絹の融資・投資業務をしていた」とある。当時リヨンにあった「極東の銀行」と言えば、それに該当するのは、香港上海銀行H.K. & Shanghai Banking Corporationと 正金銀行の二行である。なお現在は日本の銀行はリヨンにはない。横浜正金銀行リヨン支店は、La Specie Bank de Yokohamaという英仏混合の名前であった。正金銀行リヨン支店［写真1］は、ラルブル・セック通り（rue de l'Arbre-Sec）19番地にあった。この通りは当時からいわゆる路地で［写真2］、絹織り製造関係の家内工業や小商いの店が並んでいた。通りは、その半ばで、レピュブリック通りに分断され、東半分の入ったところに銀行はあっ

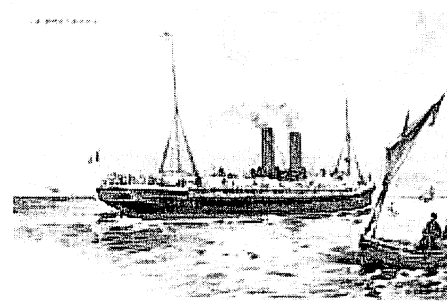
[1] 元「横浜正金銀行リヨン支店」の建物



[2] 路地・ラルブル・セック通り



[3] レピュブリック通り時代の支店
支店長小野政吉（右）と瀧澤敬一

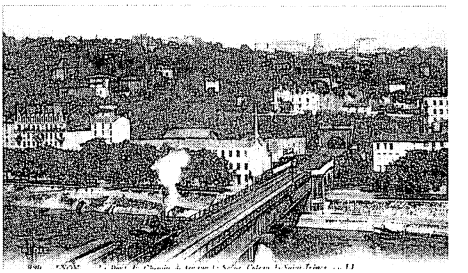


[4] 「ブルタンユ号」（ブルターニュ号）
ニューヨークからル・アーヴルへ

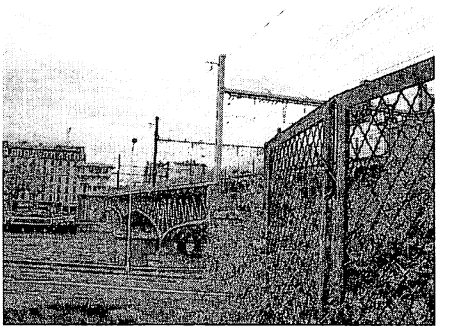
た。建物は今日も全くかわることなくある。銀行前の道幅は狭く、また今も、車が通り抜けできない。元銀行の前には、今は桜の木が植えられて、そこを利用して、向かいの“エトワール・オペラ”という小さなレストランが夏季にはカフェテラスを開いている。ちなみに食堂の隣は現在は散髪屋と靴屋（製造）が並んでいる。散髪屋の主人によると、この路地は、戦前までは絹織り関係の商人が多く住んでいたとのことだった。このような細い道に木が植えられた理由は、この通りの名前の由来と関係している。この通りは、リヨンでももっとも古い通りのひとつで、すくなくとも、1373年に、すでにこの名前がついていた記録があるという。名前の由来は、やや真偽があいまいだが、それによると、長年、この通りの入り口に植わっていた木がある日枯れてしまったので、その日から通りの名前が、ラルブル・セック（枯れ木）通りになったという説と、目印に枯れ枝を掲げていた店の通称からきたという説がある。1907年当時の1階の入居者は、横浜正金銀行と「絹関係業者総合本部」の2つであった。正金銀行は1907年版の『リヨン住所録』に、支店長名と電話番号（当時めずらしかった）を掲載している。ちなみに、荷風の2年後に赴任してきた滝澤敬一によると、銀行の室内は「狭く、うす穢く、陰気」だった。行員数は、唯一分かっている後年（1927年7月）のデータから推測するほかないが、おそらく日本人6名、外人雇7名、合計13名程度の小規模な構成だっただろう。隣り合わせにあった「絹関係総合本部」というのは、リヨンの各種の絹織関係の団体（製造、販売、商社、小売など）を統括する上部組織で、リヨン絹織物業界を支える巨大な組織であった。本館はミシェル・セルヴェ通りにあったが、その別館がこの番地に居を構えていたのである。現在、この19番地の建物には、社会公共扶助の組織と広告・雑誌出版会社と不動産管理・資産運用コンサルタント会社とちいさな証券会社の4つの組織、会社が入っている。その上階は、当時とおなじようにアパートになっている。正金銀行は、リヨン支店の所在地を幾度か変えている。出張所時代の1882年から1885年まではヌーヴ通り（Rue Neuve）26番地にあった。現在は、“ピシェ・デタン”というレストランになっている。間口も小さく、ほとんど銀行の支店になりそうもないぐらいである。出張所というより駐在員の連絡事務所程度ではなかったか。1886年から1903年までは、デュ・ガレ通り（rue du Garet）14番地である。なお、この間、1900年1月から支店となっている。現在は、ここで、絹織物を主とした衣料品製造販売会社が営業している。その後、1904年から1923年まで（すなわち荷風が勤めた時代を含む年）は、すでにのべたラルブル・セック通り19番地である。この通りにあった時期が一番長い。その後、1924年から、パリへ移転するまでの7年間はレピュブリック通り（Rue de la République）5番地である。[写真3] この通りは、リヨン市で、当時も今も一番繁華な大通りである。5番地の建物は、現在、左半分がチョコレート屋、右半分がパリバ銀行（BNP Paribas）である。荷風も「リヨン市中第一の大通りリュウ・ドラ・レピュブリック」とか「商店や銀行や勧工場の立ち続くルユー、ドラ、レピュブリックの大通り」と描写している。この記述でわかるように、この通りこそが銀行を出すにふさわしい通りだったのだ。実際、フランス国立銀行リヨン支店は14番地に、ソシエテ・ジェネラルは6番地に、そして当時フランス最大の資金量をほこるクレディ・リヨネはその本店を18番地に軒を連ねて店を構えていた。そのため、横浜正金銀行は、このレピュブリック通りに進出すべく、長年かかって、この周辺をめぐって移転をつづけ、やっと最後に5番地に店を確保したというような来歴をかんじさせる。銀行にとって、この通りは、プレスティージュなのである。そのことは、今も変わらない。(→注93)

2. **仏蘭西里昂に赴き此処に留まるところ十箇月余なり**（序）荷風はリヨン（里昂）に1907年7月30日から1908年3月28日までの8ヶ月滞在。そのあとパリでの2ヶ月の滞在（3月28日から5月28日）を合わせると10ヶ月になる。滞在の季節が、夏が少しと主に長い秋と冬であったことは注意しておく必要がある。これはパリがわずか二ヶ月であったにもかかわらず、4月、5月と春の好季節であったこととときわめて対比的でこの季節感は『ふらんす物語』における両都市の心象風景に大きな違いをみせている理由ともなっている。

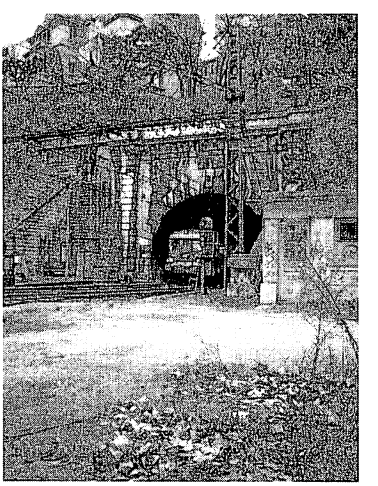
3. **紐育を出帆**（12） 1907年7月2日に転勤命令を受け、1907年7月18日午前9時、ニューヨークを出帆し、フランスのル・アーヴルの港に7月27日22時着。荷風の乗った船はブルターニュ号（La Bretagne）[写真4] Compagnie Générale Transatlantique 社所有の客船である。1885年に建造・進水。7112トン。2本マスト、2本の赤い煙突を立てていた。長さ160メートル、幅17メートル、最高速度17ノットの蒸気船である。荷風は、「中等」（2等）船客であった。



[5] サン・ティレネ丘のトンネルを出ると鉄橋



[6] 「一条の鉄橋」　橋の先は駅舎



[7] トンネルから抜け出る列車

4．**ガール・ド・リヨンの停車場からマルセイユ急行の列車に乗る**（19） 1907年7月29日19時20分発夜行急行列車。パリ・リヨン間は512キロ（当時のルート）、夜行は8時間少しかかった。運賃は1等で57フラン45サンチーム、2等で38フラン80サンチーム、3等は25フラン35サンチームであった。荷風は2等車に乗っていた。

5．**窓際に席を占め**（19）進行方向に向かって左側に座ったと思われる。旅程後半でソーヌ川が窓の外に見えてきたこととリヨン到着に際して市街地が窓外に見えたことがその理由である。

6．**折から昇る半月**（22） 1907年7月29日深夜の月齢は19.2だったので実際は満月と半月の中間ぐらいだった。

7．**何でも余程大きな河のほとりと想像せられる**（23） ソーヌ川である。当時のパリからの列車はシャロン・シュル・ソーヌの町（パリから382キロ）で北東から流れてくるソーヌ川と邂逅し、そのあと川の右岸に沿ってリヨンまで（130キロ）走る。荷風は知っていて、あえて川の名をぼかして表現したものと思われる。

8．**突然、列車が**（26） 列車は、実は、橋の直前にサン・ティレネ丘のトンネルを通過、トンネルの出口はすなわちすぐ橋で、橋を渡りきったところが駅の構内なのである。[写真5] つまり、「突然…目を覚まして見ると」というのは、文飾だと分かる。この100メートルばかりの小さな橋を渡っている響きで目を覚ましても、すでに列車は駅の構内に入っているからである。仮に時速36キロの徐行でも橋上はわずか10秒である。(次注を参照)。

9．**一條の鉄橋を渡る響き**（26） 鉄橋は、ソーヌ川に架かるラ・カランテーヌ橋。[写真6] ここをわたってリヨン・ペラシュ（Perrache）駅へ到着する（現在のパリからの鉄道路線は、リヨンの町を東から入り、新駅パール・デュを経て、町の南を迂回しローヌ川の鉄橋を渡ってペラシュ駅に入る。往時と逆から進入するのである）。この鉄橋の現況から、目を覚ますような響きがあったとは思えない。荷風によれば、目を覚まし、次に街が見えた、という順序で、荷風のリヨン「遭遇」がおこったことになるが、それは前注で述べたようにほぼありえない。では実際はどうだったか。おそらく荷風はリヨンが近づいたことを一つ手前の駅ヴェーズあたりで知り、ぼんやりとは目を開けていて、窓のそとを見るとはなしに見ていたのだろう。ところが、列車は、リヨンに着くかとおもう直前にトンネルに入ったのだ。このトンネルは約2800メートルあるが、駅も近いこともあって、ほとんど徐行をしていただろう。つまり、窓外の暗闇の時間がかなりあった。そして、トンネルを抜けた。[写真7] 抜けると、突如としてというように、窓の外、左手に、約10秒間ほど川と町が開けたのである。[写真8] この明暗の大きな落差（月光とトンネル）がリヨン邂逅の第一印象としての「非常に明るく」を感じさせたものと思える。すでにここに荷風の風景描写の特色が見られる。すなわち、巧みな時間と空間の圧縮と対比である。ぼくたちはリヨンの風景を荷風の叙述にあわせてこれから見ていくことになるが、この卓抜な文章技法に遭遇し、しばしば驚嘆することになるだろう。

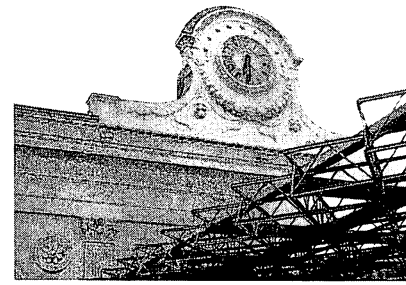
10．**停車場の時計**（23） 荷風は手元に時計（ニューヨークで餞別にもらっていた）があるにもかかわらず、あえて駅舎の正面の時計を見上げる描写にしている。これも文飾である。この時計は現在も同じ位置で、時を刻んでいる。[写真9]

11．**夜の三時半、夏の空は星消え月落ちて、もう白々と明けかゝるのであった**（23） 1907年7月30日のリヨンの日の出は5時20分。「天文薄明（クレピュスキュール）」（太陽高度が地平線下18度に達した時点）の開始は3時9分。周りの景色がぼんやり見えるようになる「航海薄明」が4時1分に始まるので「3時半」では「明けかかる」と言うには、やや早すぎる。このあたりも荷風の文飾である。「半月」とか「三時半」という切りのよい数字の使い方を荷風は好むことがわかる。

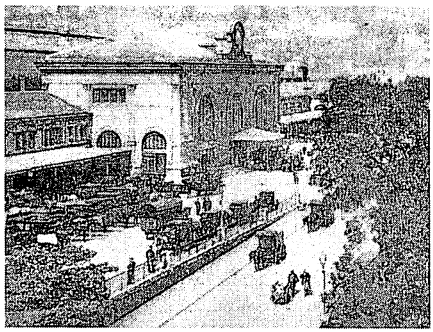
12．**辻馬車に乗って**（24） この辻馬車は駅前で客待をしている。[写真10] 一人1.5フラン、ただし、深夜12時から朝6時までは50サンチームの割り増し料金がついた。荷風は、この代金は、銀行に旅費（転勤費）として請求はしていない。

13．**川岸のと唯あるホテルの一室に逼入った**（24） 『西遊日誌抄』の7月30日に「ソオン河上の一旅亭」に宿泊したと記している。ソーヌ川河畔に、当時ホテルはいくつかあったが、駅から辻馬車で行ったこと（すなわち駅至近でないこと。ちなみに、駅前には当時でも二十軒ほどホテルがあった）、リヨンの地理に明るくなくても、翌朝かんたんに銀行へ出頭したこと（つまり銀行と近かったこと）、また労働者向けの簡易ホテルでないことなど、いくつかの条件を勘案して、もっとも可能性の高い

［8］ 荷風がはじめて見た窓外のリヨン
（ほぼ同じ位置からソーヌ川上流の市街地）



［9］「停車場の時計」



［10］「辻馬車に乗って」
ペラッシュ駅前に並ぶ辻馬車と駅舎の「時計」

［11］「唯あるホテル」
“グラン・トテル・デ・テロー”

のはおそらく“グラン・トテル・デ・テロー”（Grand Hôtel des Terreaux）であろう。［写真 11］ランテルヌ通り（Lanterne）16 番地。主人の名前はラフォン。銀行まで 400 メートルの位置にあるこのホテルには当時まだ少なかった電話が引かれていた。31·02 番。なお、このホテルは今も同じ場所に同じ名前で現存する。現在は客室数 55 の 3 ツ星ホテルである。荷風は、この宿に、1907 年 7 月 30 日、31 日、8 月 1 日と 3 泊したのだろう。

14. リヨンの市街（26） 当時のリヨンの町の市街地［地図 12］（行政的市域とは別）は、南北がほぼ 4500 メートル、東西が 4000 メートル程度である。今の東京にこの区域を重ね合わせると、新宿と池袋を結ぶ線を 1 辺とする方形の中に収まってしまう程度であった。人口は 47 万 2114 人（1906 年 3 月 4 日国勢調査）。今では、全市域は当時に比べて拡大したが、それでも面積で言うと練馬区の 1 区より狭く、人口でいうと葛飾区よりやや多い程度である。当時のリヨン市は第一区から第六区までの 6 つの行政区（現在は 9 つ）に分かれ、荷風の勤める銀行は第一区に、荷風の下宿は第六区にあった。当時も今も、パリ、マルセイユに次ぐフランス第三の大都市。この街の規模はのちの『日和下駄』や『墨東綺譚』の遊歩空間の規模とどこか通ずるところがある。

15. ローン河（26） ローヌ川。［写真 13］スイス・アルプスから発してリヨンの市中を抜けて地中海に注ぐ。市内での川幅は平均して 200 メートルほど。それに対して同じく市内を貫流するソーヌ川はフランス北東のヴォージュ山塊に始まりリヨン市内南端でローヌに吸収されるように合流する。ソーヌ川（→注 33）の川幅はほぼ 100 メートルと狭い。この二つの川の姿とイメージはリヨンの人々にとっては大きく異なっているが、荷風にとってもローヌ川は通勤で毎日渡る川であり、心象を仮託された固有の相貌をもった川として表現される。ローヌ川についてのもっとも多い表現は「濁りに濁って、今にも高い石堤を崩して溢れ出そうに漲渡り、その吠える水音は夜更なぞには物凄く街中に響く」（『秋のちまた』）などのような不安をさそう荒々しいイメージである。類似の表現が『ふらんす物語』の中には頻出する（10 回）。一方ソーヌ川についてはまず橋の固有名が一度もでてこないこと（ただしそれと推定できるフイエ橋（→注 34）があるが）に加えてさらに、荷風にはローヌ川に比べてソーヌ川の情景描写がほとんどないことも特徴である。彼の通勤圏でなかったということもあるが、やはり、ソーヌ川が荷風独特の“演出”に使用されにくいことが大きな理由であろう。また、ソーヌ川は、上流の郊外の村々への舟遊びの対象とされている。すなわち水上航行の体験がある川なのである。このためにソーヌ川での体験は穏やかでやさしい風光のなかに描かれる。これもローヌ川には欠けているという意味で決定的に違う点である。ソーヌはあくまで川岸を「遊歩」する対象である。一方ローヌは橋上から流れを観察する対象であることが多い。このようにさまざまなところで荷風は異なる表象を両河川に担わせ『ふらんす物語』を構成している。（二本の川の実態的な違いは→注 24、37 など参照）。

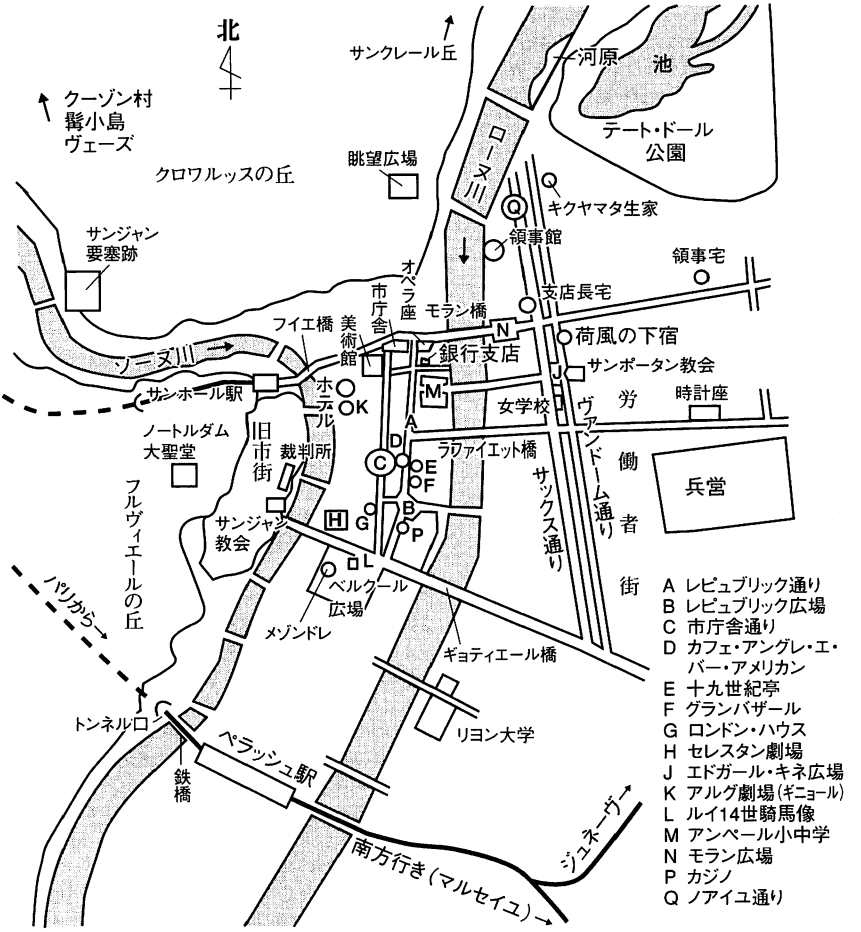
16. 河原の小砂利を蔽う青草（26） 市街地でローヌ川の河原［写真 14］［写真 15］がある場所は極めて限られているので、荷風がどこに「身体を投倒し」たかがほぼ正確に推測できる。すなわち、ラ・ブークル橋近辺から上流にかけての左岸のほんの一部である。リヨンは長い歴史を通して常に左岸へ氾濫するローヌ川の水のため左岸（東側）は無人の荒れ地だった。19 世紀も終わりになりようやく上流に堰が構築され、護岸が行われて、橋が架けられる状態になった。それは荷風がリヨンに住むほんの 7、8 年前のことであった。つまり、荷風が寝転ぶ河原は、その氾濫する自由な川の最後の名残というわけである。その名残は百年後の今日にもわずか残されている。

17. 二週間あまりになる（26） 1907 年 8 月 15 日前後だと考えられる。→注 25

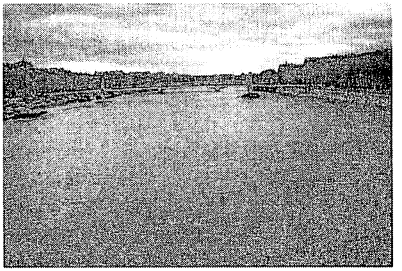
18. 別れた女（26） 有名な娼婦“イデス”。イデスはその名前を、Edyth Girard と綴るが、ニューオリンズ辺りの生まれというから、もしかしたら、先祖はフランス人だったかもしれない。エディト・ジラールと発音すれば、フランス人に比較的よくある名前だ。ただ、彼女と荷風は、語るときも、手紙でも英語を使っている。『ローン河のほとり』はアメリカで始まったイデスとの関係が断ち切られその別離に哀しむ主人公（荷風）という装いになっているが、それが“創作”であることは『荷風思出草』にあけすけに語られていることばでよく分かる。そこでは荷風は「いいあんばいに来ませんでした。来ないようにいろいろ話はしておいたのだからね。」（笑）と発言しているのである。

19. 里昂の町端れ（26） →注 14

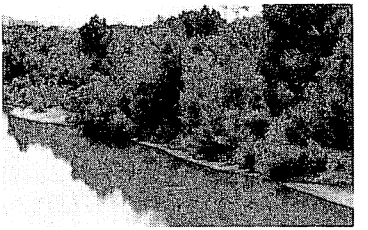
20. クロワ・ルッス（26） Croix-Rousse。リヨン市の北の壁をつくるように伸びている坂の町で、昔は



［12］荷風のリヨン1907年（地図）



［13］「ローン河」（ローヌ川）



［14］「河原の小砂利を蔽う青草」
ローヌ川左岸に残る河原

リヨンの城壁外だったが、荷風当時すでにリヨン市第四区に編成されていた。荷風の寝転んでいる河原の正面にあたる。荷風は、この丘を毎日、遠景として見ていた。銀行への行き帰りには、コレージュ橋かモラン橋をわたる。このときローヌ川の上流側に立ち上がる丘の斜面に家々が張り付いているのが視界に入る。[写真 16] 銀行の近くの市役所の横から坂道ははじまっている。徒歩でも、軌道電車でも、"フィセル" と呼ばれる索条（ケーブル）でも上がれた。料金は片道 10 サンチーム、往復 15 サンチーム。(今はケーブルはなく、ラックレール方式で急勾配を登るめずらしい地下鉄が「市役所駅」から出ている)。標高差が 77 メートルある小さな丘である。荷風の描くリヨンの風景は、川と丘を中心に構成される。リヨンの町の西方にはフルヴィエールの丘（→注 105）が、北にはクロワ・ルッスの丘があって、街の景観にメリハリをつけている。前者は、その頂上にバジリク教会があることから、"祈りの丘" とよばれ、後者はかつて絹織の家内工業を営む職人たちの集落があったので "労働の丘" とよばれた (歴史家ミシュレが「祈る山、働く山」と名づけたことに由来する)。二つの丘のうち、言及が多い点からからみると、荷風好みの風景の好みはクロワ・ルッスの方にある。→注 71

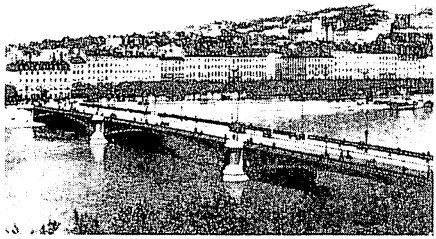
21. サン・クレール（26） Coteau Saint-Clair。[写真 17] クロワ・ルッスから北に続くローヌ河畔（右岸）の丘の街。現在のカリュイール・エ・チュイール町の東南の斜面にあたる。荷風が寝転んでいる河原の右前方である。

22. 鼠色の屋根（27） この時代は筒を半分に割ったような半円の瓦 (いわゆるカナル型) か平型のスレート瓦が支配的だった。煤煙で汚れきっていて町並みの色調を暗くしていた。いまもこういう "鼠色" の瓦屋根は旧市街にはわずかに残っている。しかし、現在のリヨンの街の全体の印象は、高いところから見下ろすと、とても軽やかなテラコッタの赤い屋根瓦が連なり、むしろパリなどと比べても、はるかに南国風の印象を与える明るい街というほうがふさわしいだろう。いずれにしても「鼠色」というのは荷風好みの心象の色調とも言える。→注 45

23. 円い寺院の塔（27） 荷風の勘違いあるいは「意図的」勘違いである。川沿いには円い屋根の教会堂はない。右岸には 2 つの円屋根の建物があり、左岸にもひとつ円屋根が見えるが、これは上に十字架を乗せている病院（リヨンで最古最大の病院 "オテル・デュー"）の屋根とリヨン大学の大屋根である。[写真 18] 荷風は別のところで「リヨン大学の円屋根が黒く聳ゆる」(→注 101) と記しているので、知っているのである。荷風の作為的な「風景作り」には卓抜なものがある。

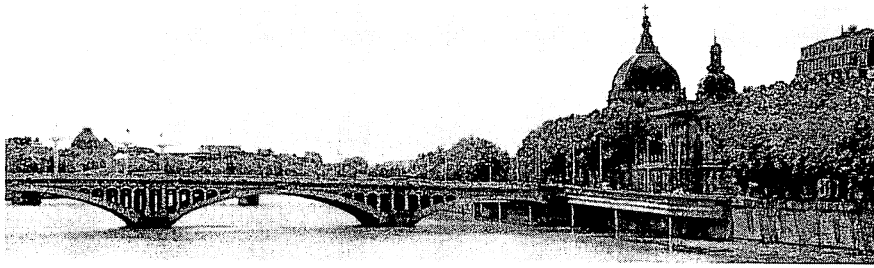
24. 幾条ともなく架かっている橋（27） ローヌ、ソーヌ両川には、荷風の当時には、市内では上流から下流へ次のような順序で橋が架かっていた。(カッコ内は建設年。あとのカッコは現在の橋名)。ローヌ川には、ブークル橋 Boucle（1903 年）279 メートル (Churchill)； サン・クレール橋 St-Clair（1855 年）235 メートル (Lattré)； モラン橋 Morand（1774・1886 年再建）222 メートル； コレージュ橋（人路橋） Passerelle du Collège（1840 年）228 メートル； ラファイエット橋 Lafayette（1890）214 メートル；オテル・デュー橋 Hôtel-Dieu （1839 年）218 メートル (Wilson)； ギヨティエール橋 Guillotière (市内ローヌ川最古の橋。18 世紀) 283 メートル； ユニヴェルシテ橋 Universit（1903 年）257 メートル； ミディ橋 Midi（1891 年）223 メートル (Gallieni)；鉄橋。ソーヌ川にはガール橋 Gare (1842) (Masaryk) 185 メートル (吊橋)； [当時なし (Clémanceau)]； ムトン橋 Mouton（1831）（今はない）118 メートル（吊橋）； スラン橋（別名アランクール橋）Serin/Halincourt（1789）105 メートル (König)；[当時なし (L' Homme-De-La-Roche)]； サン・ヴァンサン橋 St-Vincent（1832）82 メートル（人道吊橋）； フイエ橋 La Feuillée（1831）92 メートル（吊橋）； シャンジュ橋 Change（1846）163 メートル (今はない)； [当時なし (Alphonse- Juin)]； パレ・ド・ジュスティス橋 Palais-de-Justice（1842）165 メートル（人道吊橋）； ティルシット橋 Tilsit（1864）125 メートル (Bonaparte)； サン・ジョルジュ橋 St-Georges（1852）101 メートル（人道吊橋）； エネ橋 Ainay（1899）111 メートル（今はない）； ミディ橋 Midi（1845）125 メートル（当時吊橋）(Kitchener)； 鉄橋；ミュラティエール橋 Mulatière（1856）183 メートル。これらの橋は言うまでもなく同じ水平面上に架けられているわけで、目の高さと重なり、川上、川下の 1 本ずつは見えるとしても、その先のは、ようやく橋桁が覗けるか、欄干がうっすらと弁別できるかである。[写真 19] 荷風は、ここではあたかも航空写真を撮るようにパノラマ的視野へ観点を移して橋を俯瞰する技術を用いているように思われる。『秋のちまた』にも同様の叙述（「幾筋となく」）がある。ローマ

［15］「身体を投げ出した」河原



［16］モラン橋から見るクロワルッスの丘

［17］サン・クレールの丘



［18］「円い寺院の屋根」　実は右が病院、左遠景は大学

時代からソーヌ川周辺にすでに都市を形成していたリヨンも、ローヌ川には、長らく橋がなかった。その理由は、ローヌ川は、常に左岸に割れるように好き勝手に氾濫し8キロほどの幅の大きな流域をつくり、架橋が不可能だったのだ。このためローヌ川以東は長らく未開の地であった。また、川床が、ソーヌ川のように岩盤でなく、砂礫であるため仮橋すら難しかった。ローヌ川に始めて安定的な橋がかかったのは、すでに16世紀の半ばを過ぎていたころであった。それはギヨティエール橋である。ここに架橋された理由は、ギヨティエールにちょっとした町が形成されていたこと、ここからグルノーブル方面への街道が延びていたことなどである。古代から、この弱い川床に何本もの杭が打ち込まれ、橋を作ることが試みられ、流され、壊れという歴史を繰り返してきた事跡が、意外なことで20年ほど前に発見されたのである。それは、ローヌ川をわたる地下鉄工事（D号線）で、この川床の下を掘削したら、いくら深く掘っても、いくつもの杭が出てきて、これを除去するのに難渋したのである。その深さが尋常でなかったという。ローヌの水は、スイスアルプスから流れ出て、レマン湖を通過してくる冷水で、この低温のお蔭で、木材が腐蝕しないで残ってしまっていたという。このギョティエール橋についての記述は、荷風には皆無である。おそらく彼はローヌ川上流を生活圏にしていたこともあって下流へは足をのばすことが少なかったのだろう。

25. **末近くなった八月に、日は七時頃に落ちて**（27）「末近く」なら日没は8月20日で7時47分、30日で7時29分である。もし「七時頃」というなら9月10日あたりになってしまう。しかし「フランスへ来てから二週間」という記述と矛盾する。注17の「8月15日ごろ」と整合性がなくなる。気象条件を軸にしないと叙述に一貫性がなくなるので、どちらかといえば「二週間」の部分が文飾だと思われる。この種の「数」の使用方法は荷風独特である。

26. **洗濯を家業とする幾艘の屋根舟、その中では燈をつけながら腕まくりした幾多の女が河水に布をば洗っている**（33-34）洗濯舟である。[写真20]［写真21］「プラート（平底舟）」と呼ばれ、動力がもともとなく航行を目的としない「舟」だった。岸から数メートルの川の中につなぎとめられた舟の上の箱部屋は、川の流れに向かって開いていて、そこに太い横木を張り渡し、その内側に洗濯女が10人ばかりずらっと並んで川に身を乗り出すようにして洗濯をする。四角い箱部屋の部分で石炭の釜を炊き、ソーダを加えた湯を沸かしつつ乾燥室を兼ねていた。屋上には1本細い煙突が立っていて、またその周りは物干し場にもなっていた。暗いうちから遅くまで洗濯をするためにランプも備え付けられていた。洗濯船はローヌ川だけでなくソーヌ川も到る所に係留されていた。この風俗はリヨンが発祥だという。ベッソン何某という男の「発明」になるこの洗濯舟は、荷風の当時にリヨンには96業者あり、組合を結成していた。どの洗濯屋も住所は川岸の通りの名前をもち、通りの地番とは異なる舟番号が振られていた。所有者には女性、それも未亡人が多かった。夫をなくした労働者階級の貧しい女性が生計をささえる数少ない仕事のひとつだった。もちろん陸にも洗濯屋はあった。しかし、その数は当時44軒で、リヨンでは洗濯屋といえば洗濯舟のそれだった。荷風が毎日通勤で渡ったモラン橋の袂（下流側）にはずらっとこの洗濯舟が係留されていた。この習俗は『晩餐』でも川の叙景として用いられている。

27. **町端なる公園**（34）テート・ドール公園 (Tête d'Or) をさしていると思われる。→注152

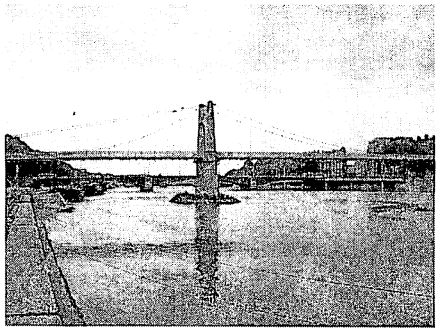
28. **横町や路地裏**（35）『ふらんす物語』には類似の描写が頻出する（約10箇所）。ソーヌ川を中にして、その左岸とフルヴィエール（→注105）の丘の麓を今日“古リヨン”（ヴィユー・リヨン）と呼ぶが、この界隈をさす。→注133

29. **裏通りから裏通りへと、早足に抜け道をする**（36）リヨンに独特の都市構造のひとつである“トラブール”の描写。→注134

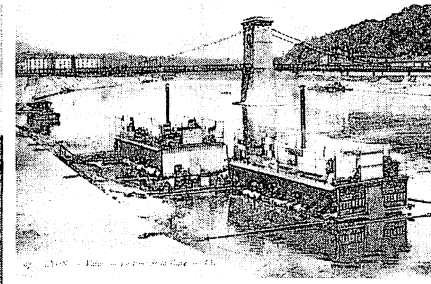
30. **音の悪いヴィヨロンの調べに**（36）辻音楽師は今も見られる。[写真22]

31. **銀行の一日の仕事を済ましても**（40）当時、リヨン支店の営業時間は、午前9時から12時までと午後2時から4時までで、土曜日は半休、毎日5時には退社できた。

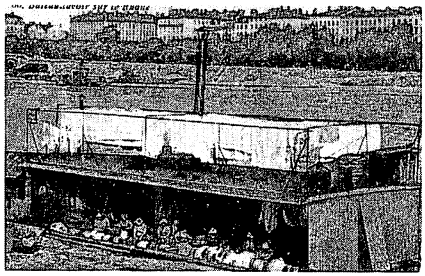
32. **サンピエールの宮殿とて十六世紀頃の尼寺を美術館に直した暗くて古い建物**（40）サン・ピエール館 (Palais de Saint-Pierre)。1659年から1680年にかけて建設された（したがって荷風の言う16世紀はまちがい）ベネディクト派修道会の女子修道院を1803年に美術館に改装したもので、[写真23]静かな小公園となっている中庭を取り囲む回廊が優美である。荷風の筆が及ぶのは、「暗くて古い建物」の外見ならびに、展示物を見たという事実（『蛇つかい』）だけであり、展示作品への言及はな



［19］実際は「幾筋ともなく」
橋を見るのは難しい（ローヌ川）

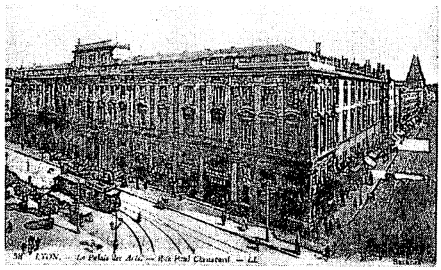


［20］「洗濯を家業とする屋根船」
（洗濯舟）ソーヌ川

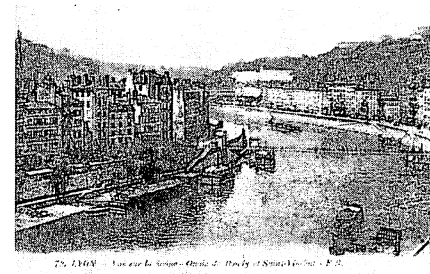


［21］洗濯舟　ローヌ川

［22］「音の悪いヴィヨロン」
今も辻に立つヴァイオリン弾き



［23］「尼寺を美術館に直した」リヨン美術館



［24］ソーン（ソーヌ）川

い。ルーヴルに次ぐフランス第二のコレクションを誇る美術館であり、エジプト、ギリシャにはじまり、日本など東洋の美術工芸も展示、ロダン、ルーベンス、レンブラントなど（荷風滞在時以降は後期印象派やピカソにおよぶ近代絵画のコレクションの追加も精力的に行っている）、また、リヨン出身の画家ピュヴィ・ド・シャヴァンヌ（Pierre Puvis de Chavannes)(1824-1898 ）や地元画家の作品も展示されていた。なお、この建物は当時の写真をみてもかならずしも、「暗い」とは言えない。荷風がそう書く理由は、「十六世紀」とか「尼寺」を用いたヨーロッパイメージ演出上の文飾だと思われる。→注 69

33. **ソーン**（40） ソーヌ川。[写真 24] →注 15、24

34. **牡獅子の立つサンポールの石橋**（40） ソーヌ川にかかるフイエ橋のこと。この橋は 1831 年架橋され、当時としては画期的な鉄のワイヤーで吊る釣橋であった。[写真 25] 装飾上、その鋼索を巨大なライオンの銅像 [写真 26] が止めるような形になっていた。このライオンはとうぜん、這いつくばっている。「獅子は立つ」というのが表現としてはふさわしいが、べったり座り込んでいる。もちろん、この橋は、石橋ではない。ワイヤーを支える両岸だけが石の構築物であるだけである。しかし、ライオン像がある部分は、重々しい石造りで、橋を渡る時の感覚としては「石橋」がむしろふさわしい。ちなみに、この橋は、荷風の帰国後 2 年目の 1910 年に取り外され、さらに 2 年後に鋼鉄の平凡な橋に付け替えられ、今ではその獅子は、市営サッカー競技場の正門へ移されて飾られているのを見ることができる。[写真 27]

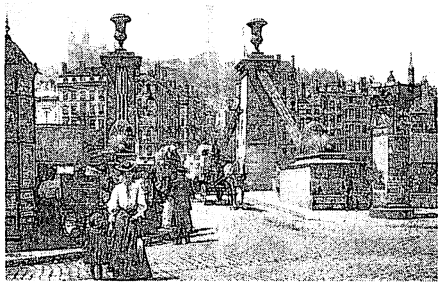
35. **石橋の袂から田舎行きの電車なり、河筋通の小蒸気なり**（40） フイエ橋の袂の左岸に上流への船着き場があった。[写真 28] 船着き場は今もその跡が残されている。川舟は「ムッシュ船会社」（パリの観光船の発祥はリヨンのこの“バトー・ムッシュ”）が運行していて、7 分に 1 便という頻度で、ソーヌ川の上流の村とつないでいた。「電車」というのは路面電車のことで、当時ソーヌ川の右岸沿いサン・ランベール村（→注 49）までの路線があった。また鉄道だと、橋を渡ってゆるい坂を 150 メートルほど行くと正面に鉄道のサン・ポール駅がある。[写真 29] ただし、今ではこの駅からの路線はソーヌ川上流へは行かないし、船の運航も（夏季の観光船を除いては）ないから、これから荷風が行く先へは今ではリヨン広域バス（TCL) の路線で行くことになる。

36. **株式取引所**（40） 銀行の南 250 メートルにある商工会議所の別名である。[写真 30] 正確には、パレ・ド・コメルス（商業館）と呼ばれる建物内に株式取引所はある。しかし、この建物は通称“ブルス”（株式取引所）と当時も今も呼ばれている。1860 年に建築家ダルデルの手によって完成した擬古ルネッサンス様式の壮麗な建物である。南面にはローヌとソーヌのレリーフがあり（→次注）、北面の小さな美しい公園側が正面入り口である。正金銀行とも緊密な関係があった。当時、商工会議所の大物会員筆頭の 20 人のうち 8 人までが絹織関係者だったからだ。当時はこの建物 2 階に「織物歴史館」が併設されていた（現在は、若き日の小野支店長が学んだ商業学校のあった建物へ移転している→注 78)。荷風にはもっとも仕事に関係のあるはずの株式取引の内容や絹織物産業のことには言及がない。この建物には南北に対称的に立派な出入り口があるが、荷風が散策する 13 年前に大統領のサディ・カルノが暗殺されたのは、この商工会議所の玄関前であった。(→注 95)『晩餐』では「商業会議所」と記している。

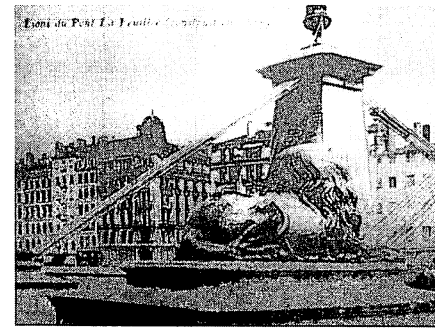
37. **裸体の男女の身をからませて泳ぎ行く大理石の彫刻**（40） 浅浮彫のローヌ川とソーヌ川の大理石像。[写真 31] 昔からローヌ川は男性、それもたくましい男に、ソーヌ川は優美な女性に擬され、市内のいたるところに寓意彫刻が見られる。この彫刻は、ヴェルマールの作で、荷風がリヨンに来た年、すなわち 1907 年に作られた近代的な作品である。ソーヌ川のなめらかな曲線が妙になまめかしく、まさにローヌ川に「身をからませて」いる。

38. **パレード・ヂュスチース (裁判所）の太く並んだ石柱の列**（40） 建築家バタールによる 1835 年建造のやや重苦しい建物で、ソーヌ川河畔ではいちばん大きな建物である。24 本の列柱が正面を飾る。[写真 32]

39. **サンジャンの古刹**（40） サン・ジャン教会 (Eglise primatiale Saint-Jean)。[写真 33] リヨンに現在残っているもっとも古い建物のひとつ。1180 年からいく度も改築、増築が行われ、ほぼ 15 世紀末に形が整えられたロマネスク様式のフランスでは最も格式の高い首座大司教教会である。内陣は多少暗い感じがするが、味わい深い。『西遊日誌抄』によると、荷風は、旧市街をおとずれ、この教会で

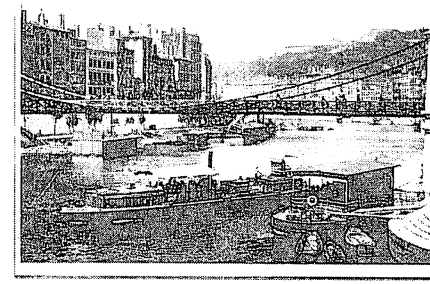


［25］「牡獅子の立つサンポールの石橋」

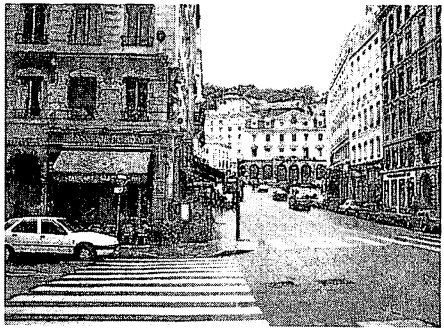


［26］フイエ橋の「獅子」（ライオン）像

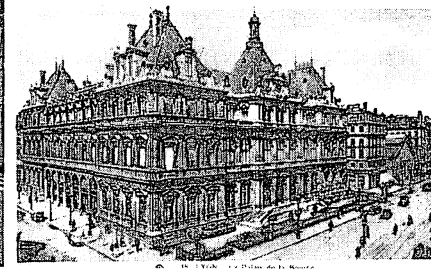
［27］ 現存する「獅子像」



［28］フイエ橋と「小蒸気」の船着き場



［29］フイエ橋から正面向こうに見える
「田舎行き」サンポール駅（現在）



［30］「株式取引所」（商工会議所）

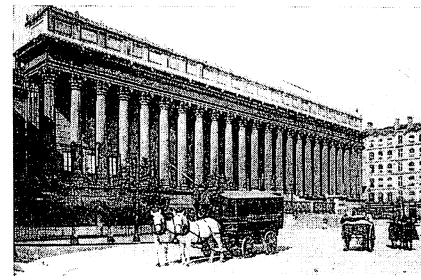
祈りをささげたというが（→注 151）、たぶんに演出くさい。いわば、銀行生活への嫌悪とリヨン生活の孤独な姿を表わすのに用いられた有効な“装置”だったのだろうと思われる。荷風のような信仰心もない放蕩者が祈るのだからよほど懊悩していたにちがいない、と読者に思わせるに十分である。たしかに、サン・ジャン教会は一歩中へ入れば、その重々しさに厳粛な気持ちになる。そして知らず知らずのうちに居住まいを正したくなるような「古刹」であることはたしかだからだ。荷風は、リヨンの中で、下宿の至近にあったサン・ポータン教会では祈らず、あえてローヌ、ソーヌと川を二本隔てたサン・ジャン教会まで足を運んで、ここを祈りの場所に「選んで」いるのである。役者が見得を切るのに舞台上の位置を慎重にえらぶのと同じ演出振りである。荷風はこの教会に「古刹」や「古寺」（『西遊日誌抄』）という形容詞をつけるのを忘れない。なおここでも荷風の独特の風景描写技術が用いられている。すなわち荷風が述べる位置から裁判所とサン・ジャン教会を見ることはできない。少なくとも 150 メートルは川下へ移動しなくてならないが、そうすると河舟に乗るにはそこを往復することになり、記述がもたつくことになるので風景の「まとめ描写」が行われているということが分る。

40. 新しい大伽藍（40） 荷風が教会とは呼ばずに大伽藍というこの建物は、ノートルダム・ド・フルヴィエール大教会堂 (Notre Dame de Fourvière) をさす。［写真 34］ここは確かに教会 (église) でなく、「バジリク (basilique)」だからである。バジリクというのにはっきりした定義はないが、ある種の特色がある教会建築にはその名がつけられる。たとえば、20 世紀のはじめに完成したパリの観光名所サクレ・クールなどもこの「大教会堂」である。ある種というのが、それは、たいていの場合、たいそう壮大かつ壮麗なのだが、一見教会に見えない、すくなくとも、伝統的な意味で、やや教会建築の伝統からはずれているものをさす。と言って完全な創作ではない。たいていはビザンチン様式とかローマの会堂のような様式をもつ。「新しい」と荷風が正確に指摘しているとおり、この「大伽藍」は 1872 年（日本の年号を使うなら明治 4 年）に着工、完成したのは 1896（明治 29）年のことなのである。荷風がリヨンへ来るわずか 10 年ほどまえでしかない。→注　106

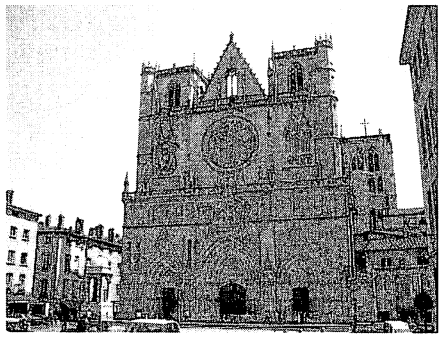
41. 卑しい（40） 町のどこからでも見えるこの教会堂［写真 35］は当時からかなりの悪評があり、そのローマン＝ビザンティン様式の外見のぎごちない重々しさだけでなく、内部もフランスのどんな教会にも見られないちぐはぐな擬似東方的装飾で満たされ、伝統的な教会建築の規範からいうと異様でさえある。世紀末の美意識の錯乱はこのようなものだったかとおもわせるほど、ありとあらゆる様式がちりばめられ、まるで空白恐怖症の患者のような装飾にあふれかえっている。それも重々しく見せようとするのか、色彩的にも暗い中に金色のめっき風の輝きが不気味な感じをすら与える。その内陣をみたあとで、外に出て間近で建物を見上げると、外壁にいわくありげに施されているさまざまな彫刻装飾が、内部の惑乱装飾の印象に追い討ちをかけるかのように白々と目にも眩しく輝く。さらに、48 メートルの 4 本の太い塔（内、1 本は展望台）が四方から重々しく立ちあがり、このため、建物全体がまるで「背中からひっくり返った象」だという嘲笑は当時から有名な評言だった。［写真 36］荷風が携えていたにちがいない『ベデカー』にも、「いかがわしい趣味」だとすでに書かれている。この建物をどのように評価するかは、すでに荷風から 1 世紀隔て時代に生きるぼくたちには、また、別の新鮮な視点があろう。だが、少なくとも、ここを訪れることで、荷風の好む世界を逆に見透せる思いがする。一言で言えば、やはり、「回顧派ならざる吾々」と言いながらも、伝統的な美の規範精神、あるいは、あるべきヨーロッパ理想像を荷風はつよく意識しているということは明白だろう。後の東京の都市景観への好みとも通ずるところがある。この大教会堂が建っている場所は、また、たいへん見晴らしのよいところで、リヨン市内が一望できる。荷風は、そういう晴れ晴れした風景をめったに賞賛しないが、何度もここには足を運んだことがあるはずである。そのたびに、荷風はおそらく、教会堂を間近に見て落ち着かない気分に陥ったと思われる。この感じは、リヨンの南のオートリーヴ村にある“理想宮”にどこかで響きあうある種の落ち着かなさである。［写真 37］一方は時代の錯乱（夢想）であり他方は郵便配達夫個人の夢想である。荷風がリヨンにいたころ、オートリーヴ村では郵便配達夫のシュヴァルという男が一人で黙々と“理想宮”という奇妙な彫刻建築の制作に没頭していて、その完成がせまっていた。これをシュールレアリストのブルトンは賞賛したが、荷風は、これを見たとしても首肯しただろうか。

42. 処々に要塞の壊れ跡（41） かつてのリヨン市の北の護りであり、城内と外を分けるサン・ジャン要

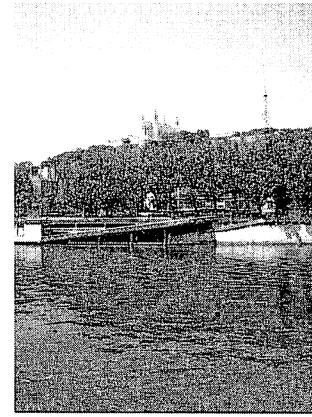
[31]「裸体の男女の身をからませ」る浅浮彫像



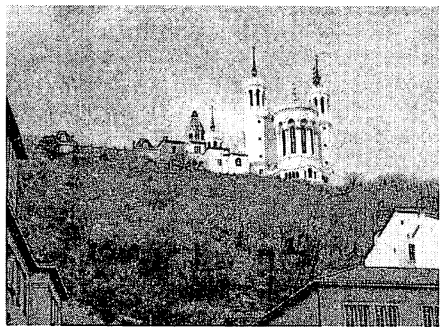
[32]「パレード・ヂュスチース」（裁判所）の「太く並んだ石柱の列」



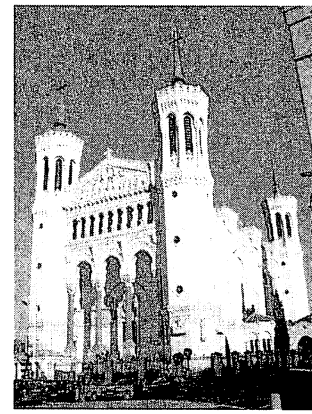
[33]「サンジャンの古刹」（サン・ジャン教会）



[34]「新しい伽藍」遠望



[35]「卑しい」近世の象徴フルヴィエール大教会堂



[36]“背中からひっくり返った象”

塞などを指す。[写真 38] ここが今のリヨン市第一区と第四区の境となり、荷風の観察どおり、人口は第四区のほうへと伸びていき、やがて後にソーヌ川の右岸上流に第九区が創設されるにいたる。

43. **ヴェーズ**（41）「ヴェーズ、ヴェーズでお下りの方はありませんか」と荷風が描写するように、往時はこのソーヌ川沿の街は主要な港であり駅だった。[写真 39] [写真 40] ヴェーズ（Vaise）へは、フイエ橋の袂からソーヌ川沿いにすでに軌道電車も船も通じていた。現在は地下鉄D号線が市内とヴェーズとを結んでいる（ペラッシュ駅からは、ローカル線が日に数本運行している）。現在は、4系統のバスが市内からヴェーズへとつながっている。今日では、旅客用の川舟はないが、観光船は夏季のみある。川船は当時は今日のバスのように何艘もの船が運行していた。ヴェーズは荷風の叙述どおりの場末の町工場、川岸の資材置き場という労働者街であるが、1990 年代から駅前開発を徹底的に進めていて、急速にその雰囲気も消えつつある。[写真 41]

44. **第一に見える橋**（41） 船に乗ると「第一に見える橋」が最初の停泊所である。この橋はマザリク橋。[写真 42] 当時は、「駅橋」（ポン・ド・ラ・ガール）と呼ばれていた。ヴェーズに鉄道が通じたのは 1850 年ごろで、それまでは、川船が主たる交通手段だったので、川駅であった名残である。川岸にちょっとした港が出来ていたのである。当時は市内ではソーヌ川にかかる橋としては最上流の橋で、この先は約 3 キロ上流まで橋はない。

45. **瓦を焼く製造場**（41） ヴェーズには当時瓦製造所が多く（「チュイルリー（瓦工場）街」という通り名が今も残っている）、そこで製造されていた瓦は、ソーヌ川の上流の右岸で 15 世紀頃からすでに採掘されていたやや黄色がかった石灰土から焼かれたものだった。しかし、リヨンではこの後に、軽めの赤いイレコ式の瓦が流行し始め、今では当時の瓦工場はもう見られない。→注 22

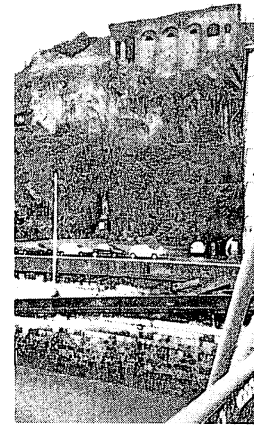
46. **正面遥に聳えるモンドオル（黄金山）へと次第に高く連なって行く小山の列が一目に見渡される**（41） ソーヌ川の右岸のなだらかに連なる低い山並み「モン・ドール」(Mont d'Or) のこと。[写真 43] [写真 44] その中で峰らしい形をつくっているのは、標高 609 メートルのトゥ山と 625 メートルのヴェルダン山である。山というよりは、頂上まで生活圏のあるような丘陵地帯である。ソーヌ川はこの丘陵を迂回するように流れ、丘の中腹にはいくつもの村と畑が点在している。荷風が言うように水面（船）から「正面に」山の中腹がかろうじて見渡せるのはヴェーズあたりだけである。というのは流れは（上流に向かって）まもなく右へ曲がり川岸に山麓が迫っていてモン・ドール山の全景を見るには近すぎるし、山は「正面」でなく左手に広がるようになるからである。なお、この山並みの名前を荷風は「黄金山（おうごんさん）」と訳しているのだが、金の鉱石が採れるわけではなく、ものの本によれば、語源的にはケルトの牡牛の祭祀の伝承から Monte tauro と呼ばれ、それがなまったものだという。あえて言うなら「牛山」である。ついでながら、このモンドール山中の村で科学者アンペールは生まれた。アンペールというのは、日本では電流の単位である「アンペア」で知られる。彼の生まれたポレミュ・モン・ドール村の村役場の近くに銅像と記念館がある。荷風が銀行への通勤の途中で通り抜けたと思われる元イエズス会の学校の建物というのは、荷風時代にこの科学者の名前にちなんでアンペール中高校となっていた。荷風の勤務した銀行の支店長の息子はこの学校に通っていた（→注 83）。ついでのついでに、荷風の有名な筆名に金阜山人がある。いうまでもなく、これは、かれの生まれた家が金富町（かねとみ）にあったことから由来するのであるが、モン・ドール（黄金山）もまさに金と阜（小高くなっている所）にふさわしい場所である。この筆名は、「金富参人」が初出（1913（大正 2）年）で、そのあとは、1916（大正 5）年の「金阜山人」という漢字があてられ、以降、この表記で定まる。したがって、この筆名はフランスから帰国後につけられたもののようであり、そうすると、荷風のペンネームに、この思い出の山並みの風景もいささかは関係してなかったとはいえないかもしれない。

47. **堅固な堰**（41） フエイ橋船着き場から約 5.3 キロソーヌ川を遡ったあたりに、当時は大きな堰があった。現在は、取り壊されている。[写真 45]

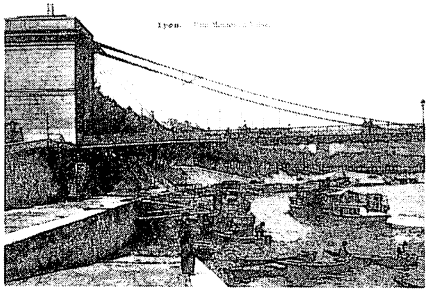
48. **一条の釣橋**（41）「バルブ島橋」（Pont de l'Ile Barbe）のこと。現存する。[写真 46]

49. **里昂訛りの大声でランパール。リールバルブ（髯の小島）と客に知らせる**（41） リール（リヨン）バルブは南北 560 メートル、東西 125 メートルの、ソーヌ川に浮かぶ中の島の名称である。バルブ（髯）の島というのは、昔、草木の生い茂る無人の島で、その姿が、アゴヒゲのようだったからだという。ところで、荷風がリヨン訛りでという「ランパール」はおそらく「(サン・) ランベール」(St-Rambert)

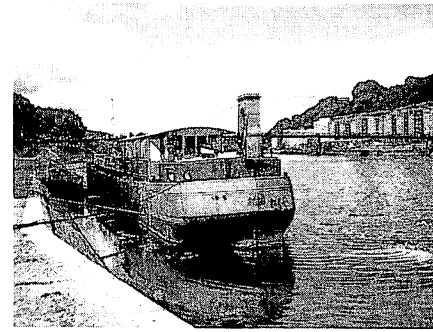
[37] オートリーヴ村の“理想宮”



[38] 「要塞の壊れ跡」
（サン・ジャン要塞）

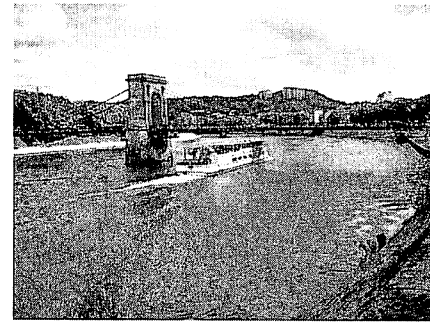


[39] ヴェーズの船着き場



[40] ヴェーズの船着き場（現在）

[41] ヴェーズの消え行く町工場（駅前）



[42] 「第一に見える橋」（マサリク橋）

の聞き間違えだろう。たしかにランパールは、rempartと綴るなら「城壁」の意味なので、荷風の描くとおり「城壁のやうに高く厳めしく築上られた石堤」にふさわしい。しかし、じつは当時も現在も、この船着場が、そういう名で呼ばれていた事実はない。これは荷風の錯誤だろう。現在、ここのバス停の名前は百年昔のとおり「サン・ランベール・リル・バルブ」と呼ばれている。サン・ランベールが、右岸の村(当時)の名前で、その向かいにある小島がリル・バルブ(鵜の島)だから停船場名がこうなっている。したがって荷風の記述の「ランバール」と「リールバルブ」の間の「。」は本来「、」(現代のナカグロ点)であるべきだろう。なお、岩波版は全集も文庫版も「リールバルプ」としている。誤記あるいは誤植であろう。ランベールをリヨン訛り(ローヌ県のかなり田舎でのことだが)でランバールと発音することはありえないことではない。ただし、「パ」ではないし、この地名は「サン・ランベール」であって、やはり「サン」がついていたはずである。村の名前は教会の名前(聖ランベール)からきている。しかも、荷風の耳でフランス語における「エ」と「ア」の軽微な方言差を捉えられるものだろうか。「リヨン訛り」の特徴というのは、一般に引っ張るように抑揚をつけて喋られることだという。このために無音化されている母音の音がかすかに響く。とはいえ南仏訛りのような明瞭なものではない。また、「ア」の音が「オ」に近くなるなどの特色がある(否定の副詞「パ」(pas)が「ポ」にごく軽微だが近くなる)が、いずれも、それほど明確な、少なくとも日本人などが聞いてパリの発音との差を見出しうるほどの著しいものではない。もちろん現在は、その特色は荷風時代よりはるかに希薄になっている。

50. **ホテル、カッフェー、レストーラン**(41) 当時この村にはピション某が経営する旅籠が一軒あった(現在はない)。料理屋やカフェは両岸に7軒あった。現在も料理屋、カフェが両岸に数軒ある。[写真47] 夏季は川へ張り出したテラスで食事ができる。[写真48]

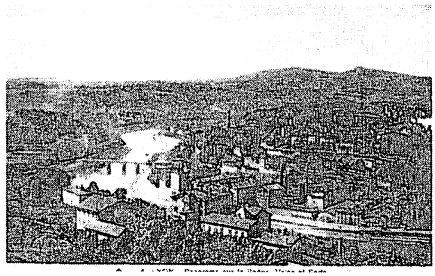
51. **「髯の小島」の前方は公園になっていて(…)玉投の遊びをしている**(42) この「前方」の公園はそのままあって、ほんとうにそこで玉投げ(ペタンク)をする人たちを今でもほとんど1年中見かける。[写真49]『ふらんす物語』の幻想を見たのかというぐらいそのままなのだ。観察と記録の要点をピンポイントで抑える荷風の描写力の凄さに感心すると同時に、フランス文化の、不易とまではいわないでもゆっくりした時間の流れにまかせるしたたかさには心底かなわないという思いをだれもが抱くだろう。荷風が見たのは、今われわれがここでペタンクをしている人たちの祖父か曽祖父かもしれないという思いを抱かせる。

52. **その後ろは古木の陰に寂しい土塀を廻らして住む人もないかと思う一構え**(42) 公園の先は、まさに今も同じように塀と門がある。[写真50] じつは、その横にももうひとつ古びた門があり、その内側には木立の中に何軒かの古色蒼然とした屋敷がそこここにある。

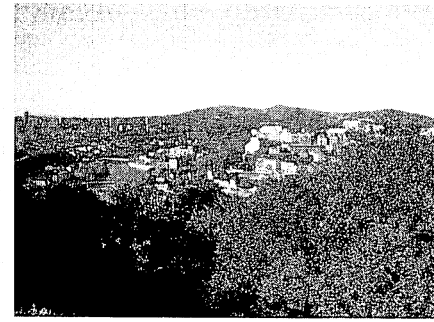
53. **昔は修道院、今は尼寺となった名所と云えど**(42) 5世紀からの修道院あととおぼもしき建物(後世に建て替えられた)が右手に残っている。[写真51] じつは、この島の歴史的な記録はほとんどなくて、古代にドルイド教の祭祀が行われていたとか、その「修道院」と称するものそれ自体も、さらには、そこには金銀財宝が蓄えられていたとか、往時は90人もの修道僧が住んでいたとかの伝承話はたくさんあるが、どれも明確なものではない。フランス革命以降無住だそうである。1793年の革命中に、この島全体が国家財産として没収され、民間に入札で払い下げられた。このときの落札価格が1660フランだということ、このことがこの島で資料的にわかっている唯一の明確なことである。「尼寺」というが実際は小さな礼拝堂で、新しい金色のマリア像が安置してある。[写真52] チャペル前は小さな広場になっていて、その木陰には今では旅籠がある。「島亭」(Auberge de l'Ile)というレストランである。二つ星の料理屋である。なおこの島の大方が個人の所有地で、その礼拝堂も、荷風が書き残している「一構え」の家敷の主の私物である。礼拝堂の内部見学にあたってはご夫妻のご好意で開錠していただいた。

54. **富嶽の別邸**(42) 現在では交通機関の発達により、この辺りからリヨン市中へ勤めるのは問題ない。ちょうどこの島あたりまでが市内(第9区)であり、自宅としている人が多いが、建物はこのあたりでは市中とことなり一戸建て(いわゆるヴィラ)である。すなわち「別邸」である。[写真53] このように郊外に上流・中産階層が住み始めたのはリヨンの市中に労働者層が急増し始めたことと機をいつにする。

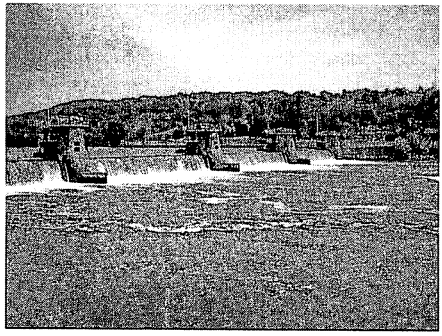
55. **河筋の往来は(…)白楊樹の並木が限りなく続き**(42) 今は、どちらかというとプラタナスの並木が



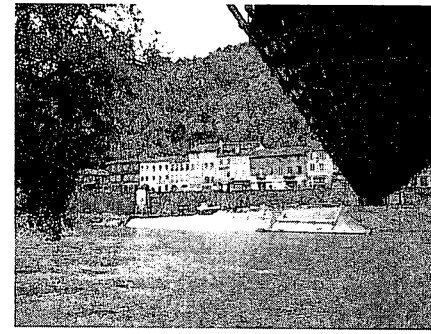
[43] 「正面遥に聳えるモンドオル(黄金山)」



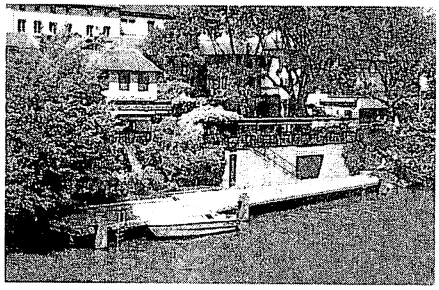
[44] モン・ドールの遠景
(リヨン丘の上から) (現在)



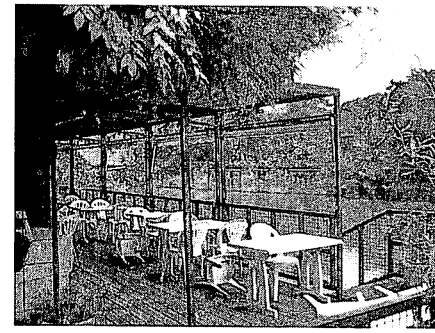
[45] 「堅固な堰」ソーヌ川の堰
(やや上流の同型のもの)



[46] 「リール・バルブ(髯の小島)」の「一条の釣橋」



[47] 川岸の「レストーラン」



[48] 川へ張り出したテラス

多いが風景としては変わらない。[写真 54]

56. **浮島** (42) コロンジュ・オ・モン・ドール村域のロワ島 (Ile Roy)。[写真 55] 南北 1100 メートル、幅 200 メートルの無人島。自然保護区になっている。なお、三ツ星レストランで有名なポール・ボキューズの店はコロンジュ村の街道沿いにある。

57. **選挙運動の色紙の広告** (43) 今日では日本と同じで候補者のポスターは所定の位置にはることになっているが、昔の名残もよく見かける。[写真 56]

58. **クーゾン** (43) クーゾン・オ・モン・ドール Couzon-Au-Mont-D'Or と呼ばれるこの村は、リヨンからソーヌ川を遡ってほぼ 13 キロ上流にある人口 2600 人ばかりの古い小さな村である。[写真 57] リヨン・ペラーシュ駅から国鉄で 3 つ目の駅。クーゾン村について描写された風景は 100 年後の現在でもほぼそのまま見ることができる。秋庭太郎の『考證永井荷風』によると、菅原明朗に荷風が語ったことばとして「フランス人の行員の郊外の家に度々遊びに行っ」たとある。場所は言及されていないが、状況的にはソーヌ川のこの辺りだと想像してもいいだろう。一方、銀行の小野支店長もクーゾン村に別邸を借りていた。小野家には、別荘の庭で写された小野政吉の写真が何枚か残されている。[写真 58] また、荷風の下宿の主人一家は長らくクーゾン村の対岸にあたるフォンテーヌ・シュル・ソーヌ村に住んでいたし、とくに下宿の娘 2 人はこの村の生まれであるので、食卓の話題にソーヌ上流の風景の話などはでていただろう。ついでに言うと、「髯小島」の風景写真も小野家には残されているので、いずれにしても、荷風が「河の流れを遡ってリヨン市の郊外遠く散歩に行くのを例としていた」と語るのは、こういう状況から考えてかなり必然的な理由があったと思われる。いかにも気の赴くままの遊歩のように記述がなされているが、実は、その土地勘や親しみの理由は隠蔽されている。それは銀行との関係だからであろう。なお「カッフェー (休茶屋) やキャバレー (居酒屋) の二三軒も並んでいる」(当時この村にはその種の飲食店が 7 軒あった) という観察や「家は大概二階造りで」「家屋は互いに密接し非常に狭苦しく建てこんでいて」「不思議なほど人影がない」というような風景描写も 100 年後の今もほぼそのままである。[写真 59]

59. **風流な名を書いた陶器の表札** (43) 今でもおおくの家の門柱や壁にはこのような名前がつけられている。[写真 60] 荷風滞在時の銀行支店長の別荘は“名残” (Les Epaves) と名付けられ、後年の貸別荘は“小粋” (Joliette) であった。

60. **貸別荘** (43) →注 58

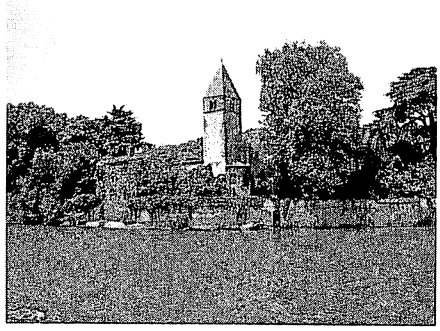
61. **グージョンの天麩羅** (44) 川はぜの一種。[写真 61] 現在、ソーヌ川のこのあたりでは絶滅した。公害に弱い魚だが昔は、フリチユール (てんぷら) といえばグージョンときまっていて、ソーヌ河畔の庶民的な食材だった。今は、ソーヌ川の川岸のレストランはどこも決まりきったようにその代用品として「エペルランのてんぷら」をメニューに掲げている。エペルランは日本では「キュウリウオ」といい、わかさぎのてんぷらに似た味である。残念ながら海の魚である。

62. **ヴォーグ** (44) “ヴォーグ”の意味は荷風が村人から受けた説明によると「宿無しの見世物師の一群れ」が、町から町へとさまよって「芝居」、「からくり」、「見世物」を出すことだという。辞書によるとヴォーグ (vogue) は、フランス東南部の方言で、「村祭り」のことだとある。ただ、もうすこし、リヨンに即していうと、祭りというよりは、縁日の感覚に近く、11 月 1 日の万聖節、翌日の万霊節前後の秋祭りの見世物や屋台を意味することがふつうである。→注 77

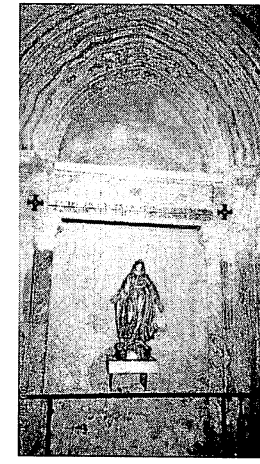
63. **仏蘭西語でボエミヤン** (45) ボエミヤン (bohémien) は、現代のフランス語ではチガーヌ (tsigane) とかノマード (nomade) といわれる。ノマードは放浪の民一般をさし、チガーヌはその中でも、旅回り芸人・縁日見世物一座をいう。20 世紀初頭のクーゾン村の村史を見ると、復活祭から 2 ヶ月後あたりにかけて“ヴォーグ”が来るという記述が見出される。この放浪の民の起源は明確に分かっているわけではないが、北インドの民族の一団が流れてきたものだと言われる。アチンガニ族の名前が、イタリアでツィンガリになり、ドイツでツィゴイネルになり、チェコのボヘミア地方を通過してきたのでボヘミアンになり、エジプトから来たという思い込みから、エジプシアンをなまってジプシー (英語) と呼んだりしているが、いずれもほぼ同じ民族をさす。そこで彼らは自らの共通名称を“ロム” (Rom) と規定する民族会議の決定を 1971 年にしている。その民族移動は古代にさかのぼるようなものでなく、10 世紀頃にインドの最下層階級が西へと移住をはじめ、主として東ヨーロッパで生活の場を見出したのがいわゆるジプシーの発生である。西ヨーロッパには、15 世紀に東

［49］「前方は公園（…）玉投げ遊びを」

［50］「寂しい土塀」と門



［51］「昔は修道院、今は尼寺」



［52］礼拝堂のマリア像

［53］「富豪の別邸」（ソーヌ川周辺のヴィラ）

［54］「白楊樹の並木が限りなく続く」ソーヌ河畔

から順次100年ほどかけて入ってきた。当初はヨーロッパ人とも共生し、馬を扱うことに長けていたので博労や蹄鉄を作ることから鍛冶屋を生業とし、馬具、革製品、籠、わら製品、木工細工などの生産に携わった。しかし、やがて、かれらが無宗教（というより非キリスト教）であることや生活の異質さゆえの迫害を受けるようになり、いっぽうジプシーのほうも、身に武器を帯びるようになり、しばしば略奪や反社会的行為に及ぶようになり（いずれもヨーロッパ側の証言記録なので、今日の歴史学者はその信憑性をうたがっている）、ヨーロッパ文化の中で異端者扱いを受けるようになりはじめた。また、その故に、19世紀の文学においては、例えばヴィクトル・ユーゴの『ノートルダム・ド・パリ』のエスメラルダやメリメの『カルメン』などのロマン主義のかっこうの題材ともなった。放浪の民というロマンチシズムである。荷風における「ジプシー」はまさにこのロマン主義文化の背景のなかにあるジプシーである。馬の後ろに幌の付いた車をつけて、そこで寝起きをしつつ旅から旅へと移動し、たいていは縁日に合わせて行く先々で、占い、曲芸、見世物、音楽、大道芸を演じて生計を立てていたのだ。その踊りはフラメンコとなり、その音楽は、ヴァイオリン曲では、ツィゴイネルワイゼンとなり、ギターではジャンゴのジャズなどに花咲いていった。今日、もっとも有名なのはハンガリアの「ブダペスト・ジプシー交響楽団」である。ヴァイオリンの曲弾きや“アジア的”な哀愁に満ちた演奏をレパートリーの中心にすえて、世界を演奏旅行している。けれども民族としてのジプシーの生活自体は放浪の形態をとるため、社会全体が近代化し、安定化していくにつれて、相対的に貧困とも結びつき、荷風がクロワ・ルッスで観察し叙述しているとおりの「無宿浮浪の見世物師の境遇」であり「悲愁の美」を呈していたのだった。30数年昔には、都市の郊外ではまだ馬車の集団をみることがあったから、伝統的なジプシー（ツィガーヌ）文化が消えたのはそのころからのことだろうか。今はキャンピングカーでの仮寓か、川原や空き地でのテント生活が主であり、フランスでジプシーといえば物乞いかスリの集団の代名詞になってしまっている。むしろ、そういう状態に追い込まれたというべきであろう。とくに、共産圏崩壊以降、ルーマニアとユーゴからのジプシーの不法移民が、新たな問題を生み（最近の政府方針では強制送還という手段をとる）、すでにフランスに同化した昔からのジプシーの処遇にまで影響を与え、そこにジプシーを支援する人権団体や国際赤十字が介入、複雑な社会問題となっている。定住しない人々の生活は、現在では、行政的観点からは、種々の好ましくない問題を惹起する。風紀、環境、治安、衛生、教育などについてである。テレビなどでしばしば放映される現状は、じつはほとんど荷風の描写どおりなのである。このために、定住化政策がすすめられた。そのことは、逆に言うと、このような移動生活という文化の抹殺である。じっさい、いまでは、どこへ移動しても、その先の自治体や住民から排除される傾向にある。それとともに、彼らの文化的な存在はほぼ消滅しつつある。しかし、現実、ヨーロッパ全体で800万から900万人のジプシーが存在し、パリ近郊だけでも45万人、そのうち、半数弱がいまだに非定住者だという（フランス政府も正確な数字は把握していない）。身分証明書を持たない彼らの遇し方はきわめて難しいものとなっている。今日、ジプシー（ツィガーヌ）については、ほとんどが、かれらの過去の生活の悲惨さや貧困など、被差別解消の観点から関心がもたれることがあるとしても、もはやノスタルジアの対象としての縁日の荷風が体験したような「蛇使い」とか曲技などへのまなざしからではない。

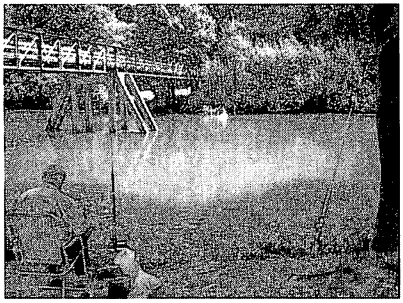
64. 川向には（45）　ロシュタイエ・シュル・ソーヌ村（Rochetaillée sur Saône）のこと。

65. 夜行列車（46）　リヨン方向行きなら「夜行列車」とはならないので、パリ方面行きだと思われる。荷風がパリとの往復をしたのもこの線路だった。現在は、この路線はパリと結ぶものではない。[写真62]

66. 石の釣橋（46）　クーゾン橋。[写真63] 現在も吊り橋である。橋の中央が村境となり「浮浪の見世物師」が「渡って村へ這入」ってくる。

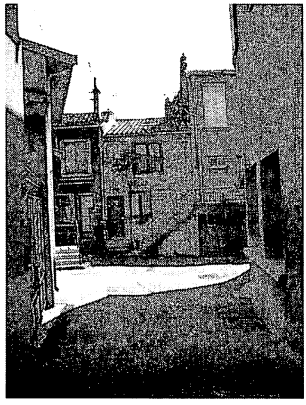
67. 橋や袂には(…)寄席や劇場の広告（50）　広告塔の風習も100年後の今も変わらない。[写真64]

68. 冷水浴の河船（50）　川の流れを利用したプール船。[写真65] 筏のような台を浮かべ、その上に小屋をしつらえ脱衣場にしていた。ときに20メートル以上にも及ぶ長大な水浴舟は風紀上男女別になっていた。荷風当時ローヌ川には女性用施設が1つ、男性用施設が3つあった。ソーヌ川にはこの施設はなかった。川幅が狭かったからである。ローヌ川の水は冷たく、真夏でも15度を越えることはなかった。泳ぐということは今ではなんでもない行為であるが、ヨーロッパではながらく人は

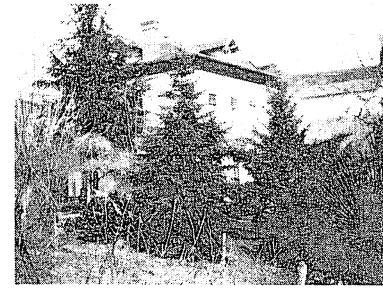


［55］「浮島」（ロワ島）

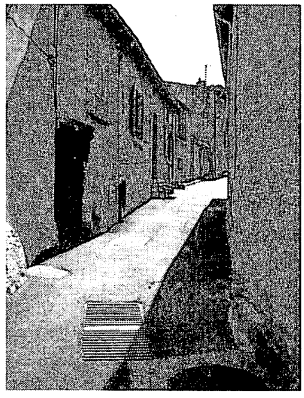
［56］「選挙運動の色紙」（2002年）



［57］「クーゾン村」



［58］小野支店長のクーゾン村の別荘



［59］「狭苦しく建てこんだ」「人影のない」村の道

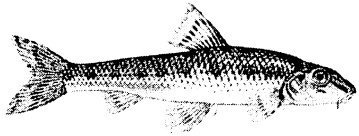
［60］「陶器の表札」

泳がなかった。庶民が水浴をする風習を実践しだしたのは19世紀の中ごろから終わりにかけてのことである。イギリスで始まった健康管理と関係した流行であった。それがまもなくレジャーとなり、海水浴場がリゾート地として開発されるようになる。本来は海水浴が起源であるが、荷風のリヨン時代（20世紀初頭）でも、フランス人で海水浴をたしなむ人はきわめて少なかった。川で水浴する人は、さらに珍しく、また流行の先端をいく行為でもあった。現在は、ローヌ川には、河岸に市民プールが作られているのもこの伝統をひくものと思われる。[写真66] 現在でも、川そのもので泳ぐのは、荷風が河原で寝転んだという上流の水のよどむ箇所、ほんの一部にしかすぎない。それも子供の水浴程度である。ついでながら、水浴舟の最大の施設は、荷風が通勤で渡っていたモラン橋の下手側に繋索されていたのだが、11月16日に増水のために沈んでしまうという“事件”があった。しかし、荷風はちょうどこのころ南仏旅行中（→注115）だったのでこの事件は知らなかったかもしれない。なお『晩餐』でも川の叙景に「水浴の屋根舟」と点描している。

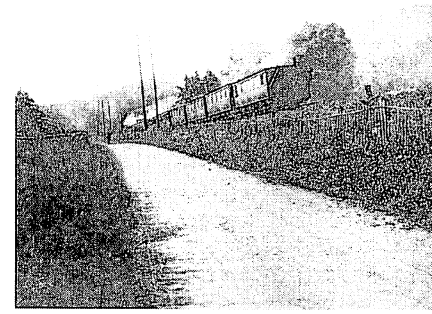
69. **花壇の蔭で半日を読書してしまった**（51）戸外、とくに公園で読書する人々は今でも大変多い。[写真67] 荷風はおそらくこういうフランスの風習に自然に溶け込んだのだろう。また仏書を勤勉に読んでいた証しでもあり、一方でそうとう銀行を欠勤していた証しでもある。

70. **午後は久振美術館を一めぐりした**（51） 美術館 [写真68] へは行くが、荷風には、『ふらんす物語』では画論というものを展開しない。これは音楽、とりわけオペラへの感想や評論が多いのと対照的である。たとえば、ルーヴルについても「古きを集めたる」の一言があるだけで、リュクサンブール美術館（荷風当時は印象派の作品を展示していた）については「吾々若いものの悩みと喜びを語る新しい芸術の宮殿」（『おもかげ』）だと称揚はしている。しかし、そこに展示される作品や潮流については具体的なコメントをみることはない。「新しい芸術の宮殿」というような評価に、かすかに、若き日のゾラへの傾倒とその影響を感じるが（とは言えゾラは晩年、印象派亜流を手厳しく批判している）、やはり、アクチュアルな美術評論への関心は薄かったようである。リヨン出身のピュヴィ・ド・シャヴァンヌ（1824-1898）は、当美術館の主要な収蔵作家である。[写真69] 言うまでもなく荷風の信奉するゾラが賞賛した象徴主義的手法を用いる画家であり、パリで荷風が訪れた「円頂閣」（パンテオン）には、ピュヴィ・ド・シャヴァンヌの有名な壁画「聖ジュヌヴィエーヴの子供時代」[写真70] があるが、荷風にそれらの言及はない。ついでに言えば、荷風が「東原」という変名で登場させる黒田清輝は、ピュヴィ・ド・シャヴァンヌの添削を受け、パリの国民美術協会のサロンに作品『朝妝』を出展して入選を果たしている。ピュヴィ・ド・シャヴァンヌは、この協会をロダンなどと共に立ち上げた中心人物であった。さらについでながら、荷風のパリ時代と重なる明治41年にパリに留学していた画家斎藤与里などは、ピュヴィ・ド・シャヴァンヌの作品に衝撃を受け、パリへ留学した目的はこの邂逅で果たされたと言い、のちにその熱狂的な賛嘆を「巨いなる人なり、高き人なり、我に於て殆んど批判を絶したるの人なり」（『画筆の跡』）と書き残している。これを先見の明といえるのか分からないが、最近の美術史の傾向ではピュヴィ・ド・シャヴァンヌとゴーギャンを20世紀絵画の先駆として高く評価する傾向が著しい。（美術館については→注32参照）

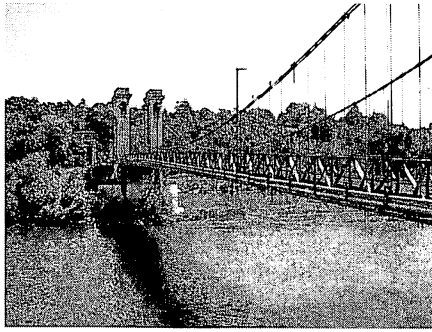
71. **機織**（51）荷風はリヨンで機織り集団が住まうクロワ・ルッスの丘の町（→注20）へ散歩の足をむけたのである。絹織物の技術は、もともとはイタリアからローヌ川を遡るようにして、リヨンに伝えられたもので、当時のリヨンの最大の産業であった（→注1）。ちなみに、ヴェルサイユ宮殿の内装の多くはリヨンの絹織で飾られている。このクロワ・ルッス（→注20）で織られる絹織物は（すべてでないにしても）荷風当時は、日本からの輸出品である生糸で作られ、そのことで、正金銀行リヨン支店は存在し、そのおかげで彼は（まさにニューヨークでなく）フランスのリヨンにいて『ふらんす物語』が書かれるのである。しかし、荷風においてはこの事実と意味は故意に抹消されている。リヨンは、「絹の町」と自他共に認めるフランスの町である。リヨンの絹については、たとえば、絹織りの画期的な“ジャカード織”の考案者ジャカード（フランス語ではジョゼフ・マリ・ジャカール（1752-1834））の名前をあげれば十分であろう。ジャカード織については、京都府が、すでに1872（明治5）年に佐倉常七・井上伊兵衛・吉田忠七という西陣機業関係者3人をリヨンへ留学させ、かつ機械を持ち帰らせている。荷風が滞在していた時期で、絹織に関係する業者（機織、加工裁縫、染色、デザイン、商店、貿易商社など）はリヨンにほぼ1000軒はあった（日本の絹織商社ノザワ、コミヤ、キタムラなどの名前も見出せる）。現在でも「国際絹業協会（I・S・A）」はリヨンに本部が



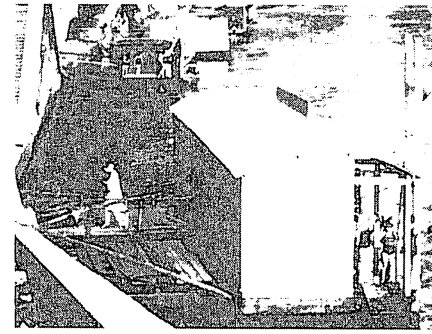
[61]「グージョン」（カワハゼ）



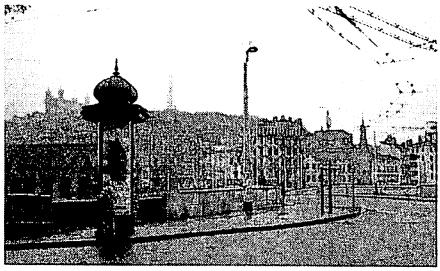
[62] クーゾン村はずれを通過する「列車」（当時）



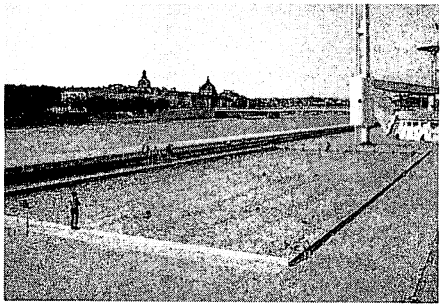
[63]「浮浪の見世物師は向河岸の石の釣橋を渡って」（クーゾン橋）



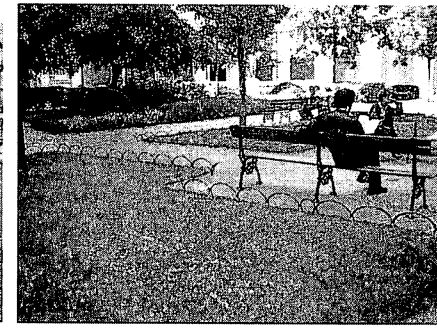
[65]「冷水浴の河船」（女性用）



[64]「橋々の袂」の「寄席や劇場の広告」



[66] ローヌ川の市民プール（現在）



[67]「花壇の蔭で」読書

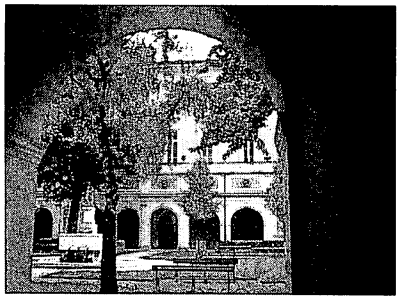
あり、また、この町で、生糸の現物市場（スポットマーケット）が立つ。かんたんな数字でいうと、1905年の統計で、絹（生糸および撚糸）生産（集散地）のアジアでの1位はヨコハマ（年間4,650トン）であって、2位のシャンハイの3,830トンやカントンの2,050トンより多く、一方消費のヨーロッパでの1位はリヨン（7,010トン）で2位のチューリヒの1,530トン、パリの170トンを大きく引き離していた。リヨンの機織職人を土地の言葉で「カニュ」(canut) という。糸巻きを表すカネット (canette) からきているという。ジャカールの発明はパンチカード（穿孔帯）を用いて複雑な織物を早く仕上げる画期的な仕組みで、このことによって織物機械に革命が起こった。この機織りの小さな家内工場の密集していたクロワ・ルッスの広場にはジャカールの彫像が立っている。[写真71] ただし、ジャカールは当初クロワ・ルッスでは排斥されつづけた。彼らの手工業的技能を奪うからだ。機織職人（カニュ）と絹糸商と絹織商の三種の職がリヨンには生まれていたが、その中でカニュの仕事は厳しく、賃金はきわめて安かった。流れ職人がいたり見習いがいることもあったが、普通は、ほとんどが家族労働の家内工業であった。小さな家で1階が仕事場で2階が居間というのが普通だった。[写真72] 1831-34年機織職人の暴動があった。賃金の安さと労働条件の劣悪さに抗議するものだった。このクロワ・ルッスに30年間住んだ瀧澤敬一はここを「うす穢い機織り工場」の満ちた街だと書いている。クロワ・ルッスの職人同士の連帯はつよく、共同体を形成していたため、独自の伝統が生まれた。相互扶助の組織や、“ヴォーグ”などである。しかし、この機織職人の街は、戦後完全にその機能を消滅させてしまった。今、クロワ・ルッスで見られるのは、文化遺産の保存のために記念館で行われるデモンストレーションや「手作り」というはやりの復古趣味で行うアーチストの職場ぐらいである。それは手動であったり電動であったりするが、仕組みは自動織機と同じ方法を守っている。

72. 単調な梭杼の響（51） おさの響は日本では「トンカラリン、トンカラリン」などと表現されるが、リヨンでは bistanclaque-pan「ビスタンクラック・パン」という独自の表現があり、ここから機織り職人を「ビスタンクル」(bistancle) などとも呼んだ。島崎藤村が1913年に八王子の町について「町々に梭の音が聞こえる」(『後の新片町より』) と書いたのと同じ風情がリヨンにもあったのである。[写真73]

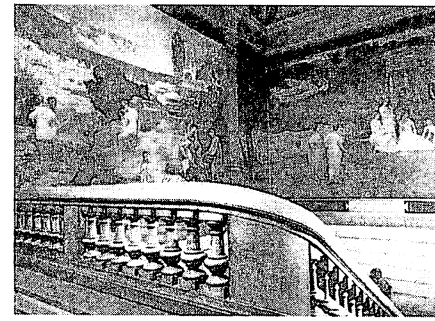
73. 崖の上（51） 荷風は、おそらく「眺望広場」(Place de Bellevue) に立ったのであろう。[写真74] 「ぶらぶら」と上がっていたというから、市庁舎の裏からの細いくねくねした道を登ったと思われる。登りきった丘の町の一角にあるこの小公園は、当時も今も観光案内書で「眺望佳し」と記されている。まさに荷風の描写は、今も寸部もちがわず適応できる。さしずめ日本の観光地なら、荷風のこの一節をそのまま文学碑にして掲げるところだ。

74. ロオン地方一帯の低地（51） このような地理的な把握の卓抜さは荷風の風景描写の特色をなす。ローヌ川は、暴れ川であり、市の北東から流れ来て市の北側で左へ、つまり南へ向きを変える。このときに、川は、左岸、つまり川の東側へ氾濫をするのである。このため現在にいたるまで、リヨン市の東北部（すなわち荷風が今高台から見渡している方角）はほとんど無人の広大な沼地と荒蕪地である [写真75] [写真76]。昔はそのあたりはリヨンではなく“ドフィネ地方”の一部だったと言う。

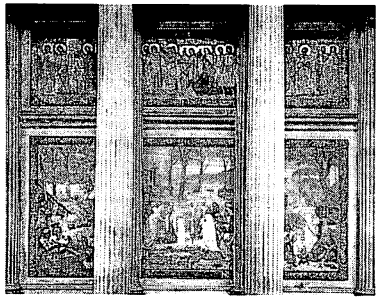
75. アルプの山脈（51） 秋から冬にかけてリヨンから東南斜め方向に長く伸びて見える白い峰々はアルプ [アルプス] ではなくて、グルノーブルの周辺のシャルトゥルーズ山塊やベルドンヌ山脈である。そこまでの距離はほぼ80キロメートル。ちょうど、富士山を新宿から見るぐらいの距離感である。秋も深まれば峰々は白く化粧し、地平線に長く伸びる。アルプスがまったく見えないわけではないが、リヨンからの距離は、150キロメートルほどあって、富士山を成田の飛行場から、あるいは愛知県の豊橋から見るぐらい遠方である。唯一アルプスと分かるかたちで望めるのは、真東の方向はるかかなたのヨーロッパ最高峰モン・ブラン（170キロメートル東方）である。[写真77] この山は富士山より1000メートル以上高く4807メートルの標高があるのでリヨンからも頭が見える。1907年のリヨン測候所の気象記録によると、アルプスの見えた回数は9月から12月まで月平均にならすと各6回、1月と2月はそれぞれ5回となっている。荷風は11月の上旬に見ている。いずれにしても、こういう健康な風景に感動する様子は、荷風らしくもなくめずらしように思えるが、それは、計算づくのことで、この小品の構成上の布石に使われているのだろう。すなわち、ここから、このクロ



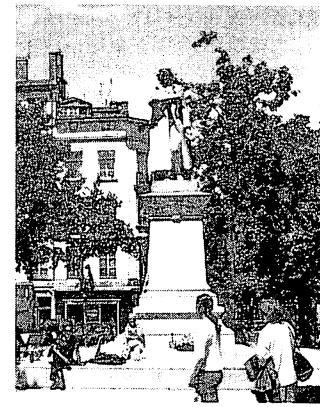
［68］美術館中庭



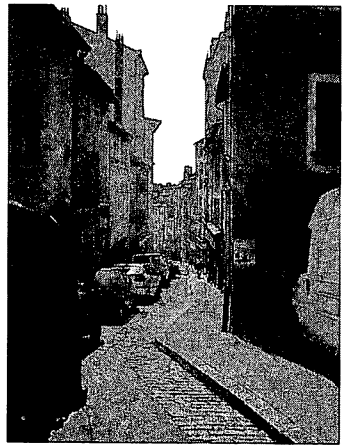
［69］美術館階段を飾るシャヴァンヌ



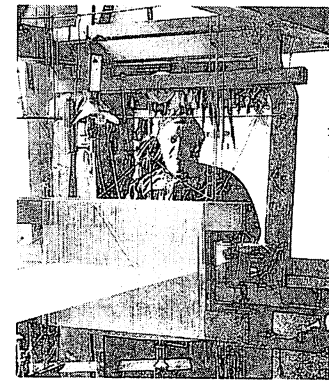
［70］パンテオンのピュヴィ・ド・シャヴァンヌ壁画



［71］クロワルッスの広場に立つジャカール像



［72］「機織(はたおり)ばかりが住んでいる古い街」



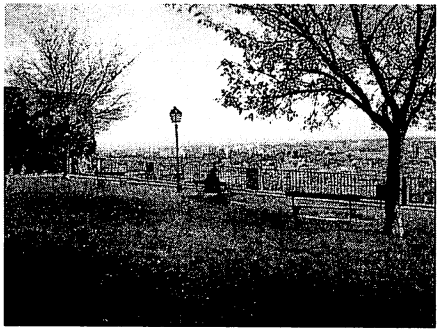
［73］「単調な梭杼(おさ)の響」機織り情景

ワ・ルッス散歩は、転調が行われて、荷風の筆はいっきに、「悲しいような一種の薄暗い湿った感情」を覚える場面を「発見」するようになるのである。「限りもない空間の偉大」は、まさに、この効果を際立たせるための対照的な風景、あるいは気分の提示だったといえる。

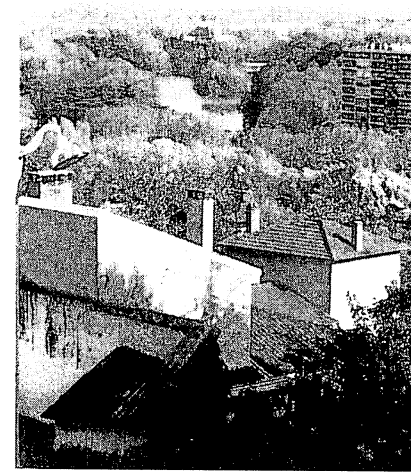
76. 電車の終点とおぼしく［…］**運転手や車掌が**（51）［写真 78］

77. 大縁日ヴォーグ（52） クロワ・ルッスのヴォーグ（→注 62）は、11 月 1 日の万聖節をはさんで毎年 10 日間ほど今日でも行われている。。リヨン近在で残っている唯一のヴォーグである。ヴォーグの語源はゲルマン系の wogen からきていて、船が揺れて漂うさまだという。あちこちを訪れ放浪する遊芸人からきたコトバであろう。ヴォーグは、「教会前広場」ではなく、クロワ・ルッスのある第四区区役所前の大通りでにぎやかに繰り広げられる。いうまでもなく、悲愁ただようジプシー色のたたずまいはすでにない。ジプシーと縁がうすくなり、季節柄「焼栗祭り」と言われたこともあるが、いまは、たんなる「縁日」である。とはいえ、日本でもう少なくなった昔懐かしい縁日の雰囲気は色濃く残っている。お化け屋敷、射的、競馬ゲーム、メリーゴーランド、トランポリン、種々の乗り物遊戯、綿菓子、焼栗、郷土名物のクレープの屋台が並ぶ。［写真 79］［写真 80］［写真 81］ 今も、クロワ・ルッスの縁日では、他愛もない遊戯がたくさん店をだしている。畳 3 枚分くらいの大きな板に直径 20 センチほどの円がいくつも空けられていて、その上には紙がはってある。これを拳固で破るとその先に賞品がある。なにが当たるかわからない、という仕掛ともいえないものや店頭に何十本という紐が下がっていて、どれかを引くと、先端の賞品を吊り上げるという遊びや、3 本の棒が地面に立ててあって、これを 2 個のボールで倒せれば勝ちというミニ・ボーリングだとかいうばかばかしいような単純な遊戯がいっぱいあって、おもに子供向きなのだろうが、けっこう大人も熱くなって挑戦している。このように、今のヴォーグは、荷風が興味を示しそうにないほどあっけらかんとした健康的で家族向けの縁日に変身はしている。いわゆるディズニー化現象のひとつの現れであろう。ただ、ここでも 100 年昔とかわらず、秋の日和に形は異なってはいるもののヴォーグの熱気が体験できる。

78. 銀行頭取（56） 当時の横浜正金銀行リヨン支店長は小野政吉。［写真 82］44 歳。海外支店については、「頭取」（あるいは「支配人」）と呼ばれていた。小野政吉は、幕末の 1864（元治元）年、京都下鴨に生まれ、7 歳で単身フランス留学をした（させられたというべきか）人物で、パリのオルチュス学院で寄宿生となり、15 歳でリヨンに移り、リヨン高等商業学校で 2 年間学び、10 年ぶりに帰国、東京専門学校（現早稲田大学）に入学し、1886（明治 19）年に横浜正金銀行に就職、1898（明治 31 年）年に 33 歳でリヨン支店長として赴任、23 年に及ぶ現地生活をした。荷風は、小野支店長がすでに 10 年目の時に転勤してきたことになる。ついでにいうと、小野政吉がリヨンで入学した学校は、当時は、正式な名前が「高等商業織物学校」というものだった。［写真 83］この学校はリヨン商工会議所が経営を支えていて、このために絹織産業の育成に力を入れ、理事には絹織物商の名前がずらっとならんでいた。したがって、学科も繊維産業の実技、経営に関するものを用意していた。これはおそらく小野の銀行での職務におおいに役立ったはずである。修業年限は 2 年で、授業料は年に 615 フランだった。ちなみに、この学校は、現在は、国際的に有名なビジネススクールと変身（校名は同じだが）、リヨン郊外に移転、125 年の歴史を誇っている。建物跡は、現在「織物歴史博物館」（兼「国際絹糸協会」事務局）となっていて、絹織物の町リヨンならではの観光名所である。フランスでのいわば体当たりのたたき上げ的な教育体験といい、仏語は言うにおよばず、英語、イタリア語、ギリシャ・ラテンの古典語にも通じていたという学識といい、青年荷風には太刀打ちできるすきがなかった。さらには、荷風はアメリカで本気で学んだオペラの知識（『あめりか物語』と『ふらんす物語』にはオペラに関する評論が 6 編含まれる）についての一家言を持っていたが、その自信も小野支店長の前ではかすんだのではないかと思われる。小野は、ピアノも弾けたし、歌も得意で、自宅にはオペラの楽譜が多く残されていたという。オペラ好きが嵩じて、、夜遅くオペラがひけて徒歩で帰れるようにあえて町の中心に転居さえしたという。ようするに学識、職務上のキャリアどの点をとっても、荷風とは雲泥の差の、ある種の貫禄があった。単にゾラだとかモーパッサンを通してのあこがれのフランス像の中でしかフランスを知らない青白い文学青年（と小野の目には映っただろう）などは、フランスが血肉化している小野支店長からみると笑止のきわみだったろう。もちろん、荷風はそういう明治の新知識人を俗物だと蔑視し、いっぽうで劣等感を持つアンビヴァレント

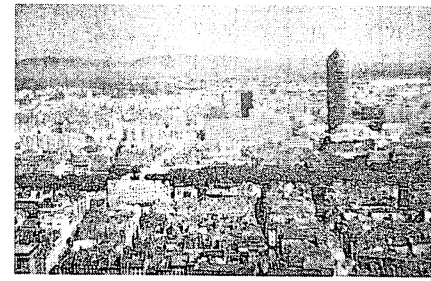


［74］「崖の上に出ると」（「眺望広場」）



［75］「ロオン地方一帯の低地一目に見渡される」

［76］ローヌ川上流の「低地」は今も湿地帯（郊外）



［77］「アルプの山脈」モンブラン（望遠で）

［78］「電車の終点とおぼしく（…）
運転手や車掌が」

［79］「大縁日ヴォーグ」の風景（現代）

な青年を自己演出しつつ、いかにもそのルサンチマンが裏返しになって、「文学」を神格化させることで、銀行や銀行員の「俗人」生活を嫌悪する言説を撒き散らすという離れ業をなしとげた。荷風が小野支店長をそうとう苦手としていただろうことは想像に難くない。対抗の武器は唯一、自分の文学性であり、超俗的ポーズであった。陋巷や娼婦あるいは、怠惰とか、帳簿よりは詩集という好みや行動をことさらに前面にさらけ出して「人一倍安逸と懶惰を好む」(『霧の夜』) と嘯き謹厳な銀行ビジネスへの抵抗を表白することを余儀なくされたとも言える。銀行を辞めてパリへ移った直後に荷風は小野支店長に挨拶状を送っている。

「銀行在勤中は一方ならぬ御世話に相成りありがたく存じ候、無事巴里を見物中御安心被下度候

四月三日　　永井壮吉

奥様によろしく御伝声被下度候」

このそっけない文面、銀行を辞めてパリを見物中だから「安心」してほしいと嘯く。仕事上の元上司に対しての挑発的なひとこととととれなくもない。察するに、小野支店長はこれを読んで不快な気持ちになったのではないだろうか。これは、荷風が辞職するに際してトラブルを起こしていたことを十分に推測させる。リヨンを離れる前日に銀行仲間は送別会をしてくれた。荷風は「甚迷惑に感じたれど浮世の義理とあきらめ」(『西遊日誌抄』) しぶしぶ出かけた、と書き残している。ただ、支店長の家庭で実際には親身に世話を受けたことが再三あっただろうことは、「奥様に」というひとことでよく分かる。

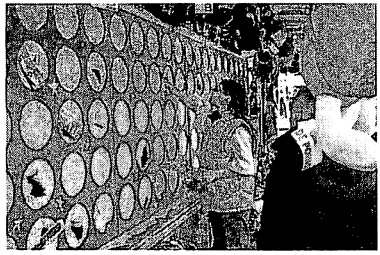
79. 社宅 (56) 支店長宅はノアイユ通り (現在のフォッシュ元帥通り) 54 番地。[写真 84] ここは、当時も今も高級で瀟洒なアパートの多い界隈で、小野が住んでいたアパートは、1 階部分の扉と窓に多少改築のあとが見られるものの、ほぼ当時のまま現存する。ついでながら、この建物の隣の 56 番地は 1881 年までは第六区の区役所で、区長は、絹織物取引で財をなしたブレという人物で、その自宅は 54 番地にあった。

80. 銀行員三名 (56) 1910 年のリヨン支店の日本人行員の名前が分かっている。小野政吉、宮岡武吉、小田精吉、竹村良克、藤井直一、瀧澤敬一、二之宮景吉、岡田重吉である。この掌編に登場する銀行員は、「竹島」と「高田」ともうひとり名前を与えられていない一名である。彼については、夏の間だけ町外れに下宿しているということと、生糸商とともに早めに帰ったと言うこと以外には言及がない。町外れといっても、路面電車で帰れるほどの郊外である。ついでにいうなら、これは、小野政吉が夏場だけ借りているリヨン郊外の貸別荘に寄寓させてもらっていたと思われる。

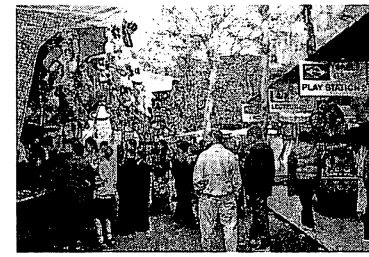
81. 生糸商二名 (56) 横浜の生糸商の 2 人については、当然正金銀行との取引関係があり、これも推測だが、正金銀行と同じラルブル・セック 19 番地の建物に「絹関係業者総合本部」があったので、あるいは、これが彼らの出張先だった可能性もある。(→注 71)

82. 竹島 (56) この「十年振りで出会った竹島」という挿話自体は全くの創作という可能性がかなり高い。しかし、それらしき人物が当夜全くいなかった訳ではないだろう。このエピソードでは、荷風と「竹島」は、旧知の間柄だということがこの席でわかる。このとき、荷風は 27 歳。10 年ぶりというから、17 歳の時の友達という設定になる。彼が神田の外国語学校に入学した年である。ということは、竹島もこの学校にいたらしい。滞仏 4 年 8 ヶ月というので、22 歳からここへ来ていることになる。そして「役員」(おそらく役付きという意味で荷風はつかっているのだろう。係長か)。当時、リヨンの『住所録』には竹島という人物は記録されていない。おそらく仮名であろう。『晩餐』はフランス帰国後 2 年目に発表した作品だから、その人物が特定されようとも、もう荷風は知らん顔するつもりだったのだろうが、かつて、モデル問題で、叔父に絶交を突きつけられた経験があるので、このあたりはややうまくカムフラージュしているのかもしれない。実在する行員の名前で比較的近いのは「竹村良克」である。あるいは、「タケダ」(Takeda) という 33 歳の「絹製品扱い商」というのがリヨン在住商人の名簿に見出される。ややうがちすぎだが、この人物とも正金銀行は関係があり、その名前を荷風は借りてもじったのかもしれない。ここで荷風のいう「10 年ぶり」という 10 の数字の使い方にも注意をようするだろう。数を切りよく整える文飾は荷風のクセであるから。

83. 頭取の夫人 (56) 名前は梅 (梅子) といい旧姓、奥村。[写真 85] 当時 34 歳。この晩餐でもはきはきとものをいう女性で会話のやり取りも軽快だが事実生っ粋の江戸っ子だったそうである。仏語は正規のものではなかったが、自在に喋れたようだ。彼女は、夫政吉の死後 (1925 年)、1942 年に旅

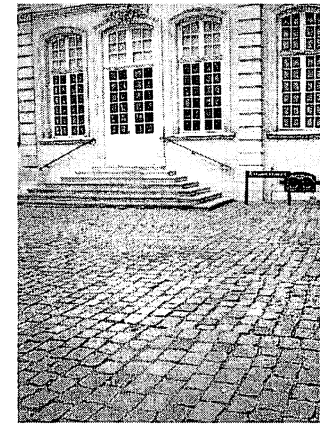


[80] 縁日風景（現代）

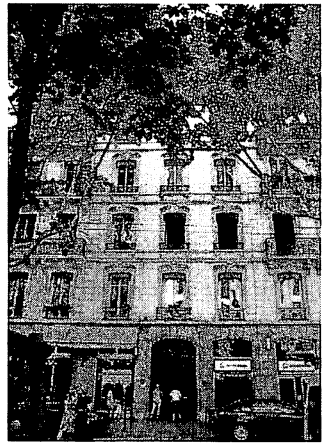


[81] 縁日風景（現代）

[82] 「銀行頭取」小野政吉



[83] 高等商業織物学校
（現在「織物博物館」）入り口



[84] 「社宅」（小野支店長宅）

[85] 「頭取の夫人」小野梅子
左右は政吉、息子の敏郎

行先の満州で病死している。ついでながらリヨンでは小野の4人の子供のうちリヨン生まれの敏郎と生活していた。このとき7歳であった敏郎はその後フランスで学業を終え、のち、三菱商事につとめ、パリで1941年に客死している。

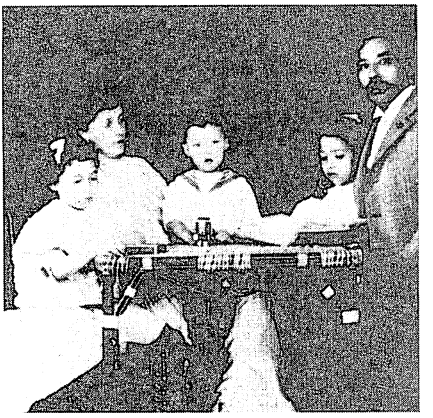
84. 隠し芸 (57) 社交ダンスが得意でなかった小野政吉はしばしば率先してピアノを弾いたといわれる。

85. フランス人の下女 (58) 下女は、アルベルティーヌ・スュアという名前の28歳の女性、もしくはその妹のサビーヌ・スュアという20歳の女性で当時小野邸に勤めていた。この女中姉妹は、住民調査の記載では、出身がドローム県となっている。リヨンからローヌ河を下った隣県である。たしかに、スュアという苗字は、フランス人では珍しいものなのでなにか手がかりが得られるかと調査をしたが、その結果、1891年以降1990年までの百年間に生誕したフランス人の全苗字を網羅した記録によると、この苗字の人物が63人（ただし苗字のみで名前のほうはわからない）はいることがわかった。そのうち1人を除いて、すべてが、このドローム県を含む、リヨン近接の県ばかりで、どうやら、この地方に土着の苗字らしい。つまり彼女たちは近在の農家などの子女であった可能性がある。なお、現在、全国の電話帳を調べると、25人のスュア姓が見つかる。

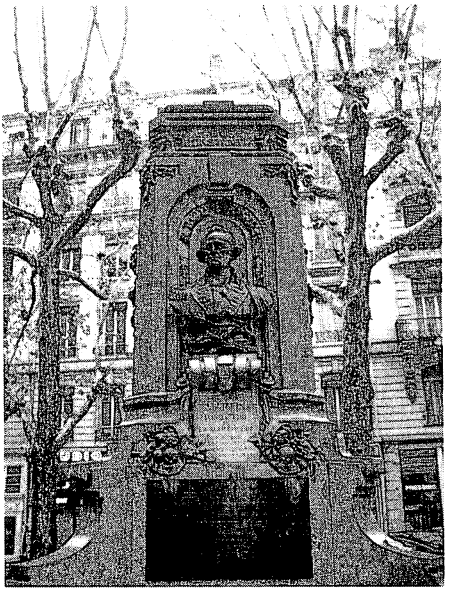
86. 日本の領事 (59) この時の領事は、山田忠澄で、50歳、フランスの女性と結婚していた。夫人はマルグリットといい、リヨン生まれの45歳だった。[写真86] 当時日本領事館はローヌ川左岸のエスト河岸（現在のセルヴィ河岸）11番地にあった。ついでながら、当時リヨンには29カ国の外国領事館があった（現在は34カ国・地域。その後長らく領事館のなかった日本も近々開設予定と聞く）。山田忠澄は明治初期にリヨンの「知識欲に燃える労働者やあらゆる手工業の職工頭のための」ラ・マルティニェール工業学校（現在、その校舎は同名のリセ中高校）[写真87] へ留学して化学を学び、そのまま、帰国せず、リヨン市に開設された日本領事館に就職し、のちに領事にまでなり、ほぼ30年間をリヨンで過した。とうぜんのことながら、日本人社会だけでなくリヨンの経済界でも著名であった小野一家とは深い親交があった。マルグリットと娘キクが写っている写真が小野家には残されている。[写真88] マルグリットは小野梅に仏語を教えていたとのことである。山田には三人の子供がいた。キク（菊）とハナ（花）9歳と弟ジュンタ（順太）7歳である。キク（1897～1975）は荷風の滞在当時まだ10歳だった。当時、荷風の下宿から至近のエドガール・キネ女子中高等学校へ通っていた。[写真89] この少女キクはのちに、キク・ヤマタとして知られる作家となり、1957年にはレジョン・ドヌール勲章を受けるほどの名声を博した。キクは、荷風がリヨンを離れた翌月、1908年4月に、父の転勤に伴って帰国し、日本での教育を受けた後、通信社の仕事に就き、さらに父の死後、母親と再びフランスへ戻る。26歳のときである。彼女が32歳の時、『日本人の口辺に』とでも訳せる日本の歌やおとぎ話の翻案物を編み、それにポール・ヴァレリーが序文を寄せてくれた。これが彼女の文壇デビュとなり、その後、きわめて多くのいわゆる日本文化紹介ものの創作やエッセーを発表して、筆一本で生活をしていたのだが、しかし、後にスイス人画家と結婚してからの彼女には見るべき作品もすくなくなり、その晩年は経済的にも肉体的にもかなり悲惨を極めたといわれる。夫が無名に近い画家であり、また経済的な意味でも生活力がなかったことが原因といわれるが、ほんとうの理由は、スイスという環境にあったと思われる。スイスのフランス語圏は、今日にいたるまで、文学のマーケットがないからある。パリが支配的なフランス語文学の陰でいわゆる青年文学的、同人誌的な文学の営為しかなく、著述は経済生活に結びつきにくいのである。彼女のスイス時代に発行された『スイス作家協会』の名簿をみると、そこに彼女が大きなスペースをさいて掲載されてはいるのが見られる。[写真90] 協会の一員としてスイスでの活動を試みはしたのだろう。が、実作には乏しく、家計を支えるために華道を教えたりして、心はいつもパリに向いていたといわれる。現在、リヨン市フォッシュ元帥大通り（旧ノアイユ大通り）5番地の建物にキク・ヤマタの生家記念プレートが掲げられている。小野支店長自宅のあった54番地の近くである。ちなみに彼女が荷風滞在当時に住んでいたアパートはトロンシェ通り115番地で、このフォッシュ通りとは交差している。現在、キク・ヤマタのすべての遺稿、原稿、書簡、草稿などは、スイスのジュネーヴ州立・大学図書館に保蔵されている。

87. アヴニュウ (61) ノアイユ大通り（現在のフォッシュ元帥大通り）を指す。

88. プラアス・ド・モラン (61) モラン広場（Place de Morand）。[写真91] 現在のリヨテ元帥広場。18世紀の建築家モランが架けた橋の名前に由来する（→注91）。日本領事館の近く。支店長の住まいも

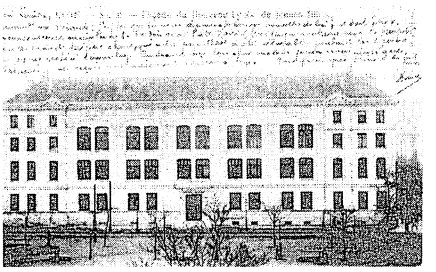


[86]「日本の領事」　山田忠澄一家



[87] 山田忠澄の学んだ学校と創立者像

[88] キク・ヤマタと母親マルグリット
（中央の子供は不明）



[89] エドガール・キネ女子中等学校（当時）

Jonas und der März. Drama. Stauffacher, Zürich 1958. Uraufführung Stadttheater Bern 1959. – Ende September. Roman. Benziger, Einsiedeln 1959 (Tr.: H). – Der König von Bamako. Marionettenkomödie. Uraufführung Zürcher Marionetten 1960. – Drama als Ereignis. Essay in »Deutsche Philologie im Aufriß«. Erich Schmidt, Berlin 1961.

Meili-Yamata, Kikou. *Ps:* Kikou Yamata. Anières GE. * 15. III. 1897 Lyon. *O:* Birmensdorf ZH. *FA:* Lycée Edgar Quinet, Lyon; Seishin-Gakuin, Tokio; Sorbonne et Langues étrangères, Paris. Ecrivain, maître de bouquet japonais. *M:* SES, Société des Gens de Lettres de France, Société nationale d'horticulture (France). *P:* Prix de la Fondation Schiller suisse 1957. Prix des Amis des Lettres 1959 (Paris), chevalier de la Légion d'honneur. *G:* poésie, roman, nouvelle, essai.
Œuvres: Sur des lèvres japonaises (préface de Paul Valéry). Poèmes. Le Divan. Paris 1924. – Masako. Roman. Stock, Paris 1925 (trad. en allemand, danois, espagnol). – Le Shoji. Nouvelles. Stock, Paris 1927 (trad. en anglais). – Les huit renommées (ill. par Foujita). Essai. Delpeuch, Paris 1927. – Saisons suisses (ill. par Meili). Neuchâtel 1929. – Japon dernière heure. Reportage. Stock, Paris 1930. – La trame au milan d'or. Stock, Paris 1931 (trad. en espagnol). – Vie du Général Nogi. Biographie. NRF, Paris 1931. – La dame de beauté. Stock, Paris 1953 (trad. en anglais et en italien). – Trois geishas. Biographies. Domat, Paris 1953 (trad. en allemand et en anglais). – Le Japon des Japonaises. Essai. Domat, Paris 1955. – Le mois sans dieux. Roman. Del Duca, Paris 1956. – Mille cœurs en Chine. Roman. Del Duca, Paris 1957. – Rikka du Japon. Documentaire. Payot, Lausanne 1958. – L'art du bouquet. Essai. Houyoux, Bruxelles 1960.

[90]“スイス作家協会名簿”の中のキク・ヤマタ

至近であるが、荷風の下宿からも遠くない。掌編では主人公を「旅人」としているので宿の位置を定めていないのだが、物語の最後部分に宿へもどるのには「ローン河を渡る」とあるので、ローヌ川左岸にある広場から400メートル先の実際の下宿が「宿」に想定されていると考えていいだろう。それなのに、あえて竹島たちと「橋の上を歩いた」のである。橋を渡れば、右岸に到り、宿に背を向けることになる。たしかに、このときに一緒にいた竹島に「誘われるままに」市内方面へ飲みに行くのだが、すでに荷風は、すすんで市内へ足を向けている。

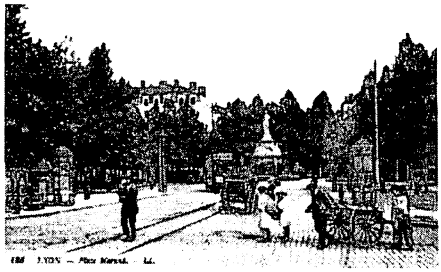
89. 夏中は町端れに下宿している (61) →注80

90. 高田 (61) 「どこか地方の商業高校でも卒業して」銀行に就職し、間もなく、フランスに転勤になった22歳か23歳の青年という設定である。彼の名前も『住所録』には見出されない。この「高田」が荷風のほぼ5歳年下ということになるので、1884（明治17）年ごろの生まれということになる。年齢的に該当しそうなのは瀧澤敬一である。(→［写真3］) 彼は、明治17年3月23日生で、正金銀行のリヨン支店に勤務していた。ただし、彼は、商業学校の卒業でなく、東京大学法学部の出身だし、荷風が去って2年後の1910（明治43）年にリヨン支店に赴任しているので、お互いが顔見知りであることはなかったし、終生なかった。ついでに述べれば、瀧澤はのちフランス人と結婚し、執筆業に転じ、戦前、戦後にかけて、フランス人の生活についての家庭的なエッセーを書いた。なかでも、『フランス通信』（岩波書店全10巻）はとくに彼を有名にした。同書から得られる当時のリヨン支店ならびにリヨンの情報は貴重なものである。弟の滝沢修（本名は脩）は、いうまでもなく「新劇の神様」と呼ばれた名優で、宇野重吉などとともに劇団民芸を立ち上げた演劇界の重鎮で、平成12（2000）年に、93歳という高齢で亡くなっている。瀧澤の『フランス通信』に登場する「支配人のOさん」は小野政吉のことである。瀧澤も小野支店長の多才振りをその著書で紹介している。もし、荷風当時も、ほぼ1910年当時の名簿どおりの顔ぶれだったとすると、序列的に一番下で、音韻的にtakadaに近いのは、okada(岡田重吉)である。なお、当時リヨンには「高田商会」という貿易商があった。この高田も銀行や小野とは懇意であったので、この名前の借用という可能性もわずかだがないわけではない。

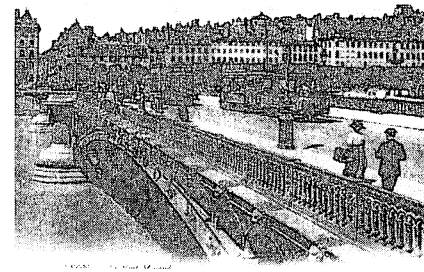
91. モランの橋 (62) 荒れ地であったローヌ川左岸の開発のためのルートとして1774年に架けられた橋。［写真92］この夜荷風たちが渡ったモラン橋（1886年再建）は、ローヌ川の洪水に耐えたはじめての構築物でもあった。建設当初は市外との警備のために鉄柵門がしつらえられ、城門として警備されていた。荷風当時は路面電車も通るガス燈の立つ開放的な橋であった。荷風は銀行勤務にこの橋を（ときには吊り橋のコレージュ橋を）日ごと往復したと思われる。『ふらんす物語』でその固有名が三回挙げられている（「モラン橋」「モランの橋」「ロオン川へ出る橋（の袂の広場プラース・ド・モラン）」）。モラン橋は荷風のもっとも濃密な行動半径の中心の指標のひとつとなる。この橋は、当時はベルエポックの優雅な姿であったが現在は鉄骨コンクリート橋になっている。→注124

92. 市設オペラ (63) リヨンの市立オペラ劇場。［写真93］当時は正式には「大劇場」(Grand-Théâtre)と呼ばれていた。リヨンはすでに300年のオペラの歴史を誇るがこの劇場は1830年に完成した。パリのオペラ座には及ばないが2000席ある建築的にも優雅な建物であった（現在は1200席）。1993年に大改築がほどこされ、屋上にガラス張りのドームが加わえられた（その最上階はバレエの練習場。したがってこの屋上屋は体育館風で優雅とは言いがたい）。［写真94］荷風が言う「柱太き回廊」（→注144）やフォワイエの華麗な装飾などはそのまま残され、往時の優雅な美しさを失ってはいない。ただし、観客席は音響効果などの考慮のために黒一色の機能本位の劇場に様相を一変させてしまっている。荷風がニューヨーク時代からオペラに熱中していたのはよく知られていることで、リヨンにおいても、このオペラ劇場は、『西遊日誌抄』などからもわかるように荷風の生活のなかで大切な位置を占める。銀行と目と鼻の先にあり、通勤ルートがモラン橋経由の場合は必ず劇場前を通っていたことになる。

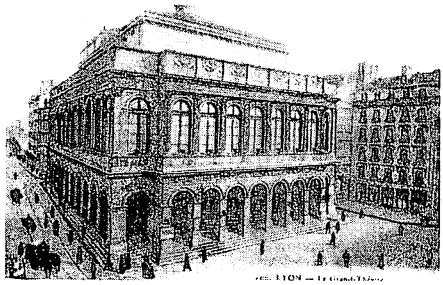
93. ルュウ・ドラ・レピュブリック (63) レピュブリック通り(rue de la République)。［写真95］［写真96］リヨンのほぼ中心を南北に通る大通り。1055メートル。北から1番地がはじまり、オペラ座、その向かいに市庁舎。横浜正金銀行は、5番地の角を入ったところで、その先は左右にフランス銀行（国立銀行）をはじめとして、クレディ・リヨネ、ソシエテ・ジェネラルなど大小の銀行がずらりと並び、当時はグランバザールという百貨店やコルドリエ百貨店など大小の商店、カフェ・アメリ



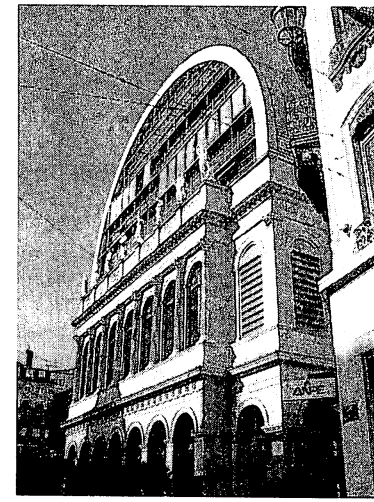
[91]「プラアス・ド・モラン」
「横浜の生糸商と銀行員の一人」
はここで軌道電車に乗る



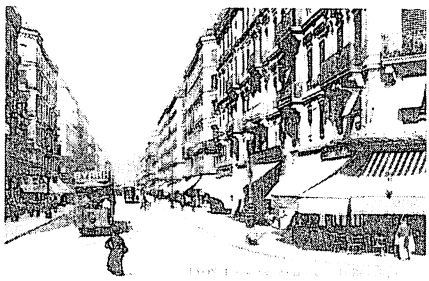
[92]「モランの橋」（当時）
右正面がクロワルッス、橋の先にオペラ座



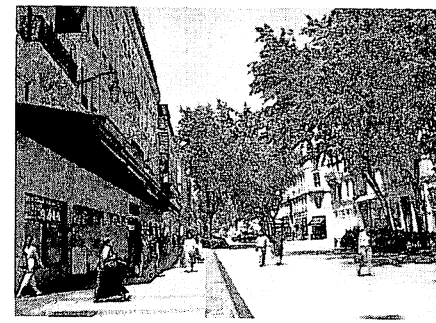
[93]「市設オペラ」



[94] 現在のオペラ劇場



[95]「ルュウ・ドラ・レピュブリック」
当時のレピュブリック通り



[96] 現在のレピュブリック通り

カンなどのカフェなどが並んでいた。リヨン最大の目抜き通りである。百貨店は現在は、当時はグランバザールが“モノプリ”に代わり、コルドリエはなくなって、代わりに“プランタン”がある、というぐあいにいくらかの変化はあるが、その雰囲気は今でもほとんど変わらないといっていいだろう。このレピュブリック通りの株式取引所、市庁舎の斜め向かいにある美術館など主な建物ついて荷風は過不足なく案内をしてくれている。すでに『日和下駄』での遊歩者のまなざしの文学が芽生えていて興味が尽きない。この通りについては同様の詳しい描写が『祭りの夜がたり』でも見られる。

94. 商業会議所の横手 (63) →注 36。「横手」というのは荷風の進行方向左側に会議所を見るという意味。

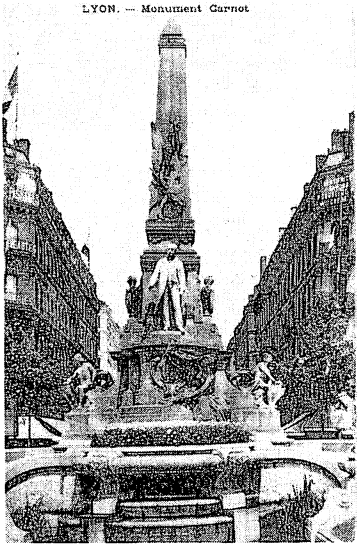
95. 暗殺された大統領カルノオの記念碑 (63) レピュブリック通りを商工会議所から 300 メートル南へ進むと、レピュブリック広場に至る。この広場の真ん中には、「暗殺された大統領のカルノオの記念碑」があった。[写真 97] サディ・カルノ［カルノオ］は 1837 年生まれの政治家で、大統領となり、1894 年のリヨンの博覧会に出席し、商工会議所（証券取引所）で催された宴会会場から出てきて、馬車に乗り込んだところを、イタリア人のアナキストのサント・カセリオという青年に襲われナイフで胸を刺され殺された。[写真 98] 1894 年 6 月 23 日夜 9 時のことである。大統領はその 3 時間後の深夜（24 日）死亡した。青年はその場で捕らえられ、裁判にかけられ、8 月 3 日に死刑の判決が出て、16 日にギロチン刑が執行された。その事件を記念するたいそう大げさな記念碑が 1900 年に建立され、長年に亘ってこのレピュブリック広場の中央に立っていたが、リヨン市民には「リヨンの名誉にもならない記念碑を大げさに建てるのは趣味が悪く目ざわりだし、交通の邪魔だ」と不評であった。1975 年に、この下を通る地下鉄（A 号線）工事にともなって、解体されてしまった。たぶん荷風の時代にはまだ生々しい事件という感じがあったのであろう。そのあとは、モダンなのっぺりした噴水公園となっている。ただ、その代わりに暗殺事件の事跡をしめす記念プレートが商工会議所の壁に掲示され、あわせて暗殺現場（玄関前）に赤い敷石が埋め込んである。リヨンの市民はながらく、「レピュブリック（共和国）広場にカルノ像があり、カルノ広場に共和国像（女神）がある」と戸惑いを感じていたという。それは誤解からくるものである。カルノ広場はペラッシュ駅前の広場の名前であるが、その広場の名前の“カルノ”は実は暗殺されたマリ・フランソワ・サディ・カルノでなく、彼の祖父にあたる革命時代の政治家のラザール・ニコラ・マルグリット・カルノである。その広場にはいわゆる共和国像（自由、平等、博愛の象徴である女神像）の大きな銅像がいまも立っているのである。

96. 四辻をば右手に突っ切り (63) レピュブリック広場を「四辻」と呼んだのであろう。[写真 99] そこから右にジャン・ド・トゥルヌ通り、左にステラ通りが伸びている。

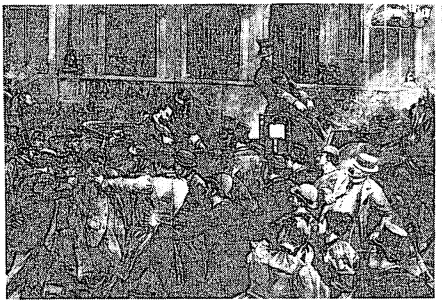
97. 忽然薄暗い横道へと抜けて程もなく (63) 「薄暗い横道」はジャン・ド・トゥルヌ通り。[写真 100] この細い道を 150 メートルほど進むとジャコバン広場に出る。

98. ロンドン・ハウス (63) ジャコバン広場から左右（南北）にオテル・ド・ヴィル（現エドゥアール・エリオ）通りが伸びているが、この通りを左にとってすぐの 92 番地にこの「酒場」はあった。[写真 101] 当時、クローという人物が支配人であったこの店は、現在はエリゼ・ホテルという小さな宿になっている。荷風が入り口に「白鳥の絵硝子」がはめ込んである、と書いているが、現在このホテルの 1 階は、スワロフスキという世界的に有名なクリスタルガラスの工芸品の店になっていて、偶然にしか過ぎないことなのだろうが、この店のトレードマークは白鳥であり、もっとも知られた商品はクリスタルの白鳥なのである。ちなみに、現在、リヨン市にある英国風のパブは、「アルビオン」という店と「スモーキング・ドッグ」という店の 2 軒。それから、「バー・アメリカン・エ・カフェ・アングレ」(Bar Américain & Café Anglais) という店などは、1860 年創業で、現在もベルエポックの雰囲気をもった優雅な喫茶店である。[写真 102] レピュブリック通りの 24 番地にあるが当時とさほどかわらない様式を保っているため、ここでは、今でも往時を忍ばせるような舞踏会が催されたりする。荷風の勤めた銀行とも目と鼻の先だし、おそらく彼も一度ならず足を運んだのではないか。荷風は、ロンドンハウスは「英国と米国の国旗を描いた」宣伝の壁絵がある、と記しているが、その「「バー・アメリカン・エ・カフェ・アングレ」（米国バー・英国カフェ）をも思わせる。ちなみに「十九世紀亭」（→注 153）とは向かい合わせであった。

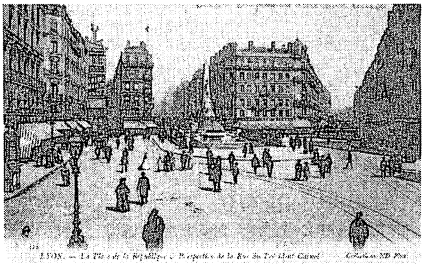
99. 明るい灯火、シガーの煙、酒の匂い、女の香気、電気扇の響き (63) 当時のリヨンではアメリカ・



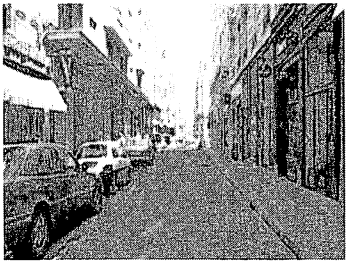
[97]「暗殺された大統領カルノオの記念碑」



[98] 暗殺の情景を描いた当時の絵

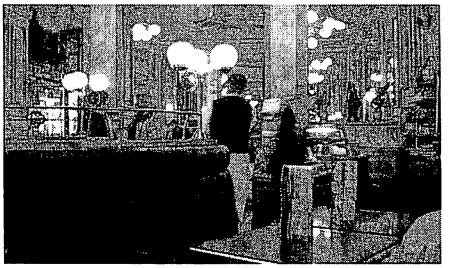


[99]「四辻」（レピュブリック広場）
中央にカルノ像



[100]「忽然薄暗い横道へと」
（ジャン・ド・トゥルヌ通り）

[101] 元「ロンドン・ハウス」　白鳥のマークが見える



[102]“バー・アメリカン・エ・カフェ・アングレ”

バーの流行が見られた。荷風の描くように、「明るい灯火、シガーの煙、酒の匂い、女の香気、電気扇の響き」の店内では、楽団が演奏をしていた。荷風が記述しているのは「ナポリ風の赤い服に半ズボンの4、5人のイタリア人の連奏する細かくて早いギターの曲」だが、当時の記録で、たとえば“グローヴ”というカフェ・レストランには、ニース出身の5人の女性の演奏団がいて、珍しがられていたという。この巧みな情景描写は荷風のベルエポック（という用語はこのときにまだ生まれていなかったが）の捕らえ方がいかに卓抜だったかの証しでもあろう。

100. カジノ (66) 荷風が「寄席の名」というかっこの注記を書いているとおり、いわゆるカフェ・コンセールであった。カジノは目抜きのレピュブリック通り79番地にあった。[写真103]正式にはCasino Kursaal Impérialと呼ばれた、壮大な娯楽施設であった。1933年に閉鎖、映画館に変わった。現在の建物は当時の面影なくPATHE（パテ）というシネ・コンプレックスになっている。

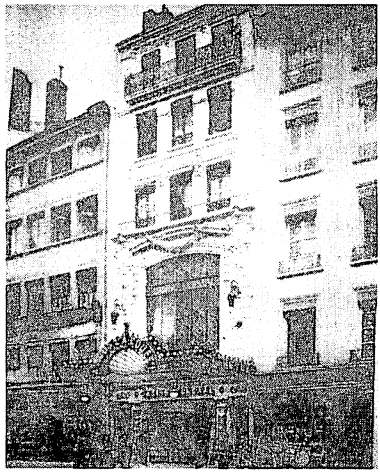
101. 日本雑貨店 (68) このころ、リヨンには「日本商店」(Magasin Japonais) という、かなり手広く、日本の書画、骨董、仏像、象牙細工、陶磁器など工芸品を扱う店があったが、おそらくそれではないか。[写真104] その店の所在地がラルブル・セック15番地である。ということは、横浜正金銀行（19番地）と目と鼻の先ということになる。こうしてみると、ラルブル・セック通りあたりに、銀行、絹織関係、雑貨などのちいさな「日本人」ビジネスコミュニティがあったのだろう。当時のリヨンの在留邦人の数は諸説を総合してみると、ほぼ100人から120人だったと思われる。荷風の生活の半分は、こういう界隈での交友、というよりむしろ、交友を避けることに費やされたとみていいだろう。というのは、後に、リヨン時代の荷風を語る人が現れないことでほぼ推測がつく。『ふらんす物語』に描写されるリヨンの風景の孤絶感とも深く関係する。ただしこれも荷風の“演出”と言えなくはない。(→注146)

102. リヨン大学の円屋根 (68) リヨンの大学の歴史は浅い。この古い町には、医学、神学、薬学、法学、理工、文学などの専門高等教育機関は昔からあり、また名前も知られていたが、いわゆる総合大学はながらく存在していなかった。リヨン大学が設立されたのは、1896年、すなわち荷風がリヨンに滞在するわずか10年前のことであった。医学部についで法学部、文学部が相次いでローヌ川の岸に新築されていった。[写真105] 荷風が「川下遥にリヨン大学の円屋根が黒く聳ゆる」というのはこれであり、この景観は今も全くかわらない。左岸のクロード・ベルナール河岸である。当時は600人ほどの学生が学んでいた。設立後まもなく、理学部や工学部を増設しパリに次ぐ大学都市に急成長していく。ローヌ川左岸（新開地）では、ベルエポックの様式をもつ建物はこの大学校舎と1890年に建てられた県庁舎など数は少ない。しかも川岸でめだって見えるのは今日でもリヨン大学だけである。今は、リヨン大学も第1から第3まであって、荷風が見たという建物は、いまの第2大学、第3大学にあたる（第3大学は「煙草工場」跡の新校舎への移転をほぼ完了させた)。荷風にははたして文学を「研究」する意欲があったのか。すくなくとも、彼がこの大学の文学部や図書館について興味をもった形跡も、言及もないことを指摘しておいていいだろう。「川下遥にリヨン大学の円屋根が黒く聳ゆる」とあるように、あきらかに大学は遠景描写でしかないのである。視界としての遠方だけでなく、生活感覚としても疎であり縁の薄い場所であったことを示しているといえよう。このことは、荷風の時代にギヨティエール橋方面は興味をひくような界隈がなかったという、いわば客観的な観光的スポットの欠如というより、荷風の世界にとって有意味な風景ではなかったことを示す。荷風のリヨンの南限である。

103. 南方行の夜汽車 (68) マルセイユ方面への列車。[写真106] ローヌ川の市内川下側の最後の橋は鉄橋だが、ペラッシュ駅はローヌ川の右岸にあり、南仏行きの列車は鉄橋を（荷風の位置から見て）右から左へ渡る。[写真107] 渡ると線路は二股に分かれる。左をとるとジュネーヴへ、右へおおきく回り込むと、ローヌ川に沿って南下しマルセイユへと通じている。荷風は、リヨン滞在中にマルセイユ方面への旅に出ている。→注115

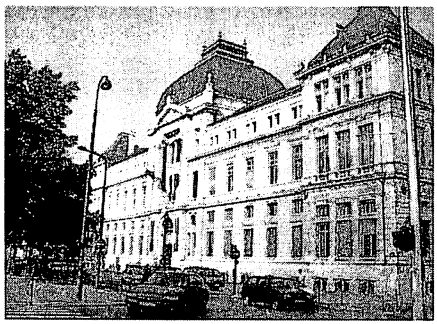
104. 十二月の七日 (71) 「八日」の誤り。

105. 里昂の町の東南部ソーンの河端フールビェール (71) 西または西南部の間違い。興味深いのは、彼が仮に「東南部」というときにも、すでに南へ方位が振っていることである。フールビエール［フルヴィエール］(→注次項) は、街の中心にあたるレピュブリック広場から真西に位置する。[写真108] それを南へ振って観るためには、街の中心より北に位置しなければならない。それはどこかと



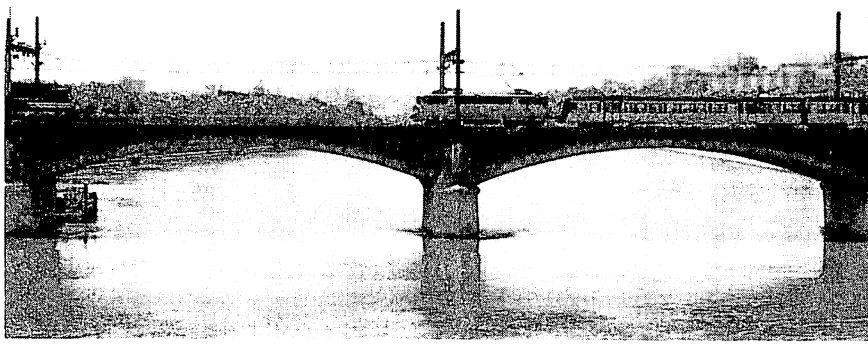
［103］「カジノ」

［104］「日本雑貨店」の広告



［105］「リヨン大学」
（当時文学部。現在リヨン第二大学）

［106］マルセイユ行き列車の発車表示　（現代）



［107］ローヌ川の鉄橋を渡る「南方行」列車（現代）

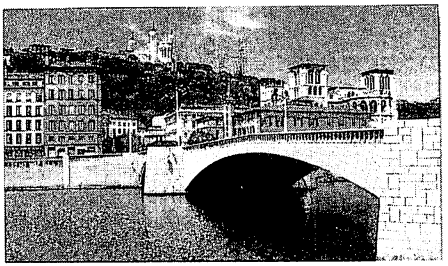
いえば、実は銀行の辺りなのだ。すくなくとも、無意識のうちの「荷風のリヨン」へのまなざしの基点は、まさに、銀行＝下宿を中心にした軸であり、彼のリヨン世界の体験は、この小宇宙で展開される。

106. フールビェール (71) フルヴィエール（Fourvière）。ソーヌ川の右岸、市内西側にある丘の名前。この丘（標高 310 メートル。ただしリヨンの町自体が標高 170 メートル）はリヨン市の発祥の地である。ゴール時代は定かでないが、少なくともローマ時代（紀元前 43 年）にここには都市が形成されていた。現在、大小二つの半円形劇場をはじめさまざまな生活の痕跡を示す遺跡が発掘され、また、そこにローマ博物館も作られて今では観光名所にもなっている。ところが、荷風時代は、それらの遺構などはすべて斜面の畑の下に埋もれていた。遺跡があることは分かっていたが、それらを保護したり復元する社会的意識が稀薄だったのである。この丘にはふもとから二本のケーブルカーが通じている。サン・ジュスト行きが 1878 年に、教会堂の前までが 1900 年に開通している。上りが 15 サンチーム、下りが 10 サンチームだった。現在も同じルートにケーブルはある。

107. 聖女マリーの大伽藍 (71) →注 109

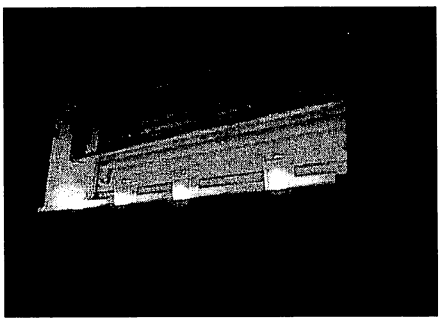
108. 例年の祭り (71) 今日では「光の祭り」（fête des lumières）とよばれる。毎年 12 月 8 日の夜に行われる。→詳しくは次注。

109. 縁起によると (71) 荷風の述べる「縁起」は誤り。真相は以下のとおりである。1852 年、このフルヴィエールの丘（もともとマリア信仰の巡礼の地であった）に、黄金のマリア像（高さ 3 メートル 60 センチ）［写真 109］を献上する式典を執り行う予定であった。聖母マリア誕生祭の 9 月 8 日がその日であった。ところが、この年、洪水があって、彫刻家ファビッシュの作業場が浸水し仕事がおくれた。そこで、3 ヵ月後の 12 月 8 日、すなわち、“聖母無原罪のやどり”の日に日延べされた。この日、朝から雨だったのだが、式典の予定の時刻の夜 8 時になると「奇跡のように」ぴたりと止んだ。その喜びを表すように、リヨン市民は、誰が言い出すともなく、各家の窓辺や通りに小さなろうそくを灯した。これが「光の祭り」の起源だという。ことの真偽を詮索しても始まらないが、これもなんとなくうそくさい話である。雨が奇跡のように止んだということでなく、むしろ、雨が止んだという程度のことを「奇跡」に感じ、その感動のあまり、これを忘れないために、毎年、この日に火を灯そうと市民が思ったなどという話がである。もともと、12 月 8 日は、聖母マリアにちなんだ祝日で、その日に 4 メートル近い巨大な金ぴかの像が献納されるのだから、当然、街の人々は楽しみにし、また準備をしていただろう。電灯がない時代だから、ランプやろうそくは各家に点いていた。雨が止んだ。よかったね、とみんなが三々五々ろうそく片手に丘へぞろぞろと出かけた。町々の通から人々が灯りを携えてあふれ出てくる。これはきれいだったろう。一斉に灯るろうそくのあかりの意外な輝きに、来年もやろうじゃないか、というアイデアを打ち出したひとたちがいたのだろう。ただ、そういうろうそく飾りは、フルヴィエールの丘周辺だけのことで、この習俗が今日のように町中に広がっていったのは、まだまだ年月が必要だったと思われる。いずれにしても、この祭りは、雨が止んだ「奇跡」をたたえるのでなく、あかりがきれいだったことを楽しむ祭りなのだろう。もう汽車も走り、写真機も発明されていた時代に、奇跡話はたぶんなかっただろう。その程度のことだと思われる。そのように想像できるのは、荷風の時代の、1907 年ごろのガイドブックには、どれを見ても「光の祭り」の記載はあるが、その「奇跡的発祥」にまつわる起源を述べたものがないからである。祭りは、“聖母無原罪のやどり”（そもそも宗教的な祭り）の単なる民衆的な参加の形として記してあるのである。リヨンの文化史などをみても、ヨーロッパの多くの町や村にはマリアの奇跡にまつわる伝承があるが、リヨンについては、そのような記録はない、とはっきり書いているし、実際、教会側が編纂するいかなる記録や資料にも 12 月 8 日にマリアの奇跡が起きたなどという記述はみあたらない。では、荷風は、何の話と混同しているのだろう。リヨンの歴史をひもとくと、1643 年 3 月 12 日に召集された市議会で、当時広がっていたペストが終焉した暁には、聖母マリアの誕生祭（9 月 8 日）に、市議会議員が金貨 1 枚と大蝋燭 1 本をフルヴィエールの丘のマリア教会堂に奉納するという願掛けがされた、という記録がある。これを「市議会の願掛け」というが、この有名な話との混同かもしれない。しかし、問題は、荷風がたかがこんなことのために、リヨンの歴史を調べ、それを誤解したとは思えないので、銀行のフランス人の同僚か、下宿の食事時に同席者のだれかから聞いたのかもしれない。誤解は荷風のせいでない。むしろ、不正確なこと



［108］「ソーンの河端フールビェール」
の丘とサン・ジャン聖堂（右）

［109］黄金のマリア像



［110］「家々の窓や戸口やバルコンに」灯るろうそく

［111］「光の祭り」　ろうそく行進

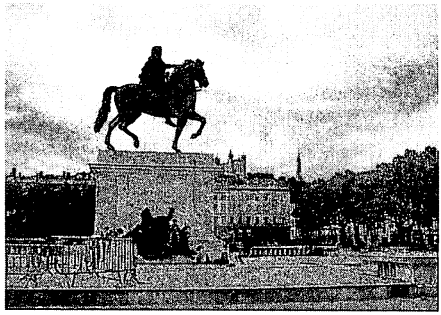
を教えたフランス人のせいで、これをそのまま聞き取れた彼の語学力がかなり優れていたことの逆の証であろう。

110. 家々の窓や戸口やバルコンに、燈明，電灯、瓦斯燈の光が (71) 「光の祭」は今日では聖母マリアとも関係がさらに薄くなり、クリスマス前の商店街の景気付けの催し物で、これを、観光的に行政が全面的にバックアップするという周到な行事と化している。市内到る所（275 箇所）に仕掛けられたコンピュータ制御のハイテクプロジェクターから巨大な光の動く映像が建物の壁に映し出されたり、川面に映画「未知との遭遇」まがいのオブジェクトがはでにぎらぎらと輝く。それは 12 月 5 日から始まり 4 日連夜の催し物となり、1 万 2000 個の電球が使用され、総予算 760 万ユーロ（約 10 億円）が投入される。すでにこれは宗教上のフエート（祭り）というより商業主義のフエステイバル（みせもの）になっている。そうするとろうそくの灯りなどかすんでしまう。ヴァン・ショ（熱燗のワイン）が道端のあちこちで売られる。極寒の夜の甘酒という感じである。大スピーカーから流れる音楽はたいてはロックやヒップホップ系の若者音楽。敬虔な雰囲気は微塵もない。こういう賑わいをよそにしかし、いまでも当夜だけは各戸の窓辺ににろうそくを点し、[写真 110] 荷風には記述がないが、今も、夜 7 時半にサン・ジャン教会の前の広場に多くの人が集まって、ちいさな紙製の灯篭を手に手に、マリアを称える短い歌を繰り返し唱えながらフルヴィエールの丘をゆっくりと登っていく行進がある [写真 111]。おそらくこの行列だけがかろうじて素朴な意味での伝統の名残かもしれない。もちろん、これとて、ちゃんとルートが設定され、パトカーが前と後ろにつき、周到な交通整備の上での行進であって、決してだれともなく三々五々丘へ登り出すというような自由なものではなくなっている。これに参加をする市民が多いとしても、すでに荷風がそう感じていたのかこの祭り全体はすでに「賑わい」である部分がかなり多い。

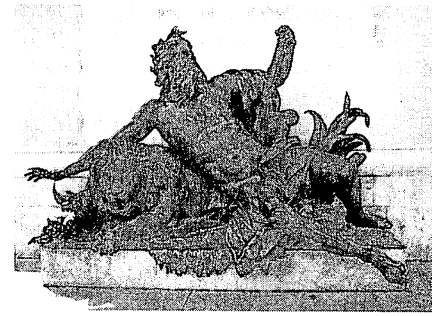
111. ルイ十四世の騎馬像 (71) Equestre de Louis XIV。[写真 112] ベルクール広場（（→次注）の中央にあるローマ人貴族の威風にしつらえられた像。リヨンの出身のフレデリック・ルモ（1775-1827）の作品。1828 年設置。馬上のルイ 14 世はパリの方角へ顔を向けている。当時は四辺に鉄柵が設けられていた。ついでながら、現在は、その台座の東西両面にローヌ像（東面）[写真 113] とソーヌ像（西面）[写真 114] がそれぞれ設置されている（荷風時代はは市役所に置かれていたもので、クストゥー兄弟の作。じつは、かつてはベルクール広場にあったのだが、旧ルイ 14 世像がフランス革命時代の 1794 年に破壊されたため、ローヌ、ソーヌ像だけをはずして市役所に避難させていた。荷風時代は、まだ市役所にあったが市役所は銀行とも至近距離なのでこれを見ている可能性は高い。

112. ベルクールの広小路 (71) ベルクール広場（Place Bellecour）。[写真 115] [写真 116] リヨン市の中心、いわばへその位置にあるほぼ方形をした広場。ベルクールとはすなわち「壮麗なる広場」。東西 310 メートル、南北 200 メートル。1617 年に整地され、1825 年に建築家マンサールの設計の下に今の形に造園した。南面にシンメトリックに二つの池と二軒の瀟洒な小館をしつらえ、その南には花屋が並んだ。現在の騎馬像はこのときに二つの小館を結ぶ線を底辺とする二等辺三角形の頂点にあたる位置に置かれた。毎夕軍楽隊による演奏会があり、リヨン名物だったが、荷風はこのことに一度も言及していない。軍楽がきらいだったか、言及するにおよばない内容だったか。おそらく両方だったろう。当時はリヨンの金持ちの住まいが公園を囲むようにあった。

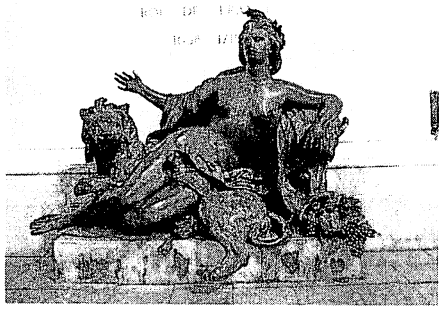
113. DIEU PROTÈGE LA FRANCE（神フランスを守らせ給う）の大文字。その下なるサンジャンの古刹では MERCI SANTE VIERGE(聖女の慈悲）なる文字 (71) 当夜はフルヴィエールの丘に大きな光文字をかかげるが [写真 117]、ここでも荷風の視点の飛躍がある。すなわち、ベルクール広場から「大伽藍」は十分に見えるが、「サンジャンの古刹」（→注 43）は見えないのでる。この両方を見る位置へ唐突に転位しているのである。その位置は、ベルクール広場の北西の端まで行って、そこから、さらにシャンボネ通りを西へ 150 メートルほど進んだボナパルト橋のたもとあたりである。ベルクール広場は、周りを建物で囲まれていて、フルヴィエールの大教会堂のように高台にある建物は見通せるが、サン・ジャン教会は平地にあるため、広場の周辺の建物にさえぎられて見えないのである。いわば荷風は、この何百メートルかの距離をゼロにして一文の中に溶け込ましている。燈火の文字であるが、今もそうだがかつてもサン・ジャン教会で光の飾文字をかかげたことはないようである。当時の絵葉書（1906 年）を見ても、フルヴィエールの大教会堂の左右（すなわち丘の上）に文字が浮んでいる。現在ではフルヴィエールの展望台に AVE MARIA（アヴェ・マリア）という文



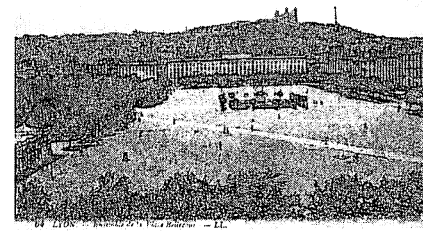
［112］「ルイ十四世の騎馬像」



［113］ローヌ像

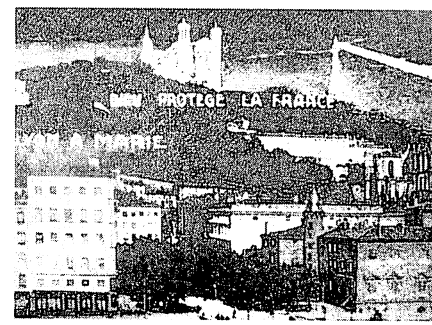


［114］ソーヌ像



［115］「ベルクールの広小路」

［116］ベルクール広場（現在）



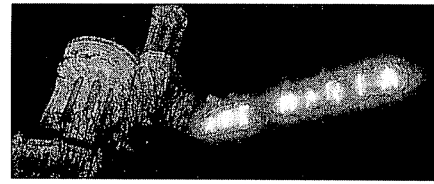
［117］「大文字」（「神フランスを守らせ給う」）（当時）

字が掲げられるだけである。[写真 118]「神フランスを守らせ給う」はいかにもナショナリズム感情の露骨な願いだから、いまどきこういう標語は使用しないのだろう。

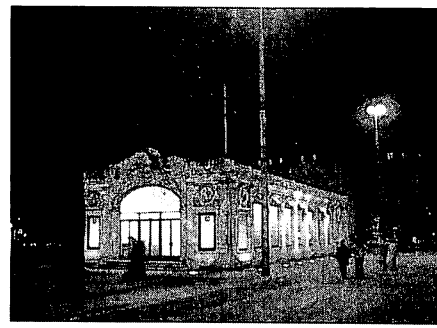
114. メイゾンドレー（金粉楼）(71) メゾン・ドレ（Maison-dorée)(「金色の店」)。[写真 119] 当時リヨンでは有名なグラン・カフェ・レストランである。ベルクール広場内の西南の角方向にある。平屋建てのこのパヴィヨン・ウエスト（西館）と呼ばれる建物は当時の優雅さの面影をのこして現在は、リヨン市の市営展示場「ル・レクタングル」になっている。荷風時代の案内書では、夜毎演奏会が行われる有名な店のひとつとして紹介されている。ちょうどこの建物と対称的な位置にふたごのように、もうひとつパヴィヨン・エスト（東館）がある。現在は観光案内所になっているが、当時は警察署だった。なお、「片隅なる池の畔」と荷風が描く「池」というのは、人工的な水盤状の浅いもので、当時の写真などを見るとはでな噴水が上がっていたようだが、いまはほとんど水も満たされることがない。[写真 120] これもふたごのように館に合わせて対称的におかれ現在もそのままある。

115. もはや十一月 (75) 荷風は、リヨン滞在中の 1907 年 11 月 11 日から 16 日までマルセイユ方面（そのうち 4 日はアヴィニヨン滞在）への旅に出ていると思われる。休暇をとっての旅でなければ、欠勤の可能性もある。というのは 11 日は月曜日なので、もし休暇なら土曜か、日曜に出かけ、なるだけ休暇日数を稼ぐのがふつうの勤め人の行動である。むしろ、一番勤め人が鬱陶しいのが月曜日なのであるいは、気まぐれに欠勤して旅に出たのかもしれない。

116. 霧 (88) この作品はリヨンの風景にたいして、後世、日本人に徹底的に暗いイメージを与えたと思われる。文庫文で 11 頁しかない作品で、タイトルのそれを除いても 18 回も「霧」という言葉が現れるのである。荷風の時代の霧の発生は、実際に多かったのだが、それはむしろ石炭を燃料とする暖房や工場の煤煙によるスモッグというほうがいいだろう。そのことは荷風の数年前にロンドンの霧を体験している夏目漱石がはっきり指摘している。「倫敦の町を散歩して試みに痰を吐きて見よ。真黒なる塊りの出るに驚くべし。何百万の市民はこの煤煙とこの塵埃を吸収して毎日彼らの肺臓を染めつつあるなり。我ながら鼻をかみ痰をするときは気のひけるほど気味悪きなり」（日記)。興味あることは、漱石はその霧を文学化することなく、空気の汚さを即物的に訴えていることである。ついでに言うと漱石の「永日小品」には、たしかに、「霧」をテーマにした作品があるが、ここでも同じく、「泥炭を溶いて濃く、身の周囲に流したように、黒い色に染められた重たい霧が、目と口と鼻とに逼って来た。外套は抑えられたかと思うほど湿っている。軽い葛湯を呼吸するばかりに気息が詰まる。足元は無論穴蔵の底を踏むと同然である」と述べ、この気象現象はいささかも感傷的な世界へわれわれを誘うものでなく肉体への脅威としての霧が描かれるのである。このように漱石においては、霧はネガティヴな感覚の表象であり、逃れたいと感じている（「店の中では瓦斯を点けている。中は比較的明かである。人は常のごとくふるまっている。自分はやっと安心した」）のにたいして、荷風は霧に対して否定的感情をも含めてあくまでポジティヴで、その詩的世界の表象をたくみに取り込んでこれを用いている。ロンドンほど大都会でないにしても、リヨンにおいて漱石と同じような環境にいて、なお霧を素材にする荷風のしたたかさがこういうところにも見られるといえよう。いずれにしても、たしかに、冬季は暗く息苦しい感じがあったことは否めない。これをフランス語では miasme（瘴気、腐敗ガス）と言って、霧に文学的な色合いを与えることはほとんどないという意味では漱石の感想のほうがヨーロッパ的なのであろう。当時の気象記録によると、1907 年から 1908 年にかけての 1 年間で発生した霧の回数はちょうど 50 回である。荷風の滞在した年をほぼ中心として前後 30 年、都合 60 年間の統計記録によっても、霧の発生の平均回数は年に 46.3 回（内冬での回数は 22.5 回で、秋の 18.1 回を加えると、この両季節でほぼ 1 年分となる）あるので荷風が体験した冬の霧発生はほぼ平年並みといえよう。現代では、リヨン地域の霧の発生は、年間を通して、平均 14 回のみである。そのうち、冬（フランスでは 12 月 21 日から 3 月 20 日を冬と定義する）に 7 回発生している。それも終日ということはまれで、たいていは、ヨーロッパ独特の薄暗い天気のために気がつかないことも多い。また、気象学的には、フランス語では brouillard というのが「霧」で視界 1 キロ以下をいい、1 キロから 5 キロの視界が可能な現象を brume「靄」ということになっているのだが、じつは、日常的にはこの両者はしばしば一緒に表現（brouillard-brume）されることが多く、つまりは「霧」も「靄」もさらには「霞」も区別がほとんどない。日本語では、伝統的に「霧」は秋から冬に、「霞」は春の気象現象で、つまりは「文学的」なのだが、フランスでは、もち



[118]「大文字」(「アヴェマリア」(現在)

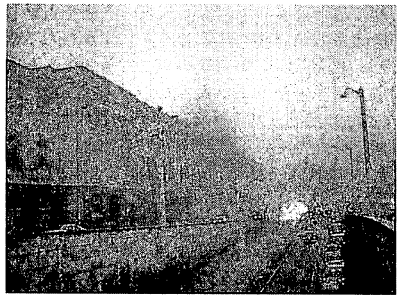


[119] 「メイゾンドレー(金粉楼)」
現在は市立展示館

[120] 「片隅なる池」

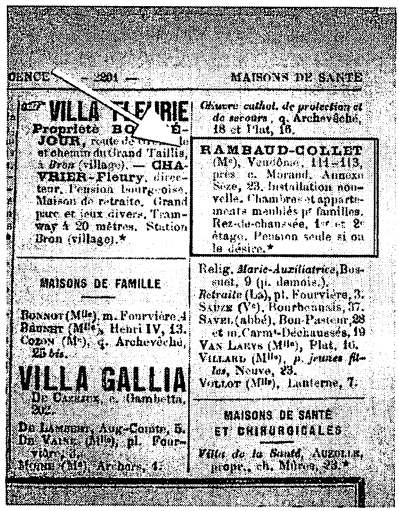
ろんこういう感覚は一切ない。いずれにしても、荷風が感じるような「霧」にあたる実際の現象は今日では年に2、3回である。[写真121] なお、ロンドンでも霧は今日では稀になったと聞く。その点リヨンと同じである。現在に霧が少ないのは、いわゆる暖冬現象も関係しているだろう。リヨンにはかつては霧は多く発生していたことはさきの気象記録でも明瞭だが、そもそもリヨンを霧と結びつけたのはスタンダールだと言われている。1837年の『観光者の思い出』で、「リヨンは、黒い土と、パリに比べて百倍も濃い霧の町である…。リヨンでは半年の間、週に2日は霧が込める」と記している。「百倍も濃い」というのは文飾表現であろうが、霧の発生回数は、ほぼその通りである。こういう記述はリヨンについての記録がある古代から多かれ少なかれ見られる。すでに5世紀にリヨンに生活したことのあるローマのアポリナリスの書簡にも記載され、その伝統は長らく続いた。スタンダールのあと、文芸史家のイポリット・テーヌも、1866年にリヨンをこう描いている。「緑の色合い、霧、いまにも氾濫しそうな滔々たる流れ、町を浸す雨」と記し、また「リヨンというのは鬱陶しい町だ。雨がほとんど毎日降り、空はいつもどんよりしている。フランスの町で、ここほどロンドンに似ているところを知らない」とまで言っている。(事実は、雨天の日数はパリの方が多いのであるが)。20世紀では、たとえばリヨン生まれのガブリエル・シュヴァリエ(1895～1969)の『ブリュムリーヴ』("霧の河岸"という造語の地名)というような作品を読むとやはりリヨンの霧がでてくる。シュヴァリエはリヨンを「霧の町」と呼んでいるし、その小説の冒頭にも「なにもかもを吸い込むような闇夜が、息の詰まるような濃霧をともなってこの大きな町を覆っていた」と書いている。これは1930年1月7日を舞台にしている場面なのだが、荷風とはもう4半世紀も離れているとはいえ、暖房設備や町の構造が基本的に同じ時代のことだから、この感じは荷風と共有できるのではないか。ただ、念のために言い添えておくが、シュヴァリエにおいてもこの霧はブンガクの背景ではなく、じつは、この霧のために交通事故が起こるというだけのことである。今まであえて遠藤周作にはふれないようにしてきたが、霧に話が及んだついでに、すこし言及しておく。そもそも、日本で、漠然とではあるが、リヨンは霧の町であるというイメージを流布させたのは荷風についで遠藤だといわれている。遠藤周作は1950(昭和25)年から2年半にわたってリヨンに留学をしていた。第二次世界大戦の終わった直後である。そのリヨンを舞台に『白い人』が書かれ、これが第33回の芥川賞を受賞したのは1955年のことであった。当時『白い人』はかなり多くの日本人に読まれたと思われる。この小説中で遠藤は「霧」という言葉を7回使用しているが、その内の4回がほとんど同じ表現(「リヨン特有の黄濁した霧」2回、「黄濁色のリヨン特有の霧」、「リヨン特有の黄濁色の霧」)で、あとの3回はそれぞれ「霧」、「霧雨」、「朝霧」である。このステレオタイプな表現(『フランスの大学生』所収の「冬ー霧の夜」でも同じ)のせいか、また霧がとくに小説の展開との内的な関係を持たないからか、リヨンの町に色合いのついたイメージ想起させる力は実際は薄い。この小説は1930年頃から40年前後にかけてのリヨンの町に住む主人公(フランス人)の屈折した生い立ちからナチの侵攻、敗退を描いたもので、時代的にはさきのシュヴァリエにも近い。当然、遠藤のいう「黄濁色」というのは、質の悪い石炭の排煙のまざった霧をいうのであろう。ついでに雨についてもひとこと。リヨンには雨はたしかに多い(「早10月も末近くなる…と空は全く灰色に褪せきって細かい雨が降り出す。明けても暮れても雨である」『秋のちまた』)。現在でも雨が降る日は年間平均157日もあり、とくに秋、冬に多い。秋は、91日中、45日は雨であり、冬は90日中67日が雨か雪である(平年統計)。荷風のリヨン滞在はおもに秋と冬なので、この点でもパリ滞在中の季節(春)とはおおいに心象風景が異なり、リヨンの素材はどうしても暗鬱になりがちである。

117. 下宿屋 (88) 『西遊日誌抄』によると荷風は「ロオン河西岸ワンドオム街の下宿屋に移る」と記している。1907年8月2日のことである。ワンドオム街は、ヴァンドーム通り rue Vendôme。「西岸」は「東岸」の誤り。ヴァンドーム通りは、ほぼ南北にまっすぐのびる全長2703メートルの、リヨンでも有数の長い道である。ローヌ川の東岸ということは新市街地であるということである。その通りの南半分の部分には労働者が多く住み、町工場などが多い。そこは落ち着かない雰囲気であることの否めないリヨン第3区にあたり、北半分部分はベルエポック風の新興住宅地のある第6区に属する。この行政区分は、今も荷風時代とおなじである。この長大なヴァンドーム通りは、番地にして奇数側が273番地、偶数側が296番地まである。荷風の『霧の夜』に描かれる下宿の状況や近隣の



［121］霧のリヨン（現代）

［122］「下宿」（左の扉が入り口）



OENCE — 201 — MAISONS DE SANTÉ

VILLA FLEURIE
Propriété BOUÉJOUR, route de Vaise, le chemin du Grand Taillis, à Bron (village). — CHAVRIER-Fleury, directeur. Pension bourgeoise. Maison de retraite. Grand parc et jeux divers. Tramway à 20 mètres. Station Bron (village).*

Œuvre cathol. de protection et de secours, q. Archevêché, 18 et Plat, 16.

RAMBAUD-COLLET (Me), Vendôme, 111-113, près c. Morand. Annexe Seze, 23. Installation nouvelle. Chambres et appartements meublés pr familles. Rez-de-chaussée, 1er et 2e étage. Pension soulé si on le désire.*

MAISONS DE FAMILLE

BONNOT (Mlle), m. Fourvière, 4
BÉRNET (Mlle), Henri IV, 13.
COZON (Me), q. Archevêché, 25 bis.

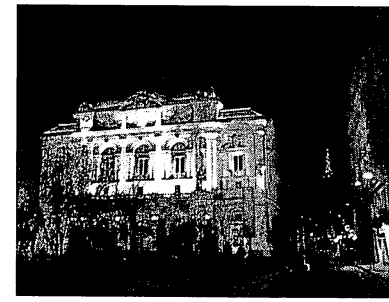
VILLA GALLIA
DE CAZENAVE, c. Gambetta, 202.
DE LAMBERT, Aug.-Comte, 5.
DE VAISE (Mlle), pl. Fourvière, 3.
MÉRIE (Me), Arbres, 1.

Relig. *Marie-Auxiliatrice*, Bossuet, 9 (q. damois.).
Retraite (Lo), pl. Fourvière, 3.
SADEK (Ve), Bourbonnais, 37.
SAVEL (abbé), Bon-Pasteur, 28 et m. Carm.-Déchaussés, 19
VAN LARYS (Mlle), Plat, 16.
VILLARD (Mlle), *p. jeunes filles*, Neuve, 23.
VOLLOT (Mlle), Lanterne, 7.

MAISONS DE SANTÉ ET CHIRURGICALES

Villa de la Santé, AUZELLE, propr., ch. Monro, 23.*

［123］下宿の宣伝文



［124］「劇場」（セレスタン劇場）

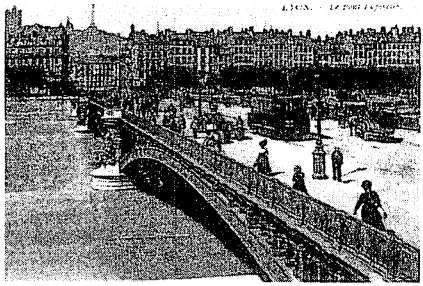
［125］ユーゴ、スクリーブ、ミュッセ
（セレスタン劇場ファサード彫像）

風景描写と、当時の世帯調査、住民録などをてがかりにした荷風の下宿位置調査の詳細を省略して結論だけ述べると、下宿屋はこの通りの113番地にほぼまちがいなく比定できる。すなわち下宿の戸口から筋向こうにサン・ポータン教会が望めること、教会前の広場を横切って労働者街へと向かうなら、下宿は教会より北側にあるだろうこと、同宿人に学生やドイツ人教師や元オペラ歌手などがいることから、そこはいわゆる労働者向けの下宿ではないこと（フランスは階層社会である）、「内儀（かみさん）」が取り仕切る下宿であること、「下女」を置いていること等々の条件を満たすような下宿はこの113番地のそれ以外にいまのところ見つかっていない。[写真122] 以下この下宿について詳述しよう。その下宿の持ち主はアタール・ランボーという当時68歳の人で、出身は、リヨンから南西に20キロほどにある人口が1700人ほどのモルナンという村であった（この頃は村はリヨンと鉄道でむすばれていた）。ランボーという姓は、当時リヨンには46軒もあり、その縁戚関係など詳しいことははわからないが、彼の前歴と職業は分かっている。ランボーはフォンテーヌ・シュル・ソーヌ村で公証人をしていた。この村はリヨンのすぐ北にあって、今では広域リヨンに含まれる自治体である。公証人というのは、フランスでは中世以来、ある種の名士である。1945年までは、公的な資格をもつという意味では村長の次に名前の並ぶぐらいであった。長らくここで公証人をしていたランボーは1903年に引退し、その“営業権”を後任に譲り、リヨンに出て来た。リヨンでも公証人は当時、定員が30人（戦後は、公証人高等専門学校または法学部の大学院修士課程終了の後、一定期間の実務経験のあとに開業資格を得るように制度改革がなされたが、それでも現在でもリヨンには100人程度しかいなくて、弁護士が1050人もいるのにたいしてやはり少数である）と決まっているほどの特殊な半世襲的職業である。アタール・ランボーは、リヨンにある公証人組合の事務所に引退後の席をおき、管理部の文書室長（おそらく実際には仕事をしない名誉職だと思われる）を務める。そして、1911年の秋頃には組合の名簿からもその名前が消える。おそらく亡くなったものと思われる。いずれにしても、ランボー夫妻がこのヴァンドーム通りに新築（1896年建設）の建物にアパート（109番地、111番地、113番地）を大がかりに買うことが出来たのは公証人の権利譲渡金をもとにしていると思われる。またサン・ポータン教会のいわゆる信徒代表もしていたのではないかと思われる。同名の人物が教区信者名簿の筆頭に見いだされるからである。その意味では篤実な人物だったのかもしれない。なおこの下宿は1921年の夏ごろに閉館、その全室は別の公証人の手で処分されたと思われる。

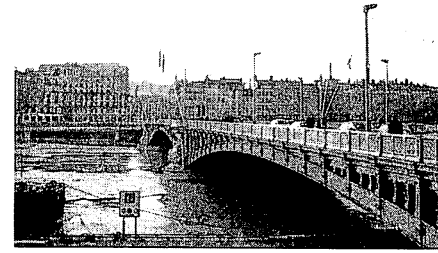
118. 食堂 (88) 朝食が50サンチーム、昼食と夕食はそれぞれ2フラン。ついでながら、この下宿は、部屋代が2フラン50サンチームで、普通は、朝夕の食事付きで契約するので、下宿代は1日5フランだった。これを中の上程度のホテルでの食事つき料金（7フランから10フラン）と比べると、ほぼ3分の2から半分の料金になる。長期の滞在なのだから、妥当な値段ではある。これで月に150フラン、そのほかに石炭代（暖房費）とか洗濯代、シーツの取替、女中への心づけなどで30フランというところか。つまり月に180フラン。このランクの下宿となると、労働者などは手が出なかったはずである。瀧澤敬一は自分の下宿を「安月給取りでは寄り付けず、客は多くは外国人で・・・」と記している。当時の日本人銀行員の給料はかなり高かったことがわかる。

119. 夕暮れから殊更に深くなった霧は何時か雨になっていて (89) 1907年12月31日（「大晦日」）のリヨン地方測候所の当日の気象記録では、「雨、雪。低気圧」となっている。

120. 内儀（かみさん） (89) シャルロット・ランボー・コレ（コレは旧姓）といい、地元リヨンの出身。当時58歳。72歳で死ぬまで「下宿屋」をしたようである。下宿屋を開業することは、彼女の発案であったろう。というのは、このとき主人はもう当時としては高齢で、文書室長とは言え、事実上は名誉職で社会的な活躍はやめていると思われる。あるいは引退したのは病気が理由だったのかもしれない。すくなくとも亭主は荷風帰国後まもなくして亡くなる。この下宿の宣伝文が残っている。《ランボー・コレ夫人 / ヴァンドーム通り 109 ～ 113番地 / 別館セーズ通り23番地 / モラン大通りに至近 / 設備最新 / 部屋貸しまたは家族向けアパート / 家具付 /1階、2階、3階 / 希望に応じて賄いのみも可能 /》。[写真123] 彼女には、2人の娘がいたが、荷風の当時に、28歳と30歳で、この2人は、どうやら終生独身で、かつ無職だった（ただし、1921年の国勢調査では、母親と同じ名前をもつ妹のほうの職業欄には「英語・音楽教師」と記載されている。42歳で唐突に教師として登場するのもいささか奇妙である）。さらに、どういう事情なのかわからないが、「内儀」は、世帯調査のたびに、生年を変え



［126］「ラフェット橋」（ラファイエット橋）



［127］現在のラファイエット橋

［128］「小商人（こあきんど）」

［129］「サンポータンと云う寺院」

て、あるいは空欄にして登録し、かつ、4人の異なる亭主をそのつど持ち、しかも、その主人と言うのが、いずれも苗字が同じであるところをみると初めの主人の兄弟と思われるのである。不思議としか言いようのない女性である。これは大胆すぎる推測かもしれないが、彼女は虚栄心のあまり一種の虚言癖があったのではなかったか。夫のアタール・ランボーを喪ったあと、未亡人（ヴーヴ）と呼ばれるのを避け、あくまでマダムであることを通すために、架空の夫をそこに記載し、それは、ランボー姓でなくてはならず、このため、都度違うファーストネームをそこに発明しなくてはならなかった。さらに、そのつじつま合わせに、自分の年齢も詐称し、娘のひとりに英語・音楽教師などという職業を捏造したのではないだろうか。荷風の描写にある「恐ろしく丁寧」と「慾に抜け目のなさそうな」という二面性がやや奇異な感じをわれわれに与えるのは、そのような彼女の精神構造的な背景が横たわっているせいかもしれない。なお彼女は、おそらく1921年の夏に亡くなったと思われる。

121. トーマスの「ミニオン」(89) 1907年の大晦日にオペラ座で上演されていたのはベルリオーズの「ファウストの地獄落」である。「ミニオン」は元日の公演だった。これも荷風の文飾なのかもしれない。なお、その第2幕でローザ・ゼッティ（→注144）がジプシーダンスを踊っているいる。

122. 劇場 (89) セレスタン劇場（Théâtre des Célestins）。[写真124] この建物はもとはヴァリエテ座として、1792年に修道院跡に建てられた劇場だったが、ちょうど100年後の1871年に火災で焼失、リヨンの建築家ガスパール・アンドレの手によって1877年に完成したのだが、再び1880年に火災に遭い、1881年11月21日に完成したものである（席数1600）。主として演劇、ボードヴィル、オペレッタなどの上演につかわれていた。荷風はリヨンでも演劇を多少観ていたが、劇場名を記録していない。しかし、当時、いわゆる寄席でない多少とも文芸的作品を上演したのは、ここしかなかった。

123. スクリーブ (89) フランスの劇作家ユージェーヌ・スクリーブ（Eugène Scribe）(1791-1861)。当夜スクリーブの作品がリヨンの諸劇場で上演されていた記録はない。しかしセレスタン劇場では頻繁に上演されていた記録はある。また、この劇場の正面装飾には、三大劇作家として、ヴィクトル・ユゴー、スクリーブ、ミュッセの胸像が飾られていて、[写真125] この作家を顕彰する意味でも多くの作品が頻繁に上演されていた。その通俗性ゆえスクリーブの諸作品はもてはやされていたが、それはすでに半世紀昔のことで、20世紀にはいって、荷風の言うように「古めかしい」作家となりつつあった。

124. ラフェット橋 (89) ラファイエット橋（→注24）[写真126] [写真127]。『ふらんす物語』でこの橋の名前は、5回（[ラフェツト橋] または [ラフワエット橋] が『霧の夜』と『晩餐』と『西遊日誌抄』）言及されている。モラン橋とともにこの橋は、荷風の通勤使用の橋（コレージュ橋）をはさむようにひとつ川上とひとつ川下に掛かっていた。荷風の一番濃密な行動半径の中心の指標となる。ついでに言うと、このラファイエット橋とモラン橋は、当時は双子といえるほどそっくりの形、大きさで、そのベルエポックの優雅な姿はリヨンの名物になっていた。→注156

125. 大晦日で(…)往来では敷石の上に小商人が (90) [写真128]

126. サンポータンと云う寺院 (91) ヴァンドーム通りの荷風の下宿至近にあるサン・ポータン教会（Eglise Saint Pothin）のこと。[写真129] リヨン市の初代司教で守護聖人サン・ポータンを祀る教会である。サン・ポータンはまだローマ支配下にあったリヨンで布教、紀元177年に火あぶりの刑でその遺骨がローヌ川捨てられたという殉教者である。しかし、そういういわくありそうな来歴とはうらはらに、この教会はたんにローヌ川左岸の新開地に、住人が増え始めて、教会が足らなくなったという理由で1843年に建てられた擬古クラッシクの巨大な円柱を前面に並べたあまり趣のない建物である。『ふらんす物語』では一度しか言及がない。この教会は荷風の下宿の戸口から望まれる。[写真130]

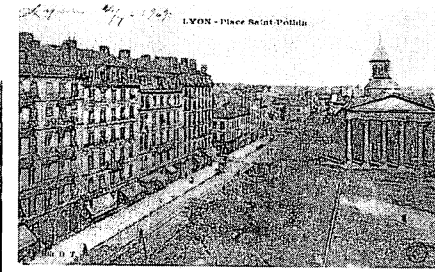
127. アヴニュー・ド・サックス (91) ヴァンドーム通りの西30メートルをほぼ平行に南北に走るアヴニュ・デュ・マレシャル・ド・サックス（Avenue du Maréchal de Saxe）通りのこと。[写真131] ヴァンドームと異なり、こちらは商店も多い賑やかな並木の大通りである。

128. 広場 (92) エドガール・キネ広場 (Place Edgar Quinet)。荷風の時代には、サン・ポータン広場と呼ばれることが多かった。広場の南はキク・ヤマタ（→注86）の通う女学校である。[写真132] [写真133]

［130］「下宿屋の門口から」望むサンポータン教会

［131］「アヴニュー・ド・サックス」
（サックス大通り）

［132］サン・ポータン教会から女学校を望む



［133］「広場」（エドガール・キネ）
サックス通りから望む

［134］「職工などの多く住んでいる貧しい街」
今も名残が見られる

［135］兵営（第十胸甲騎兵連隊）

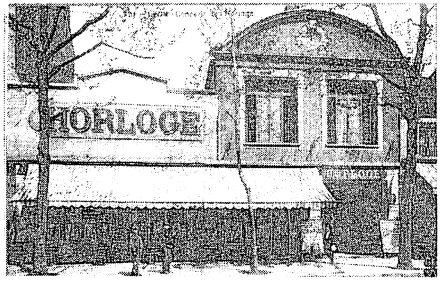
129. 並木の大通は左右に分かれて（92）状況描写から荷風はサックス通りを南へ進んだと思われる。250メートルほどでラファイエット通りと交叉する。右へ行くとローヌ川にあたり、ラファイエット橋がある。左へ行くほど場末感がただようパール・デュ地区。情景描写から判断して、荷風はこの夜は左へ曲がったと思われる。

130. 職工などの多く住んでいる貧しい街（92）ローヌ川の左岸は氾濫原で19世紀以降の新開地として、またそれが産業興隆期と重なり、労働者街や町工場をつくっていった。荷風は、この地域にリヨンの「裏」を嗅ぎ取って、たくみに素材としていく。この「職工なぞの多く住んでいる貧しい街」というのは、荷風の道案内どおりに行けばサックス通りを南へ行き、ラファイエット通りと交差する地点にいたった地点からはじまる第3区のことだと思われる。[写真134] ラファイエット通りの北側は、荷風の下宿のある地域を含めてブロトー地区といい、とくにローヌ河岸からテート・ドール公園にかけてはリヨンでもっとも新しい高級住宅地になっている。しかし、この南側はギヨティエール地区といい、まさに町工場が点在し、低所得者階層の労働者などの住む界隈になる。東側は、パール・デュー地区で、ここはさらに開発が遅れ、当時は見渡す限り広がる兵営（第十胸甲騎兵連隊）[写真135] や国立のタバコ工場（荷風当事は工事中）などがある地区だった。こういう施設は1960年頃までまだ残っていて、のちに、兵営跡はここ十数年で、リヨンの新駅パール・デュやフランスにしてはめずらしいモダンなショッピングモールやローヌ広域県行政機関の近代的なビル群などが立ち並ぶ新開地となり、タバコ工場は、1988年に閉鎖、その建物をそのまま残しつつ、今ではリヨン第3大学のキャンパスに改装されている。リヨン第3区は荷風時代はとくに、産業の拡大にともなって、工場や労働者の住居として労働者階級が流れこんできて、町工場を作り、住まいを広げていったので、現在でもすこし裏道に入ると不ぞろいな小さな町工場が至る所に残っていて、周辺のアパートも造りが粗末なものが多い。また、その故に戦後に建て替えが行われ、町並みがちぐはぐで、ベルエポック様式で統一感のある第6区の北側やプレスキル（両河の間）の趣とは異なる景観を呈している。下町というのとは語感としてどこかちがう。いわゆる庶民の町としての生活の賑わいがあるのは、ギヨティエール橋の付近からサックス通りにかけてだけで、ヴァンドーム通りは店屋もめったになく、昼間からひっそりとしている。そういう一角にときたま妙に浮いたように芝居小屋があったり、宿があったりする。

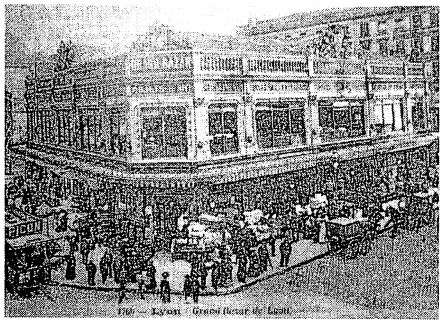
131. 寄席（92）荷風の迷い込む芝居小屋は、『霧の夜』にかなり具体的に描かれる道順から推測するとおそらく「時計座」(Concert de L'Horloge) という芝居小屋だったろう。[写真136] 荷風の記述に従いラファイエット通りに出て、そのあと東に450メートルほど進む。広大な兵営のあったパール・デュ地区の一画、137番地にあった大衆劇場である。まさに労働者と兵隊の街の劇場である。現在はBNPパリバ銀行の支店になっている。

132. 勧工場（92）勧工場は今で言う百貨店であるが、当時グランバザールという百貨店 [写真137] が有名で、その建物も看板も当時のまま今も残って“モノプリ”という百貨店とスーパーの混合店になっている。もうひとつ、コルドリエ百貨店も当時大きかった（今は“プランタン百貨店”）。ともに広告をよく出していた。

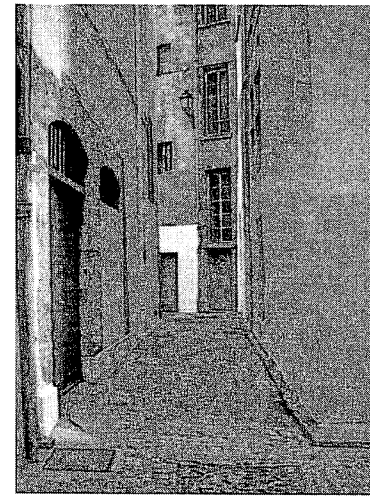
133. 不規則な小路（95）ソーヌ川の左岸、フルヴィエールの丘の麓を今日では“古リヨン”（ヴィュー・リヨン）と呼ぶが、当時は一般の市街地と区別はなかった。[写真138][写真139][写真140] 実に、荷風のノスタルジアのまなざしの優れていたことは、その後90年経って1998年に、ここがユネスコの世界遺産（文化遺産）の指定を受ける地区となったことでもわかる。リヨン市の公式文書によれば「2041年間蓄積した文化の遺産」なのだそうである。リヨン市の「起源」が紀元前43年10月9日だから数えてそうなるのだそうだ。荷風は、ノスタルジー観光という“趣味”の時代の来ることをいち早く予感していたのだろうか。荷風が“牢獄のよう”と表現したこの界隈も今でこそ小奇麗な観光的“古い街”に変身しているが、しかし、荷風当時はもとより、つい30年昔でも荷風描くとおりの薄暗く悪臭と不潔の不気味な貧民窟だった。いたるところ、路地というより、「覆いのない下水道」のような道、汚水があちこちに溜まり、ひたすら古く、壊れかけた暗くじめじめした家並みが軒を寄せ合うように並んでいた。ここを訪れたラマルティーヌは1850年に「狭い部屋、背の高い家、日差しは稀で壁は煤で黒ずみ扉は低く、硝子を節約するため窓には油紙が貼ってある。店には箱や樽が所狭しと詰め込まれ…」と記している。もちろん、荷風時代にも、どんなガイドブック



［136］「寄席」（「時計座」）

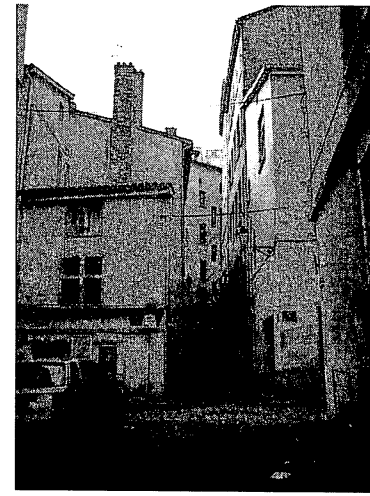


［137］「勧工場」（グラン・バザール）



［138］「不規則な小路」旧市街

［139］旧市街の裏道



［140］旧市街の裏道

にも、この界隈の雰囲気を観光の対象とした記述はのっていない。ところが、今日のミシュラン（ガイドブック）で、リヨン観光の目玉として3ツ星をつけているスポットはこの旧市街地区（ヴィューリヨン）と美術館2箇所なのである。荷風はボードレールに言及をしているが、こういう記述をもって、荷風はフランス文学作品に毒された（とまでは言わないでも、影響を受けた）視点でしかフランスを見ていないというのは当たらない。この旧市街をみれば、スタンダールでもラマルティーヌでもそう見ているのである。荷風のさらに特異な点は、これを文学の素材にしてしまっていることである。ボードレールが「想起」されるのは当然である。風景はロラン・バルトに倣って言えば“引用”である。

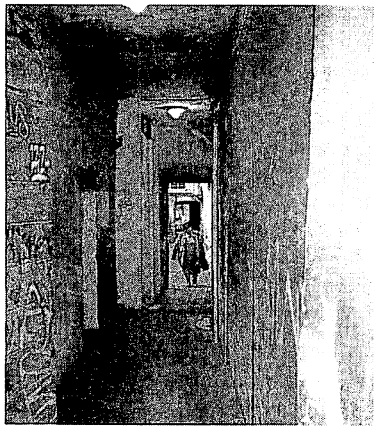
134. 抜け道（95）リヨンに独特の都市構造のひとつである“トラブール”（traboules）をさすと思われる。［写真141］［写真142］［写真143］トラブールというのは、旧市街の密集した古い家屋の入り口からはじまる暗い迷路のように作られたトンネル状の回廊のことで、そこを通り抜けると別の路地にでるという独特の家屋内隧道である。これが街の到る所に巡らされていて、その総延長は35キロあると言われる。スタンダールは1833年に「リヨンで絶望的になったのは、通りから通りへと抜けるうす暗くてじめじめした小路である」と書いている。当時は、荷風の叙述どおり「えたいの知れぬ汚水が溜まって」「悪臭」がただよい、「人家の暗い戸口」が不気味だった。その多くの廊下とも、路地裏ともトンネルともいいがたい部分は、汚水も流され、まさに「覆いのない下水」状態であったからだ。現在ではリヨン観光の最大の名所で、そのうちのいくつかが開放されていて、どんな日でも観光客がぞろぞろと歩いて抜けていくが、往時は、近寄りがたい暗い貧困と不潔の巣窟だったのだ。荷風の文学的風景の好みは、このあたりにも目配りがしてある。

135. 足の裏が痛くなる程凸凹した敷石（95）現在の都市部の敷石［写真144］は大型の煉瓦ほどの大きさに切りそろえられ、さほど凹凸を感じないが、当時の敷石といえば単に小さな石を並べて置いたていどだった。というのは馬車などが通ることがめったになかったほどの路地だったからである。荷風はこれを「足の裏が痛くなるほど」と身体的に表現しているが、それは体験者にしか書けない。現在、この足の裏感覚を体験できるのは、「昔」が徹底的に復元されている、リヨンからほど遠くないペルージュ（Pérouges）という村などである。

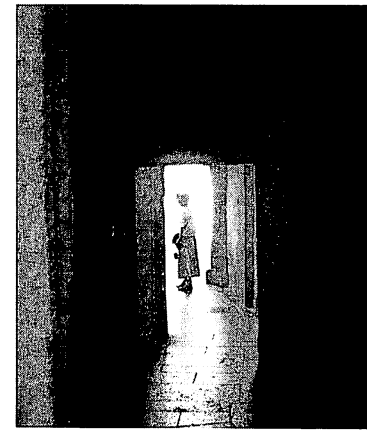
136. 木靴（96）いまでは祭りで見かける程度になったが、それでも時折商店のディスプレーなどに飾られているのを見かけることがある。［写真145］

137. 洗濯屋の女工（96）→注26

138. 醜業（97）売春婦。［写真146］当時のリヨンの売春と言うのは、一般にはいわゆる売春宿というのがあって、男はそこで女を物色して女の宿へ行く形をとった。ソーヌ川の左岸ジャコバン広場からメルシエール通り、セレスタン劇場とを結ぶ道、また旧市街から橋を渡ってペラッシュにかけてとパールデュの兵営の周辺に売春宿は多かった。通りにポン引きが立ち、案内されて暗い細い路地裏にある階段に小さな灯りがひとつ、質素な室内に案内される。そこでは、女がたむろしていて、踊ったり飲んだりして、のちに女の部屋へ行く。女のたむろするのは特定の建物がそうなっていた場合もあるし、ギニョール上演（→注154）の酒場などがそういう役目をはたしていたこともあった。ギニョール劇場のあったパッサージュ（屋根つき路地）のひとつラルグ通りは街娼の多く立ったメルシエール通りへ抜ける道でもあった。ただ、荷風がここで描いているようなことは、最下等のまずしい素人女の売春である。それは道端で客の袖を引く街娼である。暗がりの路地裏で、顔かたちも定かでない女を買う。荷風がいたころにリヨンを騒がせた事件に65歳のココ・ラ・シェリという老街娼が殺されたことがあった。犯人の青年はわずか10サンチームの金が欲しさに殺したという。ココはギヨティエール界隈を縄張りにしていたというから、最貧の売春婦であったが、彼女を狙った犯人もまた最貧の土木作業員の若者だった。荷風は女を買うということはほとんど日常のことで、アメリカでの「イデス」（→注18）との関係でも分かるように、彼の滞欧米体験物語のいくつかは、売春婦との交渉が素材になっている。『祭りの夜がたり』は、途中で下車したアヴィニヨンの町で知る職業女との耽溺を描いた小品であるし、『ひるすぎ』も、「二月の冬の日」というからリヨンの売春宿での叙景かと思われる。その他、売春婦との交渉をテーマにした『雲』（パリが舞台）もある。それによると、主人公の貞吉は「一週間に一度二度位は必ず女を買っている」と韜晦する。貞吉は荷風（本名壮吉）の分身であろう。『巴里のわかれ』にも「放蕩に夜を明かして帰る」のを「幾度と

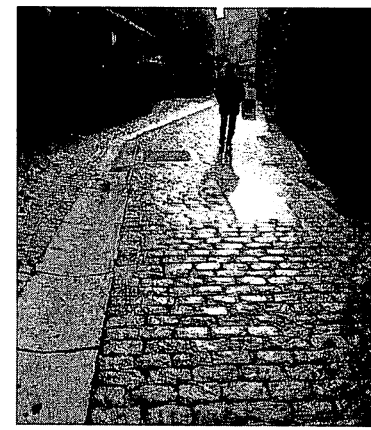


［141］「抜け道」 トラブール



［142］トラブール

［143］トラブール



［144］「足の裏が痛くなる程凸凹した敷石」

［145］「木靴（サボ）」

［146］「醜業」 売春婦たち（当時）

もなく」しているというような記述がみられ、『濕東綺譚』にもあるように「わたくしはこの東京のみならず、西洋に在っても、売笑の巷の外、殆その他の社会を知らないと云ってもよい」と嘯く。

139. 再び渡るローンの橋（98） ラファイエット橋。（→注 124）この表現からも、荷風はローヌ川をいったん西（オテルドヴィル）へ渡って、戻ってきたことがわかる。

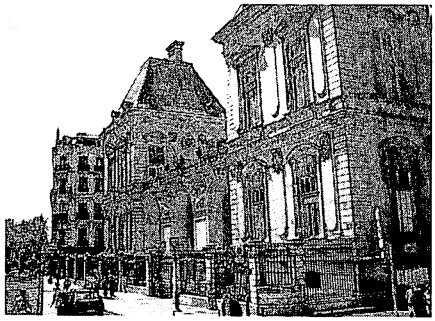
140. 市　庁の大時計（98）市役所は 17 世紀から 19 世紀にかけて徐々に外装などが加えられ 1842 年に完成した壮麗な建物。［写真 147］高さ 50 メートルの時計塔がある。［写真 148］鐘というのは現在ではカリヨンの音に代わっている。このカリヨンは、12 時の 2 分前から打鉦を始めて、ちょうど深夜に打ち終わる。荷風の耳にした鐘が 2 分間ほどで 12 打したのなら、1 打の間隔が 10 秒ずつある。ラファイエット橋は長さが 214 メートルあるので、「遅い歩み」だと渡り切るのに 3 分ほどかかるだろうから、荷風はすでに橋の半ばにいて、鐘の鳴り始めを聞き、1 分 50 秒後に「橋を渡尽し」た時に 11 打目だったということになる。しかし、実は、時鐘は、町の多くの教会や公共建造物などでも一斉に鳴らしていたので、むしろ音は錯綜していたはずだ。ここにも荷風独特の画面の抽出と再構成技法がみられる。

141. リヨン市の郊外（227）この描写からおそらくクーゾン村。→注 58

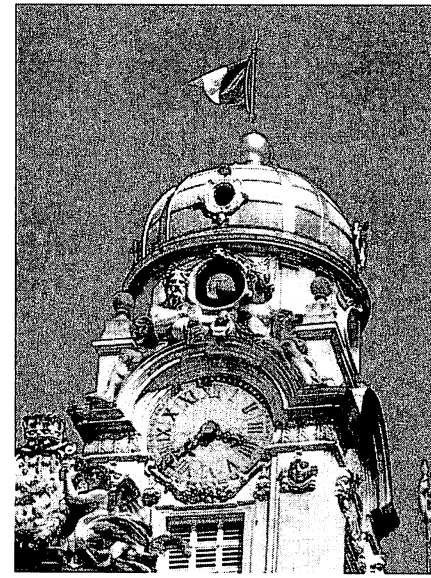
142. 汽車走り過ぎぬ（228）リヨンとパリを結ぶ幹線。→注 65

143. 二月の冬の日（244）売春婦との情交はリヨンでの出来事に擬してあることが、この「二月」でわかる。

144. ローザ・トリアニ（246）リヨンのオペラ座の「柱太き回廊」［写真 149］の陰で荷風がみそめたこのバレリーナについては不明な点が多い。荷風によればこの女性はリヨンのオペラ座の「第一位舞踏者（プルミエール・ダンスーズ）」であり、グノーの『フォウスト』（ファウスト）の第 4 幕に登場するバレリーナである。オペラやバレエの関係文献でこのトリアニに比定しうるイタリア人にあり得る綴り（Triani / Torriani / Togliani など）をもった舞踊家あるいはそれを思わせるいっさいの人物を見つけることが出来なかった。この負のアリバイがどのような意味を持つのだろう。荷風の文章技巧は複数の視点の合成とか距離の短縮とかがまずある。また、描写すべき対象を荷風の美意識にそって省略、強調、枠取り、整理をするなど、多岐にわたる。しかも、それらは空間だけでなく時間や次元の扱いにも適応される技巧である。これをローザ・トリアニ探しに当てはめて考えることはできないか。いうまでもなく、その前提として、彼女の名前は、グノーの『ファウスト』のリヨン大劇場での出演者の名前に見られないということの確認をしなくてはならない。発見は一般的な手立てでは徒労に終わったと言い得る。たしかに荷風滞在中に限っていっても、グノーの『ファウスト』はリヨンのオペラ座で 10 回も上演されているのでデータは豊富なのだ。『ファウスト』は 1883 年 10 月 22 日ニューヨークのメトロポリタン歌劇場のこけら落しに上演されたぐらいポピュラーな出し物であり、リヨンでも、1861 年の初演以来公演回数もきわめて多く“当り狂言”だった。が、そのいずれの上演についても出演者の名前にローザ・トリアニという名前はみいだせなかったのである。しかしここで、いちどオペラとバレエとの関係を考えなおしてみなくてはならない。そもそもオペラにバレエがおまけのようにつくことは、フランス人聴衆にかなり特有の好みらしい。そのため、作曲家や演出家もフランスでの公演用にバレエ場面をとくに挿入するサービスをすることがあるそうである。このことがこの調査のちょとした障害になっていることも考慮に入れなくてはならない。というのは、現在に残っているポスターや広告などでも、作品がオペラである以上、歌手の名前が当然大書され、「付け足し」に挿入されるバレー場面に出演する踊り手の名前は省略されることが多いからだ。事実、このグノーの『ファウスト』でも第 5 幕前半（荷風は「第 4 幕目）という）に挿入されるバレエ曲はほんの 10 数分ていどで、しかもそれは 7 つのテーマに分かれた小さな踊りがあるだけである。つまり 1 曲あたりの平均はせいぜい 3 分ていどなので、わずかな出番しかない踊り手の名をプログラムに記載しなくてもあたりまえだとも言える。広告やプログラムに踊り子の名前がなくとも、絶対にトリアニがいないとはいえないともいえる。また、一方、余りにも著名な踊り手を出演させると、歌手の方がかすむので、たいていはそれほどの名手が出演しない傾向があると言われている。つまりトリアニはそれほど高名な踊り子ではなかったとも言える。さて、ここで、『舞姫（プルミエール・ダンスーズ）』の事実のみをもういちど並べてみる。名前は「ローザ・トリアーニ」。職業は「第一位舞踏者なる位付け」「フランスの芸壇に出るアルチスト」。国籍は「フランス」人（「伊太利亜つづり」ではあるが）。切符の予約に出かけてオペラ座の回廊で始めて彼女を「見まつりしなり」、となる。グノーの『ファウスト』



［147］「市庁（オテルドヴィル）」



［148］「市庁の大時計」

［149］「劇場の柱太き回廊」

の第4幕目（ママ）、「君は、明るき灯の下に、あまた居並び、横りたる妖女の頭に立ち給いき」というような種々の与件のうち、事実はどこにあるのであろうか。リヨンのオペラ座には、当時歌手が約35人、バレリーナが男女合わせて32人（ただしその内、女16人と男8人の計24人はいわゆる群舞のための踊り手）、それからオーケストラ奏者40名ほどが専属していた。荷風が「第一位舞踏者」という以上、ローザ・トリアニが、その他大勢（16人）の内の1人ということはない。フランス人かどうかは、名前からは推定できない。とくにイタリア風の芸名を使用する風習があったから国籍が不明である（このことは荷風も書いている）。散文詩のような『舞姫』の全体の基本構造は、一見信憑性がありそうな事実がたくみに重ねられている。しかし、そのことを、一編の詩文に仕立てるという仕組みそのものが荷風の文学的創作ということは忘れてはいけない。しかしその鍵はどこにあるかと言えば、やはり「ローザ・トリアニ」をはずしてはない。当時の上演広告を仔細に眺めると、さきにふれたように、オペラ歌手はその役柄名とともに大書して列挙してある。一方舞踏家のほうであるが、じつは、この出し物では「ワルプルギスの夜」（『ファウスト』のバレエ場面）の出演者の名前を探して新聞を繰っていたら、歌手とは別に、バレリーナの名前が掲げられているものをひとつ発見したのである。3人の名前が掲載されていた。1行目にElena Colombo（エレナ・コロンボ）とあり、ほぼ同じ大きさの活字で、2行目にRosa Zetti（ローザ・ゼッティ）、Francine Aubert（フランシーヌ・オベール）という名前がならんで記されている。この3人が荷風が言う「第一の舞姫」である。実は、オペラ座の名簿というのが毎年発表されているのだが、年によって掲載人名の基準がことなり、現在発見できた限りでは、1907年のリヨンオペラ座の名簿は、歌手については詳しくその氏名があるが、バレエについては「女31人、男9人」という総数だけしか記載されていないのである。そのため、その3人の「位」が確認できなかったが、その前後の年度の名簿からみてほぼ間違いないだろと思われる。1903年のものと1908年のものには固有名がいくらか載せられているがその名簿から推測すると、リヨンのオペラ座には、男1人、女3人の「第1位」踊り手がいるからである。しかし、さらに、その後、別の資料を調査して先の3人の名前のあとに、同格名詞として「プルミエール・ダンスーズ」と明記してあることを確認し得た。ちなみに「第2位」踊り手は4人いて、群舞の要員が24人いたようである。問題にしたいのは、公演予告の中で、2番目に書かれたそのローザ・ゼッティである。「ローザ」という名前なのである。荷風のローザ・トリアニという「第一位舞踏者（プルミェール・ダンスーズ）なる位付け」のバレリーナはこの女性ではないだろうか。荷風はここでゼッティを別のイタリア名にかえたのではないか。それは、バレエの歴史で最も有名なあの「マリア・タリオニ」の変名でないかという推測である。タリオニTaglioniのaとoを入れ替えればトリアニが出来上がる。荷風はアメリカのタコマにいたときからオペラに関心を深め、「オペラに関する書物は目下紐育に注文にやった。その中に届いたら一生懸命に此方を研究してみたい」（『書簡集』）と述べ、実際にもニューヨークでかなりオペラに通ったことは知られている。これらの「書物」が何であるかは分からないが、もしオペラの歴史を概観でもしていたら、サンクト・ペテルスブルグのキーロフ・オペラ座、パリのオペラ座、ベルリン市立オペラ座そしてニューヨークで活躍し、多くのプリマ・バレリーナを輩出したタリオニ一族（フィリッポ、マリア、ルイーズ、マリア・ポール、パオロなど）のだれかの名前に触れていたはずだ。マリア・タリオニは、活躍時期が荷風のオペラ鑑賞の時期より半世紀以前も昔であるから、当然ながら、書誌的な知識かあるいは肖像画などでしか知りえないが、しかしなんらかの折にこのバレエ史上もっとも有名なタリオニの名前や肖像は荷風の目に留まっていたと考えても不自然ではない。[写真150] なお、タリオニは1844年の8月から9月にかけてリヨンのオペラ座にも登場しリヨンの観客を魅了したという記録が残っている。また、ローザという名前は、『ふらんす物語』の中の『墓詣』に登場する“ロウザ”とも重なる。気に入った女の名前を再使用するのは荷風の癖で、その例はポーレット（『祭りの夜がたり』と『ひるすぎ』）などにも見られるからである。この人名の変形アナグラム、姓と名の合成などの技法は、1907年の実際の公演日程と照らし合わせたときに見られる省略法とも類縁がある。『舞姫』には「その年の初演奏はワグナーのヴァルキール、次の夜にはグノーがフォーストとの予告は出でたり」とあるが、実際は、この年はオペラ座にいくつかのトラブルがあり、初日は10月10日から12日へ延期された。「ファウスト」は翌日ではなく、20日公演であった（実際の翌日公演はロッシーニの「ウイリアム・テル」）。こういう点を省略、「フォーストの夜に至りて」というのは、読みようによって、い

[150] マリア・タリオニ

かにも「ワルキール」[ヴァルキール]の翌日に「ファウスト」が連続しているような巧みな時間の短縮があるのである。なぜ、短縮したか。もちろん文章作法上瑣末な叙述のカットは当然なのであるが、それよりも、実は「ワルキール」の「かたくななる事」と、そのために「徒にソプラノの…」という退屈との対比にローザの「ようやく君を見出したり」という待望感、そのあでやかな姿を描くための技法であろう。現実のローザ・ゼッティについては、その来歴や肖像などについては残念ながらいまのところ発見できていない。劇評については、「ファウスト」ではないが、「アイーダ」で踊ったときの彼女への寸評を載せた新聞記事が見つかった。そこには「ローザ・ゼッティ嬢は魅惑に満ちた快活さ」をもって踊ったと称えている一言が添えられている。荷風が言うように、芸名であるため、国勢調査や公的な住所録でも調べようがない。彼女の存在の痕跡は、オペラ座の公演予告やいくつかの新聞記事やチラシで確認できるのみである。しかしその秋にはかなり多くのオペラ作品やバレーのプログラムに彼女の名前は見られ、ときには3人のなかでもトップに置かれたり、単独で掲げられていることもある。しかし、翌年1908年のプログラムからはローザ・ゼッティは完全に消えている。そしてエレナ・コロンボとフランシーヌ・オベールの2人のみが同じように「プルミエール・ダンスーズ」として名前を連ねている。じつは、前年1906年でも彼女の名前はどのような公演でも見られず、つまりは、彼女は荷風のいた1907年のみの1年契約の“渡り”バレリーナだったの可能性が高い。舞台上ではローザは「透見ゆる霞の如き薄紗の下に肉色した肌着をつけ給い」とあるが、それは当然バレエの衣装でもあろうが、この場面はヌビア人の娘の踊りだったり、クレオパトラと奴隷の踊りだったりするので、チュチュ（衣装）にいわゆるオリエント風俗が取り入れられていた可能性がある。しかし、なにより、荷風の描写から思い浮かべるのは当時の多くのアールヌーボーのポスター画などの軽やかで官能的な女性像である。たとえば、ミュシャの「踊り子」などを髣髴とさせる。[写真151] ミュシャは、荷風がニューヨークにいたときにアメリカへ移住してきた。イデスのいでたちもいくらかは重なっているかもしれない。荷風の舞姫は、リヨンのオペラ座という場と「ファウスト」の上演という時とを借景にして、隠微な肉欲の「妄想」を、仮想の女性ローザ・トリアニに託して繰り広げる掌編として読むと、きわめて分かりやすいのである。「太腿（ふともも）」、「寝部屋」、「わが血は君が肉に慕い」、「ベヌスの裸像の如く、座れる腰に云いがたき曲線の美を示す」、「わが手わが唇をして、親しく君が肉の上に触れしめん」など、荷風はひたすら女の肉体に妄念をからませ、みずから言うように「聞くべき音楽の一節をだも聞く事あた能わずなりぬ」なのである。そして、これが「創作」であるだろう証拠に、荷風は、ローザがその秋に多くのバレエに出演しているにもかかわらずその後を追いかけた形跡もなければ、その後も荷風滞在中にあわせて10回も上演されている『ファウスト』を2度と見に行っていない（少なくとも再観劇の形跡はない）。また、『歌劇フォースト』（「歌劇フォーストを聴くの記」）は、ニューヨークでの観劇体験記に基づくものであるとはいえ、後におおきく手直しをしているにもかかわらず、このバレエの場面には触れられることなく、また、リヨンでの体験や思い出についての追記めいたものもなく、まるで愛想のない音楽解説そのままで、後の版（『ふらんす物語』や全集）に採録されているのである。

145. 橋の袂（246）　→注67

146. 補足として『西遊日誌抄』における記述をいくつか注釈しておこう。この日誌抄はリヨン関係では1907年8月2日以降12月31日までのほぼ5か月分が欠落している。荷風によると単に「去年は日記というものをかかざりし」というだけである。しかし、その理由を以下のように推測することは許されないか。荷風には「リヨン市郊遠くに散歩に行くのを例としていた」（『蛇つかい』）という記述があるが、これをもとにして展開する「髯小島」や「クーゾン村」の世界だけでなくリヨンにまつわるさまざまな情報は小野支店長を始めとして日本人社会から多くを得ていたと思われるふしが多い。少なくとも、こういう郊外へ出かけるとか祭りの見聞などには、なにかのきっかけがなくてはならない。それらが詳細に日誌に記録として残ると、『ふらんす物語』の多くは、その「ネタもと」が知れるということよる。いかに銀行員と親密に付き合っていたかということが明白になるのである。そうなると、1908年新年から始まる銀行嫌悪、銀行員生活の不満などに終始する『日誌』との整合性があやうくなる。このために、かれは『ふらんす物語』における諸作品を残すにあたって、（律儀な荷風のことだから必ずやリヨン部分も記録していた可能性のあるはずなのに）『日誌稿』か

〔151〕ミュシャ描く「踊り子」

らの転記をあえてしなかったのではないだろうか。すでに荷風の『日誌』や『断腸亭日乗』などの虚構性は指摘されている。なぜ、銀行との不和や不快の念を記した部分（1908年元旦以降）のみが残されたのか、すくなくとも、アメリカの部分が豊かなのに、リヨン滞在の肝心な部分のみがすっぽり抜け落ちている意味は興味があることではある。

147. ソオン河上の一旅亭（1907・7・30）　→注13

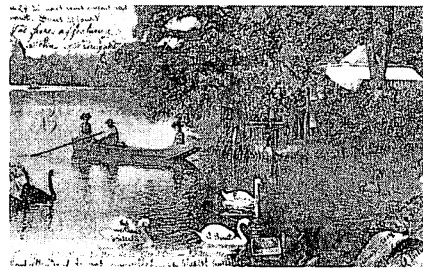
148. ロオン河西岸のワンドオム街の下宿屋に移る（8・2）　→注117

149. 寒さ（1908・1・3）　荷風のいた年の冬の平均気温は2.79度で、平年よりわずかだが0.14度高かった。ちなみにその冬一番寒かった日は1月12日のマイナス8.1度である。『西遊日誌抄』にはその厳寒の記述はないがこの1月3日の記述が体感的に荷風の寒さの始まりだったのだろう。

150. タンホイゼルを聴く。帰途独り夜半のソーン河畔を歩み家に帰る。正に二時（1・25）　「タイホイゼル」（タンホイザー）に関するこの短い記述は『日誌抄』にのみあり、『日誌稿』にはない。おそらく『日誌稿』の正月26日の項（「コンセール、クラシックに行き例の如く音楽を聞く」）を何らかの理由で削除し、あらたに、これも何らかの記憶の拠り所か記録に基づいて『日誌抄』へ25日の記述を加えたのだろう。25日は土曜日で、事実「タンホイザー」の演奏会は、オペラ劇場で上演されている。演奏会は夜8時からはじまっている。ワーグナーの「タンホイザー」は3時間15分の長いオペラである。幕間などを考慮すると、4時間はゆうにかかるのが普通である。とすると、終演は深夜0時ちかくだったろう。荷風の帰宅が深夜の2時というから、終演後2時間ていどは歩いていたことになる。ところで、オペラ座の位置からいって、ソーヌ川の河岸を歩くには、下宿と逆方向へ向かうことになる。つまり自然の帰り道の迂回からの散歩でなく、なんらかの意図がそこにあったと思える。シミュレーションしてみると、当夜、荷風は、オペラ座を出て、そのまま西へ向かう。ソーヌ川に出たらおなじみのフィエ橋を渡り、川の右岸を下る。ミディ橋（現キチュネル橋）まで来てそこを左岸へ渡り、今度はソーヌ川の左岸を上流へ向かって歩く。おそらくティルシット橋（現ボナパルト橋）あたりで右へ曲がり、ベルクール広場からレピュブリック通りを北へ上がり、途中で右へ曲がりローヌ河に出てラファイエット橋を渡ってサックス通りからサン・ポータン広場、そして下宿へと帰った、というコースが可能である。それにしてもこういう歩き方は、なんとなく不自然である。散歩に可能な最長のルートを設定しても約4・5キロ。2時間はかからないと思える。かといってソーヌ川のルートをより長くすると、真っ暗闇の郊外の危険な雰囲気の場所へ入り込む。電気の街灯のなかった時代だから、今よりさらにぶっそうな感じがしただろう。とくに川岸は市街地を離れると崖の下の貧しい家とか町工場などで人通りが極端に少なくなる。また対岸へ戻るのに渡る橋がないのである。とても深夜散歩するような場所ではない。おそらく、荷風はオペラが終わってしばらくはレピュブリック通りのカフェで休んで、そのまま下宿に戻りたくなくて、反対の方角へ歩き出したというところかもしれない。その結果ソーヌ川に出て、しばらく岸辺を歩き、帰宅したと言うことではないか。あるいは、女を求めて怪しげな裏道に入り、収穫を得られず、そのままソーヌ川の岸辺に出て、しばらく散歩になったということかもしれない。「帰途独り夜半のソーン河畔を歩み家へ帰る」という短い記述からは荷風のしたたかな描写の魔術が見える。すなわち、たねをあかせばただ町をちょっとふらついたのを「ソーヌ川」に収斂させた深夜の散歩というイメージの醸成である。このようにソーヌ川は、すでにふれたように、ローヌ川の「悲愁」の演出のための大がかりな装置とは異なり、単なる散歩の対象として取り上げられる川であることもよく分かる。

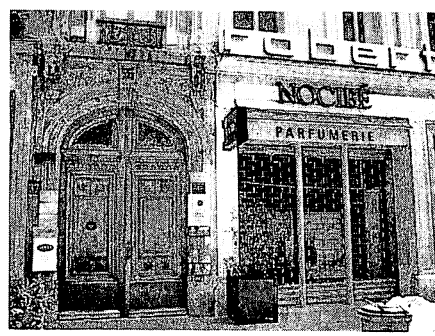
151. サンジャンの寺院に入りて祈祷す（2・19）　サン・ジャン教会（→注39）で祈りをするという記述は前日（18日）にもある。市内で数多い教会の中でなぜここが選ばれていたのか。散歩のコースが旧市街方面、すなわちこじんまりしたソーヌ川河畔コースに集中していたことがまずあげられよう。サンジャン教会はそこにある。しかし、何より荷風の“演出”の匂いがする。それは、サン・ジャンは市内で最も古い教会堂であり、荷風も「古刹」あるいは「古寺」などとわざわざ書き、そこで祈る姿の自己演出をこころみていると思われるからである。少なくとも、リヨンの町に感覚的な土地鑑を持つものから見ると、サン・ジャンこそが“苦悩”を表現するのにもっともふさわしい舞台装置なのだ。

152. 公園の池畔を歩む（2・28）　描写からテート・ドール公園（Parc de la Tête d'Or）と思われる。［写真152］［写真153］荷風の住むローヌ川左岸地区にあり、市の北の端になる。とはいえ、荷風の下



［152］「公園の池畔を歩む」
（テート・ドール公園）

［153］テートドール公園（現在）



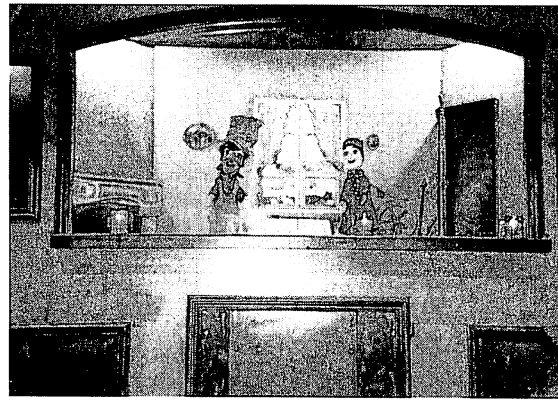
［154］「珈琲店十九世紀亭」跡

宿からなら 800 メートルほどの距離である。19 世紀の半ばまでは、ここは樹木の生い茂る湿地帯で、ローヌ川が自在に氾濫し、浮島のようになった部分の草地に牛馬が放牧されていた。ローヌ県の知事ヴァイースの発案で、ちょうどレピュブリック通りの改修と同時期に、この公園は企画されて完成した。105 ヘクタール（新宿御苑の約二倍）の広大な公園で、16 ヘクタールの大きな池を真ん中にしつらえ、池畔には夏季は貸しボートや貸し自転車屋（当時は日曜日にかぎって馬の乗り入れも許されていた）が開業し、冬は天然のスケート場になった（荷風当時の冬は寒かった）。池の周辺にはレストランやカフェも店を開く。園内には、バラ園や芝園、樹木の繁る森、動物園、植物園、あずまやなどが点在する。この公園は、125 万フランを投じて 1857 年に完成したのだが、眼目は二つあって、当時の不況対策（景気刺激策）のためと、もうひとつは、池を掘り、その土をローヌ川の護岸に用い洪水対策を徹底したことである。事実、1856 年を最後に、ローヌ川は大きな氾濫をしなくなる。「テート・ドール」とは金の頭という意味であるが、じつは、この地名の由来ははっきりしていない。牧草地だったころに金のキリスト像の頭の部分が出土したからだという伝承はあるが、その記録も肝心の像も伝わっていない。荷風は、その公園をどのように歩いたかでなく、風景画のように描写し、ここでは、若い女性と会話をしたことを記録している。「白鳥の公園」と「良家の処女」という組み合わせは、やはり風景画の発想である。（「裏町」と「娼婦」という風景と好一対をなす）。

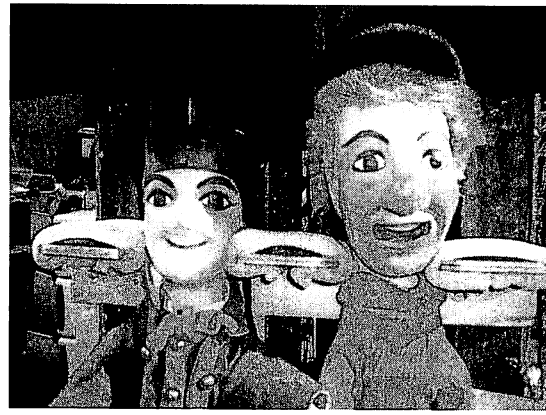
153. 珈琲店十九世紀亭（3・6）　音楽の演奏が毎夜行われる有名なカフェである。［写真 154］荷風は、そうとうリヨンの有名カフェをめぐっていたことがわかる。ちなみに、「十九世紀亭」はレピュブリック通り 37 番地にあった。銀行からさほど遠くない。店主はオリヴィエ某という名前であった。この店は現存しないが、建物はそのまま、香水・化粧品店、眼鏡屋として残っている。

154. 人形芝居（3・13）　ギニョールという名前で知られるこの土地固有の娯楽である。［写真 155］いまではギニョールは指人形の代名詞になっているが、もともとは、リヨンで生まれた指人形の主人公の名前だった。この指人形はたちまち市民権を得て、全国に広がっていったが、それら一般に言われるギニョールと根本的に異なるのは、リヨンのギニョールは荷風時代は大人の観るものだということだ。（現在では、もっぱら子供芝居になっているが）。このギニョールは絹織産業に由来する。絹織はそもそもはイタリアから入ってきたものだが、この人形芝居もイタリアがルーツだという。そのことはともかく、この芝居は、絹織物のまずしい機織の職工達の世界で生まれた。彼らは、多くの自主的な娯楽組織をもっていたのだが（“ヴォーグ”もそのひとつである）、ギニョールも絹織物産業に携わる労働者たちの中から生まれ、広がっていったのである。主人公ギニョールと、彼といつもつるんでいるニャフロンという可笑しな顔をした 2 人がコンビで繰り広げるばかばかしい滑稽物語である。［写真 156］創始者はローラン・ムルゲという男である（像が今日旧市街にある）。ずいぶんあやしい男で、定職もなく、時に機織工の仲間に入り込み、手伝いなどをしたり、織物を売り歩いたり、とにかく職を転々としたらしい。フランス革命の後あたりから、19 世紀初頭にかけて、この人形芝居を思いついて、台本をつくり（識字能力がなかったという説もある）、みずから人形をあやつった。資料的に不明のことが多いそうだが、ギニョールというのは機織職人の名前だったというのが今日の定説のひとつである（6 つの異説がある）。研究者の調査によると、実際に機織工として設定された 2 人によって展開する物語の筋書きは意外に少なく、むしろ、下僕や召使と主人いう組み合わせのファルス（笑劇）のスタイルをもつものの方が多かったようだ。ただ、その行動様式や言葉遣い、訛りなどはまさに絹織職工たちの世界のそれであって、今日でもいくつかのシナリオが伝承されて残されている。会場は狭い。薄暗くタバコの煙の立ち込める室内では、伴奏に荷風の言うとおり一般にはヴァイオリンかピアノが用いられた。大人の見世物なので、場所も、専用劇場のほかに、カフェなどでも上演されていた。専用劇場は、荷風当時は 3 軒あり、荷風は、そのうちでラルグ・パッサージュ（屋根付き路地）にあった「ラルグ劇場」に行ったと思われる。［写真 157］ここは、地下室にある劇場で「便所の臭気鼻につき」という可能性があるからである。「陰惨限りなし」は荷風の独特の悲惨趣味であるので額面どおりにはうけとれない。むしろ、ギニョールは大人が観るということから、政治や通俗的な社会風刺の手段にもおおいに使用され、時事ネタはとくに愛好された。しかし、多くはたわいもない滑稽譚である。ここで、参考のために『ジャムの壷』という有名な演題のほんの一部を紹介しておこう。主人と下僕のギニョルとの対話である。

主人　　「おいおい使いを頼みたい」



［155］「人形芝居」



［156］ギニョールとニャフロン

ギニョール「では、さっそくに出かけまする」
主人　　「いずこへいくのじゃ」
ギニョール「使いでございますな」
主人　　「で、いずこへ？」
ギニョール「はて？」
主人　　「粗忽者め」
ギニョール（独白）「さても宮仕えはむずかしい。くどく聞けば愚か者と言われ、聞かずに出かければ粗忽者と言わるる」

こういうやや日本の狂言を思わすような主従のナンセンスなやり取りに観客が野次をとばしながら、哄笑する雑然とした雰囲気の方が実情にあっているのではないかと思われる。ただ、荷風の見た出し物は人情ネタだったかもしれない。また、荷風の目的は、もしかしたらそこにたむろする「女」を求めることだったかもしれない。というのは、この「劇場」は、風儀の芳しくないところとしても知られていたからである。なお、現在も、ギニョールの劇場は旧市街と、織物の街クロワ・ルッスとエリオ通りとに常設館があり、テート・ドール公園にも劇場があって季節公演をする。健全な子供の娯楽としてであるが。

155. 副支配人 (3.27)　支配人（小野）の名前をあえて避けているのは、解雇されたという演出上必要だったのか。副支配人の仲佐氏の出自来歴は不詳。

156. 欄干に凭れて涙を流しぬ (3.27)　ラファイエット橋（→注 124）には欄干部分に張り出しバルコニーがある。［写真 158］おそらくここでしばし感慨にふけったのかもしれないが、この部分はやや芝居がかっている。荷風は、リヨンへ到着して「つめたい石垣に額を押当てて」「泣いた」のだが去るにあたってふたたび泣いているのは出来すぎた構成である。いずれにしても荷風はリヨン滞在の枠取りを「泣く」ことで飾っている。

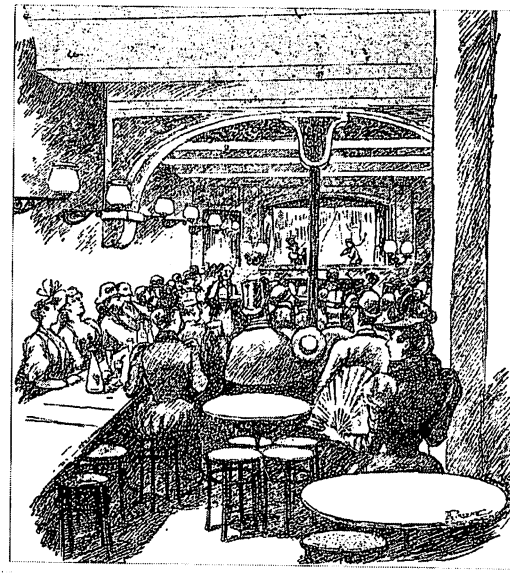
あとがき

“注釈”という形式をもちいて荷風のリヨンとリヨンの荷風を論ずるというこころみが成功しているかはどうかは大方の判断にまつほかないが、少なくとも僕には十分にスリリングな作業であった。一年間のリヨン滞在を、カメラを携えての街歩きと、資料館、図書館、役所の資料室での調査ですごした。それでも今帰国して諸資料や3000枚ほどの写真を整理してみても、まだ写し忘れたものが多く、資料にいたってはどうやっても見つけ出せなかったものや、存在がわかっていながら手がつけられなかったものなども多い。時間の制約ということが悔やまれる。いちど350枚ほどに仕立てた原稿を、詳解に過ぎるという躊躇から、半分以下に縮小してみたのが本稿である。部分的には説明不足になってしまった個所があるのではないかと懸念されるが、中間報告ということでひとまずこのようなかたちで発表をしてみる。

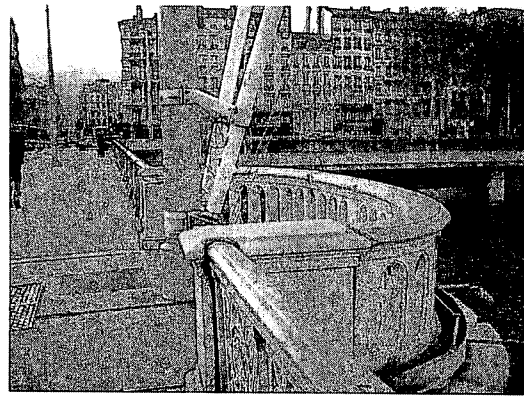
調査協力

調査に当たっては次の各機関ならびに司書の方々のお世話になりました。お礼を申し上げます。

- Bibliothèque Municipale de Lyon
- Archives Muninicipales de Lyon
- Service Documentation de Ville de Lyon, Hotel de Ville
- Service de Documentation de Mairie du Sixième Arrondissement
- Direction de l'Aménagement Urbain, Service du Cadastre
- Archives Départementales du Rhône



［157］当時の劇場内スケッチ



［158］「凭れて涙を流しぬ」というラファイエット橋の張り出し欄干

参照文献

『荷風全集』　岩波書店　1962～1974、［新版］1992～1995
『永井荷風集』（現代文学大系）　筑摩書房　1965
『永井荷風』（新潮日本文学アルバム）　新潮社　1985
永井荷風『ふらんす物語』　新潮文庫　［旧版］1964、［新版］2000
永井荷風『ふらんす物語』　岩波文庫　［新版］2002
永井荷風『墨東綺譚』　新潮文庫　2000
永井荷風『荷風随筆集』上下　岩波文庫　1986
永井荷風『摘録　断腸亭日乗』上下　岩波文庫　1987
『永井荷風』（作家の自伝　4）日本図書センター　1994
秋庭太郎『永井荷風傳』　春陽堂書店　1976
秋庭太郎『荷風外傳』　春陽堂書店　1979
秋庭太郎『考証　永井荷風』岩波書店　1983
秋庭太郎『新考　永井荷風』　春陽堂書店　1983
網野義紘「『ふらんす物語』に於ける荷風のフランス」『永井荷風』（日本文学研究大成）国書刊行会　1988
アラン・コルバン『浜辺の誕生』（福井和美訳）　藤原書店　1992
磯田光一『永井荷風』講談社　1979
岡谷公二『郵便配達夫シュヴァルの理想宮』　河出書房新社2001
小野吉郎「わが国、民間初のフランス留学生—小野政吉—について」『日仏教育学会年報』第5号　1998
小野吉郎「明治初年のフランス留学生　小野政吉」　『仏蘭西学研究』　第24号　1994
小野吉郎「初めてシャンソンを歌った日本人　祖父・政吉の横顔」『アン・シャンタン』　第19号　1996
小野吉郎「続・初めてシャンソンを歌った日本人　祖父・政吉のその後」『アン・シャンタン』　第23号　1997
小野吉郎「祖父　小野政吉と日仏会館」　日仏会館「日仏文化」　57号　1993
小野吉郎「父　小野敏郎と日仏会館」　日仏会館「日仏文化」　58号　1994
小野吉郎「仏国横浜正金銀行小史」『日仏交流』　第4号　1998
小野吉郎「横浜からリヨン、そしてパリに進出した日本貿易商社」『日仏交流』　第9号　2003
川本三郎（編）『荷風語録』　岩波現代文庫、2000年
紀田順一郎『永井荷風　その反抗と復習』リブロポート　1990
末延芳晴『荷風の見たあめりか』　中央公論社　1997
末延芳晴『荷風とニューヨーク』青土社　2002
杉山伸也「日本製糸業の発展と海外市場」『三田学会雑誌』第76巻第2号（1983年6月）
杉山伸也「幕末、明治初期における生糸輸出の数量的再検討：ロンドン・リヨン市場の動向と外商」『社会経済史学』第45巻第3号（1979年10月）
滝澤敬一『フランス通信』（10巻）岩波書店　1937～1952
武田勝彦『荷風の青春』三笠書房　1973
竹原真　「都市遊歩者、荷風—“日和下駄”En flanantにおける都市—東京、パリ、リヨン」比較文学研究59（東大比較文学会）　朝日出版　1991
竹盛天雄「新出　永井荷風書簡（42通）—付、参考書簡、新発見の書簡について」文学10（4）岩波書店　1999
『永井荷風』（日本文学研究資料叢書）有精堂　1980
中村真一郎（編）『永井荷風研究』新潮社　1959
中村光夫『永井荷風』筑摩書房　1979
成沢広幸「ノルマンディー海岸における海水浴観光の誕生と拡大」［『経済学論集』第10巻第1号、宮崎産業経営大学経済学会、2001年10月

注釈『ふらんす物語』

平岩昭三『「西遊日誌抄」の世界・永井荷風洋行時代の研究』　六興出版　1983
松田良一『永井荷風　ミューズの使徒』　勉誠堂　1995
矢島翠　『ラ・ジャポネーズ キク・ヤマタの一生』 筑摩書房1990
『横浜正金銀行全史』　1980－1984
吉田精一『永井荷風』塙書房　1953
L'Alamnach lyonnais, Ed. Reflets de Terroir, 2002
Valéry d'Amboise : *Dictionnaire Lyonnais*, Ed. D'Amboise, 1990
Baedeker : *Sud-Est de la France*, 1907
Baedeker : *Paris et ses environs*, 1907
Baedeker : *Southern France*, 1907
Henri Beraud et al. : *Gens de Lyon*, Ed. Omnibus, 2000
Marthe Bernus-Tayler et al. : *Musée des Tissus de Lyon*, 2e éd. Editions Lyonnaises d'Art et d'Histoire, 2001.
Jacques Beaufort : *L'Architecture à Lyon*, tome II, Ed. J.-P. Huguet, 2001
Felix Benoit : *Dico illustré des Gones*, Ed. Des Traboules, 2002
Dominique Bertin et al : *Guide des Eglises de Lyon*, Ed. Lyonnaises d'Art et d'Histoire, 2000.
Jacques Borge et Nicolas Viasnoff : *Archives de Lyon*, Ed.de Lodi, 2002
Guyet Marijorie Borge : *Les Transports à Lyon, du Tram à Métro*, Ed. Jean Honor , 1984
Jacques Bruyas : *Lyon promenades au gré du 6e Arrondissement*, Ed. Du Mot Passant, 1999
Jacques Bruyas : *Promenades litteraires dans le Lyon patrimordial*, Ed. Du Mot Passant, 1999
Maurice Chambost :*Des cotumes populaires aux illuminations lyonnaises du 8 décembre*, L'Imprimerie Vignon, 1986
Annie Charvier : Lyon 1900-1920, *Mémoire d'hier*, De Barée Ed. 2000
Jean Chatelut : *Naissance de Paysage fran ais*, Tababuste, 2001
Gérard Chauvy : *Les Quartiers de Lyon au fil des rues*. Privat 1993
Gérard Corneloup : *Lyon Mémoire*. Edi Loire 1995
V.-H. Debidour et M. Laferrère : *Lyon et ses environs*, Arthoud, 1969
Reńe Dejean : *Traboules de Lyon, histoire secréte d'une ville*, Ed. Des Traboules, 2000
Dictionnaire Biographique du Rhône, Ed. Henri Jouve, 1899
J. Escot : *Fourvière à travers les siècles*, Héliograme M. Lescuyer et Fils, 1954
Gabriel Faure : *Aux Bords du Rhône*, Arthaud, 1941
E.Fayard : *Notice Historique sur le village de Couzon*, Harbath, 1987
Catherine Férey, Simone Blazy : *Des Objets qui racontent l'Histoire, Marionnettes*, EMCC, 2000
Fontaines-sur-Sâone au début du siècle, AREM. 1989
Paul Fournel : *Guignol, les Mourguet*, Seuil 1995
Aline François-Colin et Isabelle Vazelle : *Le Paysage*, Les Editons de l'Amaterur, 2001
Gérald Gambier : *Murs peints de Lyon d'hier et d'aujourd'hui*, La Taillanderie, 2002
Josette Gontier : *La Soierie de Lyon*, C. Bonneton Ed., 1990
Sebastien Griffe : *Discouver Lyon and its world heritage*, La Taillanderie, 2000
Guide-Joanne : *Bourgone, Morvan, Jura, Lyonnais*, Hachette, 1907
Guide Musée des Beaux-Arts Lyon, RMN, 1998
Guide Vert (Le) : *Lyon et la Vallée du Rhône*, Michelin 2002
Indicateur Lyonnais Henry, 1907, 1908 etc.
Louis Jacquemin : *Eglises de Lyon*, La Taillanderie, 2001
Christian Legrand : *Le logement populaire et social en Lyonnais, 1848-2000*, Editions au Arts, 2002
Henri Leroudier : *Lyon*, Fernand Nathan, 1966
M.-L. Louvicourt et J. Lazare : *Lyon au temps des années folles*, Ed. Des quatre seigneurs, 1980
Lyon 1906-1926, A. Rey , 1926

Lyon découverte, édité par Lyon Mag SAS,2002
Lyon et la Région lyonnaise en 1906, 2 vols, A.Rey et Cie, 1906
Lyon Photographie (collection des Archives municipales de Lyon et du Musée de Gadagne de 1840 à 1912) Scheibli Ed. 1998
Lyon rive gauche, Acte IIIe : Ed. EMCC, 2002
Lyon son histoire, sa légende, ses quartiers, Le Point, 2002
Lyon, ville lumière. Ed. Lyon capital. 2002
Serge Michel : *Chemins de Fer en Lyonnais*, 1827-1857, P.U.L.1986
Léopod Niopce : *L'Ile Barabe et le Bourg de Saint-Rambert*, Lib. Louis Brun, 1889
Léopod Niopce : *Les environs de l'Ile Barabe*, Lib. Louis Brun, 1892
Andre Pelletier et Jacques Rossiaud : *Histoire de Lyon*, 2 vols., Ed. Horvath, 1990
Andre Pelletier (dir) : *Grand Encyclopédie de Lyon et des Communes du Rhône*, Ed. Horvath, 1980-1989
Jean Pelletier : *Lyon pas à pas, son histoire à travers ses rues*, Horvath, 1985
Jean Pelletier : *Ponts et Quais de Lyon*, Ed. Lyonnaises d'Art et d'Histoire, 2002
Monique Penissard :*La Japolyonnaise*. Favre, 1988.
M. Piery : *Le Climat de Lyon et de la Région* Lyonnaise, Ed. Cartier, 1946
Le Progrès, journal (microfilms) 1906, 1907, 1908, 1909
Le Progres illustré, journal (microfilms)
Revue mucicale de Lyon, 1906, 1907, 1908, 1909
Richard : *Guide classique du Voyageur en France*, Librairie de L. Maison, 1855
Jean-Baptiste Roch : *Histoire des ponts de Lyon*, Ed. Horvath, 1983
Jean-Louis Rocher : *Trois siècle d'Opera à Lyon*, Catalogue de l'Exposition, 1982
Clausius Roux et Noré Bruel : *La vie galante à Lyon*, Les Editions du Fleuve, 1928.
Eric Roux-Fontaine : *Jardin Nomade*, Viile de Meyzieu, 2002
Jean-Luc Roux : *Le café-concert à Lyon XIXe-début XXe siécle*, E.L.A.H, 1996
Schweizer Schriftsteller der Gegenwart, Francke Verlag, 1962
Théâtre lyonnais de Guignol, Ancienne Librairie Mera, 1890
Tête d'Or, études, nouvelle et documents, Conseil d'Architecture, d'Urbanisme et de l'Environnement du Rhône, 1992
Isabelle Th nevin : *Revue mucicale de Lyon, Index*, (mémoire) 1982
Abbé Adolph Vachet : *A travers les rues de Lyon*, Laffitte Reprints 1982 (1902)
Abbé Adolph Vachet : *Glossaire des Gones de Lyon*, A. Stock, 1907
Maurice Vanario : *Rues de Lyon à travers les siècles*, Ed. Lyonnaises d'Art et d'Histoire, 2002
Vingt ans de théâtre de Lyon de 1906 à 1927, Petit-Jean, 1929
E. Vingtrinier : *Le Lyon de nos pères*, B.C.M. Ed., 1901
Anne-Marie Vurpas : *Le Parler lyonnais*, Rivages, 1993
Emile Zola : *Ecrits sur l'Art*, Gallimard, 2000

・そのほかいちいちあげていませんがリヨンの歴史地図や現代の地図、欧米の現代のガイドブック、またインタネットのサイトを参照しました。
・オペラの基本的な知見については同僚の城戸朋子氏に、横浜正金銀行については、東京三菱銀行調査部の佐久間浩司氏や正友会（旧東京銀行のＯＢ会）事務局の浦上和彦氏に、またリヨン支店長の小野政吉については孫にあたられる小野吉郎氏に多くの蒙を啓いてもらいました。また小野家所有の写真の提供（3，58、62，82、85、88）を受けました。
・写真、図版については今日のものは基本的にすべて筆者と家族の撮影によるものですが、荷風当時のものについては当時の絵はがきや図版を使用しています。所蔵資料以外に上記のリヨンの各図書館・資料館から借り出した資料からの複写なども含まれます。
・文献調査にあたっては、リヨン第2大学留学中（調査当時）の都立大学大学院（歴史学）の前田

更子氏に諸資料の所在機関等についての懇切な情報をいただきました。
・ここに記してすべてのかたがたにこころよりお礼を申し上げます。
本論考は法政大学在外研究成果報告書を兼ねます。

(2003年8月)